



案山子二〇二五
夏



新潟大学文芸部・編



目次

案山子二〇二五 夏号	
案山子二〇二五 夏号	3
目次	5
二〇二五 お題作品『嘘』	7
アサガオ／杉崎環生	9
李藻桃藻桃野内／宇宙人のお刺身	20
星屑なつき／花園の箱庭	26
Like a RollingStone／ボブ・ディラン	41
ここから／あけぼの	47
はばかり／夕立実	57
らるいとの／釉南	

ぐるぐるの／釉南	64
エイプリルフル／なすですな	
エイプリルフル／なすですな	70
分解／高瀬静	
分解／高瀬静	73
宇宙論的寄神／今泉とびら	
宇宙論的寄神／今泉とびら	80
五臓にポップなキスをして！／色即是空	
五臓にポップなキスをして！／色即是空	89
誰かのための／田村美結	
誰かのための／田村美結	96
夢中／田中冬夏	
夢中／田中冬夏	105
真実という嘘／杜江若糸	
真実という嘘／杜江若糸	113
奥付	
奥付	129

案山子二〇二五 夏号

目次

目次

杉崎環生	アサガオ
李藻桃藻 桃野内	宇宙人のお刺身
星屑なつき	花園の箱庭
ボブ・ディラン	Like a Rolling Stone
あけぼの	ここから、
夕立実	はばかり
釉南	いることの
なすですな	エイプリルフール
高瀬静	分解
今泉とびら	宇宙論的寄神
色即是空	五臓にポップなキスをして！
未定	誰かのための
田中冬夏	夢中
杜江若糸	真実という嘘

二〇二五
お題作品『嘘』

アサガオ／杉崎環生

アサガオ / 杉崎環生

アサガオ

杉崎環生

線香花火。皆さん知っていますよね？ 私、あれ大好きなんですよね。ぷっくりと膨らんだ蕾が次第に弾けて、花のように咲き乱れる。夏の夜の暗闇の中で何よりも美しい光、それは時間の許す限りいつまでも見ていたい輝き。でも輝く火花はとても短命で、余韻に浸る私の目の前で呆気なく散ってゆく。その美しさを手中に納めようと一歩歩み寄れば、揺れ動いて花は落ちてしまう。そういう美しさだけでなく儂く脆いところが私の心を掴んだのでしょね。

初恋の相手は誰？ と言われれば、誰だったかなと考える間もなくあの人の名前が挙がってくるでしょう。陽昇【はると】くん。私が小学校2年生の時にこの町に引っ越してきた一学年年上のお兄さんです。私の住む町は一言で言えば田舎ですね。都市部へ出ていく人が増加したせいかな、だいぶ過疎化が進んでいます。だから学校も学年ごとの人数がそこまで多くなくて、学年を問わずいろんな子と遊んでいます。陽昇くんとは家が近いのもあってよく近所の公園で遊んでいました。陽昇くんって運動神経がすごくいいんですよ。ドッチボールは一人だけとびぬけて強いし、鬼ごっここの鬼になったらすぐにみんな捕まえちゃうんです。それじゃ面白くないからって私たちはいつもかくれんぼとか虫捕りとか誰でも楽しめるようなことをしていました。

陽昇くんのことを恋愛的に見るようになったのはいつからでしょうか。よく覚えていません。気づいたときにはもう既になって感じます。あるいは初めて会った時からそういう気持ちはあったのかもしれないね。東京からやって来たという物珍しさなのか、それとも単に彼の人としての魅力なのか、きっかけなんて最早分からないですね。いやもうそんなことはどうでもいいのかもしれないです。彼を好きでいるという事実が全てです。

私の住んでいた町では毎年夏休みの時期に町で一番大きい神社でお祭りが行われていました。縁日もあったり、近くの河川敷で花火大会が開催されたりと町総出で盛り上げています。子どもたちはみんな浴衣を着ていくもんですから、周りの大人はみんな「かわいい、かわいい」と言ってくれます。

あれが中学校1年生の時の夏祭りの話です。私は小学生まで着ていた浴衣が小さくなったので新調することにしました。お母さんと一緒にデパートに探しに行き、色々試着して考えましたね。お母さんも店員さんも私に着替えるたびに「かわいい、かわいい」と言ってくれましたが、いまいち決めに欠けていました。というのも、その時は自分に似合っているかよりも陽昇くんの好みかどうかばかり気にしながら選んでいたような気がします。結局私はアサガオ柄の浴衣にしました。紺地に青い花が映えてすごく綺麗なんですよ。これなら陽昇くんにもかわいいって言ってもらえるだろうという自信が

ありました。

祭り当日、私は浴衣に着替えるや否や家を飛び出し、陽昇くんの家に向かいました。やっぱりこの浴衣を最初に見てもらうのは彼じゃなきゃ嫌でした。家に着き、陽昇くんを呼んでから気づきましたが、私は勢いよく走ったせいで髪がぐしゃぐしゃになっていました。とんだおっちょこちょいですね。髪を直す間もなく、陽昇くんが出てきました。

翠【みどり】ちゃん、こんにちはー。綺麗な浴衣だね」

「綺麗な浴衣だね」耳の奥でこの言葉が延々と響いていました。これを聞いただけで今日は大満足です。急いで見せに来た甲斐がありました。

「へへー、かわいいでしょ。陽昇くんは浴衣着ないの？」

「前着ていたやつはもう小さくてねー。買いに行く時間もなかったし普段着でいいかなって」

「えー、雰囲気出ないじゃん」

「まあ、僕なんかが着ても似合わないし、小っ恥ずかしいからねえ」

「見られるかなって期待してたのに……あ、それよりそろそろ出ないと集合時間に遅れちゃうよ」

「ごめんごめん、今用意してくるからちょっと待ってて」

ほんとは陽昇くんと二人で祭りを回りたいという思いもありましたが、それは心の中にとどめておいて、私たちはみんななどの集会場所へ向かいました。

祭りも終わりを迎えた頃、みんなで手持ち花火をしようって話になって、近所の公園に集まってミニ花火大会を開きました。私は日中の暑さにやられてぐったりとしていたので、隅っこの方で小さい子たちが花火で遊んでいるのを見ながら細々と線香花火を楽しんでいました。すると一人でいる私を気遣ってくれたのか、陽昇くんがこちらにやってきて、一緒に線香花火をすることにしました。「最近ほんと暑いよね」「毎日部活がきつくてさ」「夏休みなのに宿題多過ぎ」そんな他愛もない会話ばかりでしたが、予期せず生まれた陽昇くんと二人きりの時間を噛みしめていました。中学校でバスケットに入った陽昇くんは成長期ということもあって身長がぐんぐんと伸び、持ち前の運動神経もあってか一年生の時からチームの主力になったそうです。予想はしていましたが、陽昇くんは学年を問わずモテているそうで、私は彼とは昔からよく一緒に遊ぶ仲だと友達に話すとよく羨ましがられます。そんな学校屈指のモテ男を今独占できているという優越感が私の心の中を満たしていました。

そのような高揚感からでしょうか、私は不意に陽昇くんと口づけをしたという衝動に駆られました。もちろん私たちは付き合っていないませんが、彼が誰かのものになってしまいう前に私のものになりたい。そんな思いがこみ上げ、溢れかえって、気づいたときには私の顔は陽昇くんの方に近づいていました。しかし、強引に近づいたからでしょうか。体の揺れが線香花火に伝わってしまい火種がぼとっと落ちて、私はそこでハッと我に返りました。陽昇くんがこちらを見ましたが、私は平静を装い、次の線香花火の準備をします。ちょうどその時が夜で良かったです。自分でも火照っているのがよく分かるほどに私の顔は紅潮していたことでしょう。暗さのおかげで陽昇くんにはバレずに済みそうです。

思えば、あそこで踏み止まれて良かったですね。一時的な衝動で陽昇くんとの関係性にひびが入ってしまった可能性もありましたし、私の中には彼に対する「好き」という感情はありましたが、実際により大

人な関係へ足を踏み入れてしまうことが当時の私には恐ろしいものでした。私の中の未熟な感情はしっかり熟れるまで心の内で育てておこう。私はそう決意したのです。

自分でいうのも変ですが、私は自分の外見にかなり自信があり、校内でもかなりモテる部類に入っているのは自負していました。クラスの人気者やサッカー部のキャプテンに告白されたこともありましたが、そのすべてにNOと返事をしてきました。時にはそのせいで一部の女子からは反感を買うこともありましたが、別に気にすることはありませんでした。陽昇くん以外の男に異性としての魅力を見出せませんでしたから。

「翠、また男振ったの？」

まったく、情報が出回るのが速いですね。一体毎度毎度どこから情報が漏れているのでしょうか。まさか、告白の現場を誰かに見られているとか？ これからはもう少し周囲の状況に留意するようにします。まるで、今後も告白され続けることが分かり切ったような物言いでした。でも実際そうなのだから仕方ないですよ。

紹介が遅れてしまいましたが、私が今話している相手は同じクラスの蒼【あおい】ちゃんです。一年生の時に会って、「お互い色の名前だねー」なんて話題から話すようになって、今では一番の親友です。お互い部活があるので、放課後は一緒に帰ったり遊んだりということはめったにできませんが、お昼ご飯はこうやって一緒に食べるわけです。この調子だと、今日の話題は昨日の告白の件で持ちきりのようです。いつもは「まあ」とか「ああ」みたいな曖昧な返事でその場を切り抜けますが、その日に限って彼女は食いついてきました。

「てか、翠って好きな人とかいないの？」

「んー、今はないかな……」

「えー翠なら誰でも付き合えそうなのに勿体ないなあ」

「そんなことないって」

咄嗟に出してしまった嘘ですが、自分の気持ちを否定したようですごく心苦しいです。ほんとは今すぐにも私の愛を叫びたいのに。高校で陽昇くんのことを知っている人はせいぜい小中の同級生だけです。うが、バレるといろいろと面倒くさそうなので誰にも言わないようにしています。よく言うじゃないですか、願いは口にすれば叶わなくなるって。私は自分の願いが叶うまで胸の内を明かすつもりはありません。結局その日は適当に誤魔化し続けて何とかりましたが、いつまで隠し通せるでしょうか。いっそ蒼ちゃんには話してもいいかなと思う瞬間も多々ありましたが、結局言わずじまいでした。どんなに仲がいい相手にでも打ち明けたくないことの一つや二つ、誰にでもありますよね。

陽昇くんが東京の大学に進学すると聞いたときは本当に驚きました。いつも近くにいる存在として当然のように認識していたわけですから、彼になかなか会えなくなるという事実が私には受け入れがたいものでした。彼の出発の日には目の前で泣き出していました。いい年して恥ずかしいなって後から思います。

「いつかまた会えるから、そんなに泣かないで」

彼はその場を収めるために何とか取り繕ったのでしようが、私はその言葉を真に受けました。離れたくなければ、追えばいいのです。そうか、私も東京の大学に進学すればいいだけじゃないですか。

子供ながらに私は早くこの町を出ていきたいと思っていました。もちろん友達と遊ぶことに何の不满もありませんでしたよ。でも、こんな平凡で何もない町に私は辟易していました。テレビで紹介されるのはいつも東京のお店。片田舎に住む私にはまったく無縁の世界のものですよ。おかしい話ですよね、まるでこの国には東京以外に街は存在していないぞとでも言う勢いですよ。田舎生活からの脱却、陽昇くんの上京。これだけの材料があれば、私が東京を目指す動機としては十分すぎるくらいです。

私も東京に行くにしても私の頭脳で行けるのかというのが大きな問題でした。万年赤点ギリギリの私には東京の大学への進学は夢のまた夢でした。でも私は諦めませんでしたよ。陽昇くんのことを思えば、何でも頑張れる気がしました。紆余曲折色々ありましたが、私は無事試験に合格し東京へ行けることになりました。

夢にまで見た東京というのは、衝撃的な場所でした。テレビで見る街並みとは比べ物にならないくらい活気にあふれていました。人の往来は絶え間なく、自分の地元がいかにも田舎であるかを改めて実感させられました。それと、東京ってこんなにもオシャレな人間に溢れかえっているのですね。地元ではそれなりにかわいい部類だったはずの私がこの空間では浮いているように思えます。陽昇くんはこんな環境で一年間過ごしてきたのですね。悪い人間に絡まれていないでしょうか。そんな不安を胸に私の東京生活は始まりました……

私の過去の回想はこころまでにおきましよう。突然ですが、私は今陽昇くんが在籍しているT大学の学祭に来ています。もちろん、彼には行くなんて話していませんよ。偶然を装って、感動の再会を果たすという魂胆です。でも、別に彼の顔を一目見られればそれで満足かなって気もします。何にせよ、この人だからの中から見つけ出さないことには何も始まらないのです。

とりあえず30分ほど歩きまわってみましたが、そう簡単に見つかるものでもないですね。私に限って陽昇くんの顔を忘れるなんてことあり得ませんから、見かければすぐに分かるはずなのですが……客引きの方々には捕まると面倒ですから、上手いことすり抜けていかななくてはなりませんね。

2時間ほど探し回って、自分のしていることの無謀さによく気がきました。諦めて帰路に着こうと出口へ向かう途中、ふと横の方に目をやると、そこには彼がいるじゃないですか。やや遠目からですが、彼に間違いありません。何という偶然でしょう。私は衝撃で足が動かなくなりました。見失わないように目線だけでも彼の方を追い続けると、おや？ 彼の横を女性が歩いているじゃないですか。二人で何やら話していますね。女性の方は明らかに陽昇くんに好意を抱いているのが分かるし、周りにその仲をアピールしているようです。

私は何を見せられたのでしょうか。新たな環境で生きる彼はとても楽しそうに私の目には移りました。結

局私は過去の陽昇くんの姿を追い続けているだけなのでしようか。私はただ二人が去っていくのを見届けることしかできません。見えなくなったところで私は再び帰路につくため歩き始めました。私が今日見た光景は全部嘘であってほしい、そう強く願うほかないです。

学祭の一件以来しばらくは食欲もなくなり、何事においても無気力になってしまいました。別に陽昇くんの人生なのだから、私が口を出す権利など毛頭ないのですが、彼の横に立つのは私でありたかったという思いを否定することはできません。仮に私の恋が実らなくとも、彼が他の女性の元へ行ってしまうという事実だけはどうにも受け止めきれぬ自信がありません。ずっと追いかけていた背中を突然見失ったような感覚に私は絶望してしまいました。

何もやる気が起きなかったのとどろあえず久しく放置していた眩きサイトを開きます。大学入学にあたってアカウントを作ったはいいもののサークル勧誘のDMが来るばかりで何の面白味もありません。みんなは何が楽しくて顔も名前も分からない人と交流するのでしょうか。好きなアーティストやインフルエンサーの投稿を追うためにアカウントは残していましたが、最近は開くのも億劫になっていました。相変わらず、サイト上では見ず知らずの人間同士のくだらない言い争いやスキャンダルを起こした芸能人への誹謗中傷が絶えず生まれています。みんな退屈なのですね。

ふと、ある人の投稿が目に入りました。

「運命的な再会を果たして付き合い始めた今カレと最近じゃもう結婚も現実的かなって思い始めたら、彼に別の女がいるって判明したんですけど……しかも私と付き合っていた期間より長いし。私に伝えてくれた愛情表現は何だったの？　もう最悪、死にたい」

まったく、愛とは何なんでしょうね。一時的な欲だとか感情に任せて軽々しく言わないでほしいですよね。「永遠の愛」なんてもってのほかです。でもまあ、私も簡単に愛を語ってしまう節はあるので自制しなくてはいいけません。きっとその瞬間はその愛が真実であろうとそのうちあの言葉は嘘だったの？　なんて言われて関係が終わっていくんですよ、結局ね。先のことが見えない私たちがなぜ永遠を語れるのでしょうか。

とはいえ、真に「永遠の愛」を語れるようなことがあれば、どれほど素敵なことか！　なんてよく考えてしまうのが私です。だってそうでしょう、好きな人が生涯好きな人であり続けるだなんて、これ以上の幸せがほかにあるとは思いません。

そういえば、この方の投稿の引用元には数年前に彼と再会した時のことが書かれていますね。

「この間、買い物しに出掛けていた時に地元の同級生の子と再会したの。まさかあっちも上京していたとはねえ、そのままその日は食事に行って私『昔あなたのこと好きだったの』なんて赤裸々に話したら、

なんか付き合うことになっちゃった。急展開過ぎて理解が追いついていないけど、とりあえず今は幸せです」

見れば見るほど、彼女のことを哀れに思えてきます。彼女の幸せな未来を願って私はそっと携帯の電源を切りました。

ふと冷静に考えてみたら、学祭の日に陽昇くんを横を歩いてきた女性は本当に彼女さんなのか。同じサークルの人で買い出しに行っただけで私の思い込みという可能性もありますよね。やはりここは本人に確認をとるほかないのでしょうか。思い立ったが吉日です。私はもう一度携帯を開き、すぐにメールを送りました。

次の日の朝でしょうか、陽昇くんの方から返信が来て、私たちは夏休みに会って遊ぶことになりました。まさかまさかの急展開ですね。あわよくばーなんてこともあるかもしれませんが。そうこう考えているうちに、私は失っていたやる気を徐々に取り戻していきました。陽昇くんに会えるという事実があるだけで今なら何でも頑張れそうです。

これはやはり神様が与えてくれたチャンスなのでしょうか。この先も陽昇くんに女が寄ってこないか不安に駆られながら生きていくくらいなら、このタイミングで私から動き出すしかないのでしょうか。でも、ここで私たちの関係が動き出したら、いつか終わりが来るような気がしてとても怖いのです。この気持ちを永遠のものにするにはどうしたら、いいのでしょうか。無理なことだとは分かっていますが私はその方法を求めてしまいます。

結局一週間近く考えに考え抜いて私は一つの答えにたどり着きました。あとはその時が来るのを待つだけです……

久々に会った陽昇くんには面影はありつつも、どこか別人のような顔つきをしています。数多くの苦労や挫折を味わったような面持ちです。でも、ふと笑った時の顔を見て、目の前にいるのがまぎれもなく陽昇くんであるということを確認しました。

デート、遊ぶといっても映画を見て買い物をして、ご飯を食べに行くという至ってありきたりなプランです。何も劇的な出来事なんて起こるはずもないけれど、陽昇くんの横を歩いているという事実だけで私は幸せの絶頂にいました。

ご飯を食べた後、少しゆっくりしようと思いつくと陽昇くんの下宿先に近い公園へ行くことになりました。私的にはいろいろ都合がいいので断る理由もありません。なんだかんだで一日中動き回っていたのでだいぶ疲れましたね。お互いしばらく休憩してから私は例の件について尋ねることにしました。

「は、陽昇くんは、い、今彼女とかいるの」

あまりに唐突で不自然な物言いでしたね。これじゃあ私の意図がばれてしまいますよ。一瞬びっくりしたようでしたが、陽昇くんはすぐに答えます。

「急にどうしたの？ 別に今はいいけど」

今、いないって答えていましたよね？ それはつまり今はフリーってことですよね！？ 彼の様子からして、嘘ではないのは確かです。望んでいたはずの答えだったのに私は動揺して次の言葉がなかなか出てきません。

「こそ、そうなんだ」

もっと言うべきことがあるでしょうに、私の大馬鹿野郎ですね。だけど、ここで引き下がるわけにはいきません。今日この瞬間のためにいろいろと準備してきたのですから。私は彼に「永遠」の愛を伝えたいのです。

いざこれからという時に今まで感じたこともないような緊張に襲われました。自分が今からしようとしていることは、冷静に考えれば常軌を逸しているのかもしれない。でも私のこの願いを叶えるにはこれしか思いつかなかったから仕方ないのです。喉が乾ききってうまく声になるか自信がありません。でもこれは自分の言葉で伝えなければいけないのです。私の最初で最後の大恋愛の結末が今日ここで明らかになります。

「私実はね」

私は今どんな顔をしているでしょうか。感情がそのまま出ているのであれば、ひどく醜い状態でしょうね。でもいいんです。陽昇くんが今私の顔を見ていてくれるだけでいいのです。私が10年間以上かけて育て上げた感情は見事なまでに熟し、今咲き誇る時が来たのです。

おもむろに私は鞆の中から「あれ」を取り出します。

正直、進学をきっかけに東京に出てきたことを後悔している。人と物で溢れえったこの町は僕の心を何も満たしてくれなかった。昔住んでいた時には気づかなかったけど、都会の人間関係はこうも希薄なものなのか。せわしなくどこかへ向かって歩いていく人、手元の携帯に注視している人、音楽の世界に入り込み外界を遮断している人。機械的に人が行き来するだけの空間に人の温もりなんてものは微塵もなかった。

幼い頃から親の都合で引っ越しを繰り返していた僕には幼馴染と言える友人がいない。一人っ子ということもあって僕は常に孤独であった。だから、小学三年生の時に引っ越して以来ずっと住んでいたあの町は僕にとって特別な場所だった。毎日毎日、日が暮れるまで遊んで、雨の日は誰かの家でゲームやらトランプをして。周りの子たちからしたら、ありきたりな時間なのかもしれないけど、僕にとってはかけがえのないものだった。

特に近所に住んでいた一個下の翠ちゃんによく懐いてくれたな。よく東京ってどんな街なのって聞か

れて、僕も大して詳しくないけど言いつつ、いろいろな話をした。どんな些細なことでも翠ちゃんは興味津々に聞いてくれた。まるで妹ができたような感覚だった。

翠ちゃんとは中学校までは同じ学校だったけど、高校進学を機に別々になってしまった。会おうと思えば会えそうなものだったが、世間は新型の感染症が蔓延していて、あまり外出したり人と会ったりということができない状況だったり、そもそも学校や部活が忙しいのもあったりで徐々に疎遠になってしまった。思い返せば、一緒にいるのが当然のような存在であって、彼女がいない生活に違和感を覚える時もあった。だけど、そこは幼い頃の度重なる引越しの経験もあってか、環境の変化に順応するのはそこまで苦労しなかった。

正直、このままこの町にいたいという思いもあったけど、「君の成績なら都内の国公立も狙えるぞ」と担任の先生から背中を押され、とりあえず挑戦するかくらの感覚で臨んだら、そのまま上京することになってしまった。

出発の日、翠ちゃんも見送りに来てくれたのだが、突然泣き出してしまった。誰よりも別れを惜しんでくれるところを見るに本当に懐いてくれていたんだなと実感する。そんなに泣いてしまったらせつかく綺麗な顔が台無しだ。

「いつかまた会えるから、そんなに泣かないで」

確証もないことを軽々しく言うものではないと思いつつも、その言葉に嘘はなかった。これから先の人生でここにいるみんな以上の人と出会えるのだろうか。もう少し感傷に浸りたかったが、流れゆく時間はそれを許してくれなかった。

大学の授業は楽しかった。高校までのようなやりたくない教科をやらされる時間はほとんどなく、自分の興味のままに学びたいことを学べた。一応バスケットボールに入ってみたのはいいもの。そこまで楽しくはなかった。バスケットに対する熱量の差なのかな。男目当てでそこまでバスケットに関心がなさそうな女子たち、そんな女子たちと遊ぶことしか頭にならないような男ども。入学して一か月もしないうちに辞めてしまったが後悔はしていない。バスケットをしたいならどこかの体育館にでも赴けばいい。昔から星を見るのが好きだったこともあり、結果として天文サークルに入ることにした。

この間、翠ちゃんから久々に連絡がきた。翠ちゃんもどうやら東京の大学に進学したらしい。授業の課題やテストに追われて忙しい日々だったけど、夏休みになって時間に余裕ができたら久々に会いたいとのこと。たしかに僕も大学とバイトが忙しくて久しく実家に帰れていなかったし、地元トークに花を咲かせるのも悪くないな。積もる話もたくさんありそうだ。

久々に会った翠ちゃんは変わっていなかった。化粧をしてかなり大人びた雰囲気になっていたが、幼い頃のような無邪気さをどこに残している。

普段家と大学の往復しかしない生活だから、東京生活歴では僕の方が長いはずなのに、なぜか彼女の方がこの東京という町に詳しい。僕と違ってこの場所に希望をもってやって来たのだろう。普段は見ないようなジャンルの映画、煌びやかな雰囲気漂う大通りでの買い物、数日分の食費に相当しそうなお高

めのレストラン。全てが僕にとって新鮮で刺激的だった。僕が数年間忘れていた人生の楽しさを翠ちゃんが思い出させてくれたようだった。

「食事を終えた後、すぐに解散というのも味気ない気がしたので、レストランが家から近いということもあるので僕の部屋にでも行こうかなと思っただけど、付き合ってもない相手を部屋に急に連れ込むのはいろいろとまずい気がしたのでとりあえず近くの公園で休むことにした。人影もほとんどないし、ゆっくりと話すならちょうどいい。僕たちはすぐそばのベンチに腰を掛けた。サークルの活動で何度か郊外の方まで星を見に行っただけど、ここ最近はまだあまり見ていないな。今空を見上げたところで、街の明かりにかき消されて星はそこには見当たらない。すぐ近くに車通りの多い道があつて夜でも賑やかな場所だと改めて思う。」

「そういえば、前にもこんなシチュエーションあつたな。いつだったかな？　中学生くらいの時に二人で線香花火を見ていたような気がする。またあの頃みたいにみんなで遊びたいな。翠ちゃんも同じ気持ちだろうか。ふと横に座る翠ちゃんに目を向けると彼女は話し始めた。」

「は、陽昇くんは、い、今彼女とかいるの？」

「だいぶ唐突な質問だった。返答に困るわけでもないし手短かに答えるか。」

「急にどうしたの？　別に今はいないけど」

「翠ちゃんは驚いた様子でこちらを見ている。」

「こそ、そうなんだ」

「翠ちゃんは何で急にこんなことを聞いたのだろうか。まさか、僕に告白しようなんてことはないだろうな。さすがに思い上がりすぎだな。翠ちゃんの方こそ大学で彼氏を作っけてもおかしくないだろうに。」

「思えば、僕は人のことを好きになつたことがない。友達として好きになることはあつても、誰かを恋愛的に見たことがない。いや見られない。僕は人間関係に大切なのは距離感だと思つている。遠すぎたらその人のことがよく分からなくなってしまうけど、近すぎたら衝突やすれ違いが増えてしまう。どんなに仲のいい友人だつて踏み入れたくない領域はあるし、こちらから相手の領域に踏み入るつもりもない。恋人なんてのはもつてのほかだ。僕は誰とでも「丁度いい」関係を持ちたいのだ。何度か告白されたこともあるけど、一度もOKを出したことがない。これからも出てくることはないだろう。」

「僕は男女の友情は成立するものだと思つているし、翠ちゃんともせっかく再会できたのだし、また一緒に遊ぶ関係になれたらいいなと思う。」

「私実はね」

「翠ちゃんが鞆から何かを取り出す。暗くてよく見えないがタオルか何かに包まれているのが僕には分かつた。タオルを外し彼女は「それ」を手を取つた。震えながら「それ」を握つた彼女の顔は笑つているようにも泣いているようにも見えた。どんな表情であっても彼女はいつも綺麗な顔をしていた、だけど

この瞬間ばかりはどこか狂気じみっていて、恐怖すら感じるものがあった。

次の瞬間、彼女の手が僕の胸をめぐって一直線に差し出される。彼女の手の中にあるもの、その先端の鈍色の輝きを認識したときにはもう手遅れであった。意識が無くなる直前、彼女が口を動かし何かを言っているように見えたが、その声は町の喧騒にかき消され、僕の耳には届かなかった。

……続いているニュースです。先日8月20日に起きた、都内在住の大学生松本陽昇さん20歳が自宅近くの公園で何者かによって殺害されるという事件について、警察は目撃情報などを基に捜査を進めた結果、同じく都内在住の大学生笠原翠さん19歳が殺人の容疑で逮捕されました。容疑者は容疑をおおむね認め、警察の取り調べに対して「彼が他人のものになる前に人生を終わらせたかった」などと供述しております。警察は被害者との関係や事件に至った経緯などについて引き続き捜査を進めていく模様です。

それでは次のニュースです。連日猛暑が続いておりますが、〇〇県では今日最高気温40.2℃を記録し……

李藻桃藻桃野内／宇宙人のお刺身

李藻桃藻桃野内/宇宙人のお刺身

宇宙人のお刺身

李藻桃藻 すもももももも
桃野内 もものうち

「毎年毎年もうこりこりだよ！」

恵えみ賢み小学校三年一組出席番号五番の反若潤一【ふけた・じゅんいち】は、家族会議を経て数日前にやっと手に入れた彼の部屋の中で叫んだ。お気に入りのカメさんのぬいぐるみが、こてん、とたおれてしまった。今日は三月三十一日。エイプリルフールの前日である。毎年四月一日、潤一は友達からたくさん騙される。その挙句、彼のウソに騙される子は一人もないのである。去年は「日本語が改定されて、『あ』が『う』の音になる」というウソを信じてしまった。

「どんな嘘を言えばいいのかわからないのに、毎回毎回騙されて……。道德の時間に『嘘をついてはいけません』って習ったのに！ どうして、間違ったことをやっていい日なんてあるんだよ！ おかしいよ！ もう誰も信じられなくなっちゃうよ！」

お母さんが作った朝ごはんを食べて、着替えをしながらぶつぶつと独り言を言う。この年ですでに世の中の理不尽を感じているようだ。大量の教科書とノートが詰め込まれたランドセルを背負い、元気に「いってきます」を言って、晴れ渡った空の下に飛び出していく。

潤一が見据える先には、彼が属する登校班が集まっていた。毎年の四月一日で因縁がついている少々ぼっちゃりした男の子とおかっぱ姿の女の子がいた。

すると、男の子のほうである伊豆新一いずしんいちがさっそく潤一に声をかけてきた。

「おはよー、潤ちゃん。そういえば、明日は何の日か覚える？」

潤一は、ムツとしながら答える。

「おはよー、新ちゃん。もちろん覚えてるさ。毎年嫌な気持ちになる、エイプリルフルさ。ずっとウソ考えているけど、全然浮かばないね」

すると、同じ班で女の子の方、子瓜歩夢こうりあゆむが話に入ってくる。

「おはよー、潤ちゃん。いつも潤ちゃん、ウソ信じてくれるもんねー。私もウソのつきがいあって毎年楽しみだよ！」

おっとりした声で、小学三年生の潤一の心をえぐってくるような発言である。潤一の顔は膨れて、まるでハリセンボンのようなものである。すると、潤一は言った。

「おはよー、あゆちゃん。ふん！　俺は今回のウソには自信があるんだ！　ぜっつっつっつたいにみんなだまされるもんね！　だまされなかつたら二人の分の宿題をやってあげるよ！」

すると、新一と歩夢は眼をきらきらさせて喜んだ。

「やりい！　放課後たくさんゲームしよう！」

「友だちの家について、メイクの練習でもしちゃおうかな」

どうやら彼らの中では、潤一が宿題をやってくれることが確定してしまったらしい。潤一は、顔を真っ赤にしてもう一度膨れてしまった。こんどはハリセンボンというよりも、タコのようなだった。

潤一は、登校し、授業を受け、給食を食べて、昼休みに本を読んで、もう一度授業を受けて、今現在下校の時間である。なんと、彼が思いついたウソは、「昨日の夜ごはんは、宇宙人のお刺身だったよ」だけだった。明らかにこんなウソは、ばれるに決まっている。潤一は、帰りの会が終わってざわざわしている教室の中で頭を抱えていた。

「このままだと宿題がいっぱいになっちゃうよ……。どうしよう……。ネットで調べてみようかな……」

すると、毎週配られる学級プリント「エミル通信」に、ある人のインタビューが乗っていた。近所に住んでいる安里鐘人博士あんりなるひとのものであった。彼はなんとタイムマシンや投稿を必ずヒットさせるようなアプリを開発したほど、すごい人らしい。ここで潤一はピンときた。こんなに頭のいい安里博士の力を借りれば、誰でも騙せるウソをつけるのではないだろうか。潤一はランドセルをさっそく背負って、学校の外に飛び出していった。

潤一は決して考えなしに飛び出したわけではない。登下校の時に、大きな怪しい建物を毎回見ていたのだ。同級生たちが、幽霊屋敷と称していたが、あれはきつと博士がいるに違いない。そう思いながら、いつも見ていた建物の前についた。大きな看板に「安里研究所」という難しい文字が書いてあったが、意

を決してインターホンを押す。

すると、思ったよりも高めの声で、応答してくれた。潤一はとても緊張したが、お願いしてみた。

「すみません、僕にばれないウソをつかせてください！」

安里博士は少し考えているのか、何も言わなかった。しばらくすると、ドアが開き、安里博士らしき人物が迎え入れてくれた。大きめの白衣なのか、両手が隠れてしまっている。自分らと同じくらいの年のようだが、眼の下にある黒い線のおかげかよく分からない。

「いらっしゃい、少年。さあ、入ってくれ」

安里博士に言われ、建物の中に入る。ごちゃごちゃように見えるが、廊下や部屋にゴミなどは落ちておらず、清潔である。潤一にとっては、少し高い椅子に座らせてもらおうと、安里博士はオレンジジュースを用意してくれた。

潤一がオレンジジュースを味わっていると、さっそく安里博士が話を始める。

「君の名前はなんだい？ ……」

ふむ、潤一君か。潤一君、来てくれてありがとう。絶対にばれないウソをつきたいという話だったよね」

潤一は、首をぶんぶん縦に振る。

「そうかそうか。じゃあ、潤一君に今我々が開発しているものを使ってみてほしいんだ。それがこの『嘘酢』だよ。この『嘘酢』は、我々の酵母に作用して…」

（中略）…と、いうわけで絶対にみんなにウソがばれないようになるんだ。つまり最強のウソ上手になれるわけだ」

難しくわけの分からないところもあったが、まるでウソのような話だと、子供ながらに思った。すると、安里博士がそれを見透かすかのように、にこりと微笑みかけてきた。

「信じられないかと思うけど、これは僕たちが頑張って作ったから、ウソなんかじゃないよ。すごく酸っぱいけど、飲めば効力が発揮されて、そこから一日の間ウソが絶対にばれなくなるんだ。使い方も簡単だろ？ 飲んで体が悪くなるわけでもない。ぜ

ひ、君に試しに使ってほしいんだ。いいかい？」

潤一には、安里博士がウソをついているとは到底思えなかった。そこで、安里博士の善意にのっとり、ありがたく受け取ることにした。

安里博士に「ありがとう」と伝え、安里博士の建物を飛び出していった。これで、今までのくやしさを晴らすことができる。みんなの宿題もせずに済む。一目散に家に帰ってリビングに駆けこんだ。安里博士からもらった嘘酢の瓶を見つめる。見た目は普通のお酢だが、ラベルには書道のプロが書いたような文字で「嘘酢」とでかでかど書かれている。瓶は小さめで、リポビタミンDより一回り大きいくらいである。潤一は、ソファに座りながら、ニヤニヤしてしまう。

「ついにみんなをあとと言わせることができるぞ！　なんてラッキーなんだろう！　早く飲んで誰かにウソをついてみよう！」

すると、知らないところで、知らない人と話し、重い瓶を持ちながら走って帰ってきたというところもあってか潤一に強烈な睡魔が襲ってきた。嘘酢は後でのもう。こんなことを考えながら、ソファに寝っ転がり、夢の世界へダイブしていった。

「じゅ…！！…よ！　潤一！　起きて！　ご飯できたよ！」

驚いて目を覚ますと、お母さんが潤一の肩をゆすっていた。時計を見るともう7時を指し示している。いつのまにかお父さんも帰ってきてきているようだ。ぼーっとしながら歩いて真っ白で四角いテーブルにくく。おいしそうな料理がたくさん並んでいる。手を洗ったお父さんが席に座り、家族全員で「いただきます」を言って食べ始める。

今日のメニューは鳥の手羽元である。少々酸っぱめの味付けがなされているが、さっぱりしていて食べやすい。ご飯もどんだん進む。サラダもお母さんが作ってくれたらしいドレッシングが使われており、これが絶品なのだ。味噌汁も、もちろんおいしい。潤一はお母さんの料理が世界で一番おいしいと思っている。次点でお父さんのナポリタンだ。

夕飯を食べ終わると、潤一は満足げに「ごちそうさま」を言う。お皿を下げて、ソファに向かうとある違和感に気づいた。

「嘘酢がない…」

辺り一面見渡してみても、隅々まで探してみても見つからない。なくしたわけではなさそうだし、しっかり家まで持って帰ってきた。そこで、何か知らないか、お皿洗いをしているお父さんに聞いてみる。

「いや、知らないなあ。見てもないぞ」

すると、お母さんがリビングに入ってきて、その話を聞いて言う。

「え？ あの机の上に置いてあったお酢、使っちゃダメだったの？ ごめんなさい。今日の鳥の手羽元の味付けに全部使っちゃったわ。お酢を切らしていたし、量がちょうどよかったから…」

潤一は愕然とする。勝手に使うなんて。なんてひどいことをしてくれたんだ。これじゃ明日のウソが思いつかないよ。

「もう！ 勝手に使わないでよ！ あれは僕のものだったのに！ しかも全部使っちゃったの！？」
すると、お母さんが潤一の言葉に反応する。

「全部どころじゃないわよ。1000本も使っちゃった」

潤一はお母さんの不可思議な発言に何も言葉が出なくなってしまった。わけが分からない。冗談にしても、すぐばれるようなウソをどうしてついているのだろうか。

お酢を料理で使う際に、熱を加えると酸味が弱まり、我々が食べやすいようになる。嘘酢も同じように、食べやすく、ほどよい酸味になると同時に、その効力も弱まってしまった。効力が弱まってしまった結果、嘘酢を摂取した人は意図せずに、分かりやすいウソをつくようになってしまったのである。

次の日の朝。潤一の地域の登校班が徐々に集まり始めている。すでに新一と歩夢は、うきうきしながら潤一のことを待っている。すると、向こうから潤一が歩いてきた。登校班に合流し、新一と歩夢は潤一がどのようなウソを、いつ、ついでくるのか楽しみにしていた。
すると、潤一はゆっくり口を開き、こういった。

「昨日、僕の夜ご飯、宇宙人のお刺身だったんだ！」

星屑なつき／花園の箱庭

星屑なつき／花園の箱庭

花園の箱庭

星屑なつき

ここは、花園だ。

皆、看護という光の下で一斉に開こうとしている。どこかに忘れた春を、取り戻すように。

最終コマの講義が始まる頃、切なげに揺れる春の光は頼りなく傾きかけていた。

準備室の隅にある細長い窓から仄かに金色が差し込み、床に長い影を落としてゆらゆら揺れる。廊下の奥の喧騒、バインダーに乗せた紙を引っ掻くシャープペンスルの音、収まりの悪い車椅子たちのぶつかる金属音の中で、その光だけが妙に静かだった。

「おっけー、つかさもサイン書いて」

澄玲すみれが茶色のバインダーに、半透明のシャープペンスルを乗せてよこしてくる。ユニフォームの袖を通した腕は細く、首筋から肩にかけての線が少しだけしなやかに見える。

「二週連続で片付けじゃんけんに負けるなんて、私も澄玲も、つくづく運が無いよね」

ストップパーをかけて尚もグラグラと不安定に動く車椅子を一度蹴りつけ、片付け責任者の欄に「二三八〇八、佐伯つかさ」と書きつける。連名の「二三八二六、日向澄玲」の文字はカリグラフィのように細く滑らかで、私の書く、角張って荒っぽい文字が途端に恥ずかしくなった。

「書けた？　じゃあ、帰ろっか」

少し疲れたような顔色の澄玲は、それでもいつも通り花が咲くような笑顔を浮かべて、円柱というよりは三角錐に近い形の儂げな指先で鍵をくるくると振り回していた。

私はふと、自分が遠心力に引っ張られるような錯覚に襲われる。階下で笑い声を上げながら訪問看護の演習をする先輩たちも、自宅で必死に国家試験の参考書と格闘している最上級生も、この初夏の焦れたい時期には皆一様にこうして鍵を指先で振り回していたのだろう。自分たちが何か大きな力で振り回されて、ぐるぐる回っているうちにバッテリーになっちゃった虎みたいに、甘くて優しい流動体になっていくのを感じながら。——ここに来るまでは、全ての外力を乱反射してキラキラ光る多面体だったはず——そんな記憶に「思い込み」と名前をつけ、回転の渦の中に溶かし込んで……

「つーかさ！　どした？」

澄玲の瞳はまだその渦を見つけていない。ガラス玉のような、透き通った瞳だ。

「うーん、なんでもない。ちょっと疲れただけ」

はっきり言って、澄玲は看護師に向いている。優しくて明るくて、純粹。何より、とっても綺麗。ユニフォームとそっくり同じ、真っ白な心と身体。

だから、こんな気持ちを知らないまま、真っ白なまま卒業すればいい。

「そっか。じゃ、ロッカー寄って帰ろう」

ガチャリ、錠が回る。金属の刃が噛み合う嫌な音がして、居所の定まらない車椅子と金色の光は準備室の中に閉じ込められる。

私と澄玲の、今日というもう返ってこない美しく貴重な時間と一緒に、永久に封印される。

甘い残り香のする更衣室を出て、無表情な灰色の塊が並ぶ廊下へ抜ける。「看護二年」そう書かれた掲示だけが彩りの物言わぬ箱たちは、うら若き女の子たちの持ったつぷりの秘密を入れておくにはあまりに細く、そして簡易的なダイヤル鍵はあまりに脆い。

「いやあ、ほんとに嫌になっちゃうよねえ。何が『大学は人生の夏休み』だよ!」

澄玲はロッカーの中身をそっくり詰め込んだトートバッグを振り回す。どうやって管理しているのか手荷物も少ないし、ロッカーの中に置いているものと言ってもユニフォームくらいで、きつと学年で一番物が少ない。澄玲には、秘密を詰め込むためのスペースも、不満を持ち歩くための大きなリュックもいない。

「先生たちは私達の一日が四十八時間だと思っているんじゃないかな」

ここで何を言ったところで、授業も課題も減りやしないし、時間や所持金が増えるわけでもない。理性の部分ではそれを分かっている。

「マジでそれ! しかも、うちらが駅前の高級ホテルに住んでて、バイトなんかしなくても黙ってたって口座にガンガンお金が入ってくる身分だと思ってるんだよ」

澄玲は四八番ロッカーのダイヤルキーをガリガリとひっかき、音楽番組やドラマに引っ張りだこの「推し」の誕生日に照準をあわせる。スマホやパソコンの壁紙も全部そのアイドルに統一しているから、澄玲のことをちょっとでも知っている人にとってはこのロッカーはほとんどパブリックスペースに近い。

私は二〇番ロッカーのつまみをひねり、予備のタオルや使わなくせに重すぎる教科書なんかをぎっちり詰め込んだ内容をさらけ出す。一応整頓しているけれど今にも飛び出しそうな私の心と、物が少なくていつそ殺風景なほどすっきりとしている澄玲の心。ロッカーは、私達を映し出す鏡のような気がしてくる。

「明日って、公衆衛生のアレの提出日だっけ?」

「うん、そうだよー。でも先生ゆるい人だし、多分ちょっと雑でもだいじょぶじゃない?」

そうやって話している間も、澄玲の細い指が奏でる「ガリガリ」の音がいつまで経っても止まない。

「どうした?」

ロッカーの扉を少し閉めて顔を向けると、澄玲はロッカーの前にしゃがみ込んでダイヤルをひっかき続けていた。

「あれ? なんかね、開かないの」

「は?」

私はリュックからスマホを引っ張り出し、手術室の推奨照度と同じくらい眩しい笑顔を向ける「推し」の名前を検索する。

「〇七〇三じゃないの?」

見れば、ダイヤルキーの数字はピッタリそれに合っている。しかしつまみは回らず、そしてロッカーは開かない。何かが内側でその扉を開かれるのを拒んでいるように、頑として動かない。

「変だね。春頃ならわかるけど、こんな学期の途中で」

二年生の春にロッカーが割り当てられてすぐは、こういうトラブルがちょくちょくあった。ただ、大抵は近隣の番号の学生が確認を怠った結果であり、学生がロッカー前に殺到する時間帯に聞いて回れば簡単に解決した。

「学務の人に相談して、マスターキーか何かで開けてもらう？」

澄玲はうつむき加減のまま、少しの間黙っていた。

「うーん、今日じゃなくていいかな。演習前に中身は全部持って出たし、特に困ることもないからね」

そう言って笑うその頬に、いつもは無い皺が寄っているのを、不幸にも私は見つけてしまった。「看護は観察」そう宣ったフローレンス・ナイチンゲールも、こんなふうに不幸な生涯を送ったのだろうか。

「そっか、じゃあ帰ろう」

「…うん」

ナイチンゲールがどうしていたかは知らないが、私はその皺を見なかったことにした。「ちょうどいい時間のバスなくなっちゃうよ、もうこれだから田舎は」そう言う澄玲がまたいつものように笑うなら、それよりも正しいものなんて他になくて良かったから。

朝、まだまだ眠たい目をこすり、講義室の重たい扉を開く。

途端、むせ返るほどの甘美さが鼻から全身にまわりついた。ちょうど、植物園の温室の扉を開いたときのような、甘くて清らかな草花の香り。それは、服の襟に埋もれたうなじ、淡くピンクに染まった耳殻、透明なグロスの光る唇、ノートに走る指先の細い骨…香水ではない、二十代も前半の若くて美しい乙女の内面から発される禁断の芳香。

咲き誇る花々を目の前になると、その場にいるだけで私の胸はひそかにざわめく。薔薇のように華やかだったたり、昼顔のように地味で柔らかかったり。はたまた鈴蘭のように、清らかに澄んだ瞳をしていたり。

「つかさ！ おはようー！」

講義室中間の席にコスメを広げて陣取っていた澄玲が、ぼんやりと立ちすくんでいるわたしを見咎めて声を上げ、ビューラーを指にかけたまま手を軽く挙げた。

「…おはよう、澄玲」

私は唇を持ち上げて薄く笑う。

「どしたの？ なんか変だよ？」

「なんでもないよ、疲れてるからかな」

納得いかなそうに「ふうん」と息を漏らした澄玲の隣に、重たいリュックを叩きつける。

「そういえば澄玲、ロッカーっていつもランダム化してる？」

用が済んでロッカーの扉を閉めた後、ダイヤルキーの番号をガシャガシャと全く関係ない番号に合わせしておく操作がある。それを私は「ランダム化」と呼んでいて、半数くらいの学生はそれをせずに帰宅

する。つまり、ダイヤルキーは解錠できる状態で放置されるわけで、鍵の意味を成していない。かくいう私も、ランダム化せずに帰宅するのが九割だ。

「ランダム化？　してないよ、めんどくさいし」

私はほくそ笑む。

今日の私のリュックには、図鑑みたいに厚い教科書よりもずっと重たい物が入っている。

遡ること、数日前。

「困ってないから」を繰り返して学務係どころか先生にすら相談しようとしないう澄玲にしびれを切らし、私は独自の調査に乗り出した。

澄玲が困っているかどうかはこの際関係ない。ほかでもない私が気になるのだ。つい数時間前まで澄玲の私物が入っていたはずのロッカーが、何者かに使用されて使えなくなった。これは、マンネリ化して課題ばかり馬鹿みたいに多い私の日常に降って湧いた謎だ。そのままにして浪費していい訳が無い。

まず私は、自室にある古典的な探偵小説を数冊手にとって読み返した。私は看護学生で、医療や人体のことについては素人より少しは詳しい。でも、事件の捜査に関しては全くのド素人だ。まずは基本的な知識を身につけるところから始めなければならぬ。断じて、懐かしい蔵書を読み返したくなかったのではない。

「捜査の基本は聴取と観察……ね」

最初の行動指針が決まったので、実習に使うために買った五冊パックのメモ帳を引っ張り出した。まさなら一枚目のページの一番上に「聴取」と書き、翌日のハードな捜査活動に備えて早めに眠った。

翌朝、私はいつもより三十分早く大学へ行き、ロッカーの前でメモ帳を構えて陣取った。

「あれ？　つかさちゃん、今日は早いね」

学年で一番真面目だともっぱらの評判である優等生がロッカー前に来て、おそらく彼女自身に割り当てられているものらしいロッカーを開けた。なにかの授業で一緒にグループワークをした記憶があるが、名前は忘れた。

「あの子、なんか友達がこのロッカー開かなくなっちゃったって困ってるんだけど、誰が使ってるのか知らないかな？」

優等生は少し首をかしげ、「急に開かなくなったの？」と聞いた。そうだと答えたのが最後、結局二人とも「うーん？」としばらく首をかしげたまま散会となった。

次に来たおとなしめのグループの子たちには、話しかけた段階で「知らない」と突っぱねられてしまった。余計なことかもしれないが、そのコミュニケーション力で看護師になって苦労しないだろうかと心配になった。

遅刻ギリギリの時間まで粘っても、結局得られたのは「誰も犯人やそれと思しき学生に思い当たらない」という事実と、全員が確実に自分に割り当てられたロッカーを使用しているということだけだった。「……ん？」

一見何もわからなかった、全くの無駄骨であったように見えるが、そこにひょっとと重大な事実が隠れていることに気がついた。ミステリ小説をガンガン読んでいた全盛期ならもっと早く気がつけただろう

けれど、骨の名前や体位変換の技術などという無味乾燥なサビが頭にこびりついているおかげで思い当たるのに時間がかかってしまったのだ。

「看護科の学生には、ほとんど動機がない」

そう、ロッカーが使いたければ自分のロッカーを使えばいい。例えば間違えて誰かのロッカーをうっかり開けてしまっても、中身は大変個性にあふれているので一目で自分のそれではないことがわかるだろう。

しかし、ナイチンゲールは言った。「推論は根拠に裏打ちされていなければならない」と。聖典のように一言一句記憶しているわけではないから確かではないが、多分そんなことを言っただろう。そこで、敬虔な看護学生である私は裏付けを行った。

「じゃあ二人。自分のロッカーを開けてみてもらえますか」

最終コマが終わった後、私は澄玲のロッカーの両脇の学生を捕まえ、ロッカーの中身を見せてもらうことにした。二人とも、私の言っていることはあまり理解できていないようだったが、ただロッカーを開けるだけなので深く考えずに内容を開示してくれた。

「私、整理整頓するの苦手であ、恥ずかしいからあんまりジロジロ見ないでね」

澄玲のロッカーの左隣は、色とりどりのカバンなどがぶら下がっている大変賑やかなロッカーだった。賑やかというのは雑然としているという意味ではなく、某「V」から始まる本屋さんのような楽しげな風景であるという意味だ。断じて、汚いというわけではない。

「うーん。ありがとう、じゃあそっちもお願ひ」

「いいよ。私のもあんまり綺麗じゃないけど」

右隣は、吊り下げラックやハンガーを用いて綺麗に整頓された見事な収納だった。多分この子は例によって顔は見たことがあるが名前は忘れた、きっと良い家政婦になれるだろう。

「うーん……これじゃ、殺風景な澄玲のロッカーとは見間違えようがないよね」

「そうだね……え？ 私達、疑われてたの？」

某「V」から始まる本屋さんのロッカーをしている彼女は目を丸くして驚いたが、家政婦になれそうな子の方は「そりゃ、両隣の人が間違えて使ってるんじゃないかと思うのは当たり前じゃないかな」と無感情に言っていた。

これで、各々のロッカーが大変個性的で、誰かのロッカーを開けたとしてもすぐに間違いであったと気がつくことが可能だと立証できた。ナイチンゲールも天国でサムズアップをしていることだろう。

「じゃあ、なんで開かないんだらうね」

某「V」の方の彼女が腰に手を当ててため息をつき、「じゃ、また後でね」と言って講義室への階段を登っていった。

偶然の取り違いではない……。

私は考えながら、自分のロッカーを開けた。

「あれ？」

何か物足りなさを感じ、またロッカーの扉を閉める。私は今、何の操作もせずにロッカーを開けることができた。ダイヤルキーを合わせることもなく、解錠のためのつまみも回さなかった。ランダム化を

しない性分なのでダイヤルキーの件は不思議でもないが、つまみだけは必ず「施錠」の方へ倒しているはずで、それを回さずにロッカーが開いたというのは変な話だ。

「あ、佐伯ちゃんいたいた！」

廊下の奥から響いてくる頓狂な声に顔を上げると、私の右隣のロッカーを使っている花見が走ってきていた。豊かな乳房と黒髪が、規則的な足のリズムと一緒に揺れる。

「ごめん、さっき私佐伯ちゃんのロッカー間違えて開けちゃって！　すぐ気づいたんだけど、鍵閉じるつまみ回さなかった！」

花見とは学籍番号が近いので体育で同じグループだったが、よく遅刻しては忘れ物などで怒られていた記憶がある。そういえばさっきの時間も、遅刻して後方のドアからそっと入ってきていたのを見た気がする。

「いや、別に。ランダム化してないし」

「いや、気味悪いかなって思ってた！　ほんと、ごめんね」

これで私のロッカーのちょっとした謎はあっさり解けた。

「…ん？　ってことは、澄玲のロッカーも誰もが開けられる状態だった？」

澄玲のロッカーの番号は、澄玲と面識のある——特にグループワークなどを共にして澄玲の自己紹介「好きなもの」を聞いたりした——学生なら、誰もが推測することができる。よって、看護学科二年生の学生が澄玲のロッカーを開けただろうとばかり思っていたのだ。

しかし、ダイヤルキーのランダム化が行われていなかったとしたら、その制限は崩れる。

看護学科の学生でなくても、例えば検査学科や放射線学科でも、あまつさえ学外の人間であっても…誰でも、澄玲のロッカーを開けられる。

澄玲に、ランダム化をしているかどうか聞いてみよう。そう決めて、私は大学を後にした。

そして、今朝である。

澄玲がダイヤルキーをランダム化しない性分であることが分かったので、今後の捜査は広範囲に広がる。ここから先は私一人のマンパワーでは厳しいような気がする。

「ねえ澄玲、ランダム化してなかったってことは、澄玲のロッカーは誰でも開けられたんでしょ？　ってことは、看護の子たちじゃなくても、全然澄玲を知らない人でも開けられるんだよね」

澄玲は鳩が豆鉄砲を喰らったような顔をして、数秒固まった。澄玲がこういう顔をするときは大抵、何か隠したい事実を一生懸命に隠そうとしているときだ。

「……そう、だね」

ぎこちなく笑顔を浮かべる顔に、またあの見慣れない皺がある。

今度は見て見ぬふりができなくて、私は澄玲を問い詰めた。

「私、一昨日くらいから、誰か澄玲のロッカーを間違って使っている人がいるんじゃないかって言って聞き込みしてたの。けど、誰も間違って使っている人に心当たりもなかったし、皆自分のロッカーをちゃんと使ってた」

澄玲のふっくらと丸い頬筋が引きつる。

「なんか、探偵みたいだね」

「そう、捜査をしたの。でね、私考えたの。誰かが間違ってるんじゃないなら、意図的に澄玲のロッカーを開けた人がいたってことじゃないかなって。それでね、対象が看護の子だけじゃなくなるから、私一人じゃ捜査しきれないと思うんだ」

ぱっちりとした二重の大きな瞳に、一滴二滴と雫が降りる。その雫はたちまちに瞳に透明のベールをかけて、ドキッとするほど長い下のまつげに乗っかる。

「つかさ…」

「うん。澄玲が、ロッカーのことで困ってなくて、学務の人に相談したくないのは分かってるよ。でも、もしかしたら嫌がらせとか悪意があってされたことかもしれないし、危ないものとか世間から隠したいものを仕舞うのに使われているかもしれない。例えばあれの中身が爆弾か何かにすり替わっていたりしたら、澄玲はそれでもこのまま黙っておきたい？」

澄玲の頬にバラが咲く。目元の血管はみるみるうちに太くなって、破綻して血涙を流すのではないかと思うくらいに脈うつ。

でもごめんね、澄玲。私はこの謎をここで終わらせるわけにいかない。真相はロッカーの中、なんてクサイセリフを言って幕引きを迎えるくらいなら、澄玲を泣かせても構わない。

構わない、というのは…ちょっと違うかもしれないけれど。

「…いいよ」

澄玲は真っ赤に染まった下瞼に朝露のような大玉の涙を湛えて、無味乾燥な蛍光灯を気味悪いくらいに反射する瞳で私を見た。

「先生なら、相談してもいいよ」

「……わかった」

私はその場でパソコンを立ち上げ、一眼の担当教員が来たのにも構わずメールを作成した。相手は……そうだな、香坂先生がいいだろう。二年の担任を務めていて、事あるごとに「いつでも相談して下さい」と言っている彼女なら適任だろう。

「明日の三限が空いているらしいから、香坂先生に相談しよう」

澄玲が頷いて、その瞳から涙が引っ込んだのを見て、私の心についた引っかき傷も膿むことなく消滅した。

その日、大学の屋上は、風が静かだった。

香坂先生との相談を終えてそのまま帰るふりをして、私はこっそり階段を上がった。――先生の研究室からこっそり拝借した、実習記録―手にはその一冊があった。

少し埃っぽく、角の擦れた布装の背表紙。手に持つと重さが想像よりずっとあって、まるでそれ自体が何か、熱を持っているようだった。

屋上のベンチに腰を下ろし、ファイルをそっと開く。パラパラと紙がめくれるたび、微かなインクのおいと、学生たちの癖字が浮かびあがってくる。

ずっと考えていたことの裏付けをとる。化学根拠による裏付け、論理に裏打ちされた技術、的確な観

察と看護診断…よくもまあ、同じようなことを表現を変えていくつも押し付けてくれるものだと思う。私は偉大な看護論理家諸家と、更に偉大な我らが指導教員様の教えに従っているだけだ。決して、興味本位の探偵ごっこで看護の道を逸脱しているわけではない。

「見たこと無い子の名前…」

私はページの左上に書かれた名前をどんどん追っていく。仮説を立証するために。

仮説というのは、こうだ。

澄玲のロッカーはそこを通った誰もが開けることができ、学生はそれぞれ自分の—それも、とても個性の強い—ロッカーを使っているので間違いや場所が無くて困ったという可能性は低い。ならば考えられるのは、明確な悪意を持った嫌がらせか、あるいは何かを見落としているか。

そう、何か。例えば、大学特有の存在。

「留年や、編入の学生という可能性は考えられませんか」

さっき研究室で香坂先生にそう突きつけたとき、彼女は長い髪を一度に梳いて少し目を伏せた。

「その可能性は、ほとんど無いと言って良いです…」というのも、編入生には全く別のところのロッカーを案内してありますし、知っての通り看護学科は三年生まで自動進級ですから留年生も…」

そこで先生は憂いを帯びた目を開き、澄玲を見据えた。

「いません。ですから、ロッカーの案内を受けていない学生が間違えて使ったというのは中々考えづらいですね」

私は素直に「そうですか」と頷いて見せながら、後ろ手で実習記録を抜き取った。私は先生を信じていない。別に先生が嫌いなわけじゃない、ただ先生と澄玲の視線の間に、妙な甘い香りが横たわっているように思えたのだ。

私は、私達は…何かを忘れている。あるいは、誰かを。

「記憶は改ざんされる。改ざんされないのは、記録だけだ」

中学生の頃狂ったように読んでいた推理小説の一節を口の中で転がす。昨今、その記録さえ改ざんや漏洩は日常茶飯事だ。でも、学生たちが手で書いた—正確には、書かされた—記録物は、私が忘れていた何かを大切に抱え込んでいるはずだ。

「…あった」

演習のグループ分け名簿と記録物を照らし合わせ、ようやく見つけた。今年度になって作られたグループ分けにはいなくて、昨年度私達を書いた—書かされた—記録には名前のある人物。

「三枝、佳乃」

本棚に刺さっていたはずなのにほんのりと日焼けしたページの左上には、たしかにそう記録されている。たった四回の、基礎実習出席レポート。

日付は、いずれも初夏。それ以降の欄は、すべて空白だった。

ほんのりと茶色がかかった空欄は、まるで咲かぬまま終わった蕾のように並んでいる。

「実習は、学内で三回、病棟で四回…全部で七回あったはずだった」

頭の隅にあったそれを口に出した途端、ページ全体がどこか肌寒く、色彩を失っていった。

『学内の座学は認定可。実習では接触困難、認定不可』

筆圧が強く濃いその字の右下に、いつかの講義で一回だか二回顔を合わせた助教の判子が押し込められて、それを覗き込んでいるうち、急に喉の奥がきゅっと締まった。

まるで、彼女が誰かに触れることがそれ自体、公式に否定されたようである。

『触れることはケアの基本』と、この判子を押しつけた助教は講義でそう言っていた。実際に学生同士で背中を触らされたし、色々な触り方を指示されてくすぐったい思いもした。

その基本から駄目だったと、彼女は駄目だったと……そう言われているように感じる。

ページをさらにめくると、一枚だけ、綴じ方が不自然な紙があった。心もとないプラスチックの留め具に引っかかるようにして、裏返しに差し込まれていた白紙。するりと引き抜くと、その裏に、うっすらと文字が浮かんでいた。

「患者の手を取ると、私の手が冷たくて、驚かれた」

筆跡は小さく、震えていて、まるで誰かに見られることを拒んでいるようだった。インクが少し滲んでいて、書いた本人の指先の汗か涙か、それとも雨粒か、想像がつかない。

思わず、紙の端をそっとなぞった。

冷たかった。

風が、ページをめくる。無数の紙がばらばらと、音もなく宙を滑った。

三枝という珍しい苗字にも関わらず、一年生の間は彼女は在籍していたのに、私は彼女について何一つ覚えていない。顔も思い当たらないし、姿形も思い出せない。声も、あの字にも、見覚えがない。

それが何か大事なことだったような気がして、胸の中が軽いような心地のまま家に帰る。無意識にお湯を沸かしたら紅茶を淹れ、紅を超えて黒に近くなるまで放ってカップへ注いだ。

小さなマドレーヌを戸棚から取り出し、紅茶に漬ける。

じんわりと花の香りがするそれを口に含む。

そうすると昔の思い出が次々に……なんて、名作を模倣しても忘れていた記憶が補完されるわけもなく。私はまた、裏付け・裏打ち・裏取りに勤しむことにした。

香坂研究室の窓辺には、いつも小さな花瓶がある。今日は、アネモネ。濃い紅の花びらが、硝子のなかで静かに開いていた。

先生はコーヒーカップを持ったまま、私の手の中に握られた過去に目を落とす。何も言わず、ただ見ている。

やがて、唇を少しだけ開いて、こう言った。

「そう……この子の字、覚えています。いつも、震えていた」

その声音は、まるで詩でも読むように柔らかく、曖昧だった。

「先生。三枝さんは、どうしたんですか」

喉の奥が熱い。分かっている、特段の理由が無い限り留年はせず、さらに数段高級な理由が無い限り

休学や退学は認められない。つまり、彼女には――三枝佳乃には――なにか特段の理由があった。でも、聞きたくて仕方がなかった。本当のことが返ってこないかもしれないと分かっていて、それでも香坂先生の口から何かを聞きたかった。

先生は、窓の外を見る。憂いを湛えた瞳の上で、長い睫毛を踊らせて。

「大学に来なくなった」

言葉が宙に浮いた。

先生の指が花瓶の縁に触れる。まるで、花に触れるふりをしながら、本当は何にも触れていないような指先で。

「病んでいたの」

それが身体のことでないのは、根拠が無くても明白だった。

「誰も……助けなかったんですか」

その言葉に、香坂先生の目が、一瞬、ほんの少しだけ揺れた。けれど、すぐに微笑みが戻る。その顔は柔らかく、熟れた林檎のようにすこし甘かった。

「助けるって、難しいの。佐伯さんは……保健師志望だったよね。保健師のところには、まだ元気な人の方が多く来る。『自分は健康にならなくて良い』、『興味ない』、『好きなものを食べて早死にするほうが幸せだ』……そういうふうに言う人のほうがずっと多い」

沈黙。

部屋の隅で、時計の針が乾いた音を刻んでいる。

「学生の指導も同じ。助けを求めている子に、どんなにこちらが手を差し伸べても意味がない」

胸の中がカッと熱くなった。――それでもお前、腐っても保健師だったのかよ――そう言いたいのを、ぐっと押し留める。

「それでも、誰かが手を差し伸べてくれているということが、その手を取らなかったとしても、その感覚そのものが助けになるんじゃないでしょうか」

先生は私に乾いた瞳を向ける。「その程度のことを私が考えていないとでも？」と、細められたまぶたが物語っている。

「彼女の記録に触れたとき……とても、冷たく感じたんです」

「……あなたの言っていることは、正しい」

先生は嫌味無しにそう言って、頷いた。でも、その言葉はどこにも届かない。まるでそれ自体が花瓶の水に沈む一枚の花弁のように、そっと沈んでいった。

その後、先生は私が借りていた――盗んでいた――記録を受け取り、いつも通りの事務処理の声色で言った。「助けを求めている人に、それでも手を伸ばす必要がある。助けようとしてくれる人がいるという事実こそが、助けになる……良い学びを得ましたね。それに免じて、これを持ち出したことは今回に限って不問にします」

香坂先生の語ったことは、それが全てだった。

研究室を出る。足音が廊下の白い床に吸い込まれていく。背後でドアが静かに閉じた。誰も、何も言わなかった。

ただ、硝子の向こうでアネモネだけが、かすかに揺れていた。その赤は、血のような、花のような、もう覚えていない記憶のような赤だった。

香坂先生の言葉からは、三枝佳乃が今どうしているかはわからなかった。彼女が言ったのは「大学に来なくなった」という過去の事象であって、現在は何をしているのかは分からない。家に閉じこもって鬱屈としているのか、別の道を見つけて新しい人生を構築しているのか、はたまたどっくに地下の解剖室で自殺体として解剖されたのか……。

「……ということで、全人的理解という点ではね、患者さんが何を大切にしているのかというのを着目して考えるのが良いでしょうね。特に終末期なんかでは……」

さっきまで考え事のバックグラウンド・ミュージックでしかなかった先生の講義が、前頭葉で引っかかる。

「そうだ、対象を理解するためには、まずその人の大切にしていることを考えるのだ。」

「大切にしていたこと……」

三枝佳乃が、大切にしていたこと。

どうして心を病んだのか、何に悩んでいたのかは知らない。でも何かに悩んで心を病んで、それで大学に来られなくなった。実習にも、四回しか出席できなかった……。

いや、違う。四回は出席できた。

先生は言った。彼女の字はいつも震えていて、印象に残っていると。その怯えが始まったのは実習中じゃなく、もつとずつと前から。なら、実習に出るのはかなり怖かったはずで、それでも四回は来た。前半三回の学内実習は全回出席し、病棟実習にも一回出た。

きつと病棟に出て、患者と話して、手が冷たいと驚かれて……それで、限界が来る。そこまで、彼女はギリギリまで実習に出た。看護にしがみついた。

「……看護が、大切だった」

「つかさ？　どしたの？」

隣の席でうつらうつらとしていた澄玲が、不思議そうに首をかしげる。

「なんでもない……トイレ、行ってくる」

私は立ち上がって階段を駆け下りた。

トイレの横を通り過ぎ、灰色の箱の前に立つ。

「三枝佳乃の学籍番号は、二三八四八だった」

澄玲にあてがわれたはずの、四八番ロッカー。もし、三枝佳乃が大切にしていることが看護であって、看護学生であることに執着があったとしたら。

ふらっと大学に来て、ロッカー案内をよく確認もせずに「看護二年」と書かれたこの列だけを頼りに、学籍番号の下二桁がロッカー番号と対応していると思ひ込んだとしたら——そもそも、学籍番号と対応していない番号のロッカーがあてがわれているのも意味がわからないが——そんなことが、あったとしたら。ランダム化されていないダイヤル錠は意味を成さず、澄玲はロッカーの中身を全部持って演習に出たから、三枝佳乃は何の疑問も持たずに空っぽのロッカーを開けた。そして、扉の内側に貼られた鍵の使

い方の手引きに沿って新しい番号を設定した。そういう経過を辿っただろう。

「まず考えられるのは、入学式の日」

入学式は四月の七日だった。ちょうど兄の誕生日前日で、入学式帰りにあわててプレゼントを用意したのでよく覚えている。

「〇四〇七…」

開かない。

「じゃあ、実習の日？」

三枝佳乃が出席していた四回の日付を順番に入れてみたがどれも当たらない。

「誕生日…は、知らないし。推し…も、知らない」

大体、誰もが澄玲のように推しの誕生日をロッカーのダイヤルにしているわけではない。

「うーん」

手詰まりになって、いい加減中腰の姿勢も辛くなってきたのでその場に座り込む。顔を上げて何気なく辺りを見渡し…そして、一枚のポスターと目があった。

「看護の…日」

それはまさしく、あの香坂先生の研究室の扉に貼られていた。どちらも頻繁に用がある場所なのに、ロッカーと香坂研究室が近いことを意識したのはこれが初めてだった。

「五月十二日は看護の日…」

そういえば、オリジナルドラマを作るとかで「私と看護」とかいう漠然としたテーマの原稿を募集していた気がする。

まさかそんな安直な…とは思いつつ、〇五一二とダイヤルを回した。

「ガチャ」

つまみが、「解錠」に向けて回った。

薄紅色のリップクリーム。

使いかけの香水。

紙片に書かれた走り書きには、「次の実習、絶対に行く」とある。

そして、折りたたまれた保険証のコピー。

…名義は、三枝佳乃。

「開いちゃったかあ…」

声がして我に返り、顔を上げると澄玲がいた。

いつも通りの笑顔を浮かべて、そして涙を流していた。

「分かってたんでしょ、ここを使ってたのが三枝佳乃だって」

「…もう、敗北を認めるしかないか。つかさは名探偵だね」

澄玲は、三枝佳乃と同じ予備校に通っていたと明かした。初耳だった。そもそも、澄玲が私と同一年じゃなくて、一年の浪人を経てこの大学に入ったということさえ知らなかった。

「浪人していたことって、絶対言いたくないわけじゃないけど胸を張って言えることでもないじゃんか。だから、私も佳乃ちゃんも…大学入ってから、なんかどう関わっていいかわかんなくなっちゃって」
そうして段々、ヒビの入った氷塊がゆっくりと離れていくように疎遠になって、澄玲には私という定着した友達ができた。三枝佳乃には…たぶん、そういう存在はできなかった。

「…学籍番号がさ、四八で終わるじゃんか、佳乃ちゃん。だからそうかなくて」

「ロッカーを使われてるのを黙認したのは、なんで？」

澄玲の口がきゅっと引き結ばれる。

「佳乃ちゃんが、どうして大学に来られなくなったかわかんなかった。けど、佳乃ちゃん予備校で、絶対看護師になりたいってずっと言ってたから…このロッカーを使う権利は、佳乃ちゃんにもあって良いと思った」

私は上段の網棚に乗っていたノートを手を取った。それが日記か何かであることは、容易に想像できた。

「…生きてることより、死ぬことのほうが幸せだと思っ」

澄玲の視線が跳ね上がる。私がただ三枝佳乃の日記を朗読しているだけだと気がついて、丸くなった目が元に戻った。

「健康でいたら、いつまでも働かなきゃいけない。寝たきりで暮らしたらきつと幸せだろうな。寝たきりの人が羨ましい」

気持ちには、わかる。学生時代は大量の課題とレポートに追われ、地獄のような国家試験を乗り越えても待っているのは退職まで続く肉体労働。ケア職なんて言葉で神聖化されているけど、看護師側の実感はそんなものだ。

「…看護師になりたいって言ってる人がこんなこと思うの、不謹慎だ」

そう、これがあるから苦しい。ただ「寝たきり生活は楽だろうな」と漠然と思えたならそれは悩みにはならない。看護という職業の眩しいほどの神聖さが、その光が、忙殺されて疲れた心に葛藤と悩みを生む。アンビバレントな感情は不謹慎と言ってしまえばそれまでで、友達や家族、まして教員になど相談できるわけもなく放置して…そして、心は膿んでいく。

私はノートを閉じた。表紙が起こした風は、生暖かく頬を撫でた。

「高三と浪人と、受験に向けて努力して。やっと入学したのに待ってたのは大量の課題にレポート。どんなに倫理だ論理だって綺麗事言われても、現場に出たら忙殺されてルーティンワークになっておしまいだろうなって思う毎日…佳乃さんが悩むのも、無理はないのかも」

人手不足に、医療の高度化。増える患者に、減っていく一方の看護師。ローテーションで受け持つ、しかも看護師一人に七人だかそれ以上割り当てられる患者について、人生やバックボーンまで深く考えてあげられる時間は果たしてあるだろうか。

何より自分に、そんな余裕があるだろうか。

「…何かしてあげられることは、なかったのかな」

私は澄玲に日記を開いて見せた。そこに綴られた彼女の字は、凜として滑らかで、そして芯が通っている。

「誰にも見せない場所だからこそ、はっきりと主張できた」

看護とは触れること。だが、心の中まで触れることは誰にもできない。身体を切って開いても、心を肉眼で観察することは叶わない。

「私達は、佳乃さんの心という世界の外側にいる。何も、できることはなかった」

「……そっか」

澄玲は、頬からキラキラと光る朝露を零して笑った。

ふと気づくと、講義の終わりを告げるチャイムが鳴っていた。

演習室から出てきた学生たちのユニフォームがひらひらと揺れ、笑い声とともに花びらのように舞っていく。

ここは、花園だ。

日々、咲き誇り、そして静かに、誰にも気づかれずに、散っていく命の集まり。

誰かがここにいた。

誰かがいなくなった。

看護師は健全でなければならぬ。ナイチンゲールのその格言は、ある意味で残酷だ。

「あれ？ 日向さんのロッカー、開いたの？」

ずっと後ろで、講義を終えて降りてきたらしいクラスメイトの声がする。いつだったか聞き込みをした、あの優等生の声だ。

私は振り返る。

整然と並ぶロッカーたちの扉が、西日を受けて鈍く光っている。

「……建付けが悪かっただけみたい。本気で揺すったら開いたよ」

優等生は——やっぱり名前は思い出せないけど改めて調べようとも思わないその子は——「なあんだ」と笑って、自分のロッカーを開けた。

「澄玲。対象者が大切にしていることを尊重するのが看護なら、真実をぶちまけることだけが正しいとは言えない。私はもう少しで、看護学生として間違ったことをするところだった」

私は四八番ロッカーの扉を閉じ、ダイヤルキーをランダム化した。

「……ありがとう、つかさ」

何かを言わずに隠匿しておくこと、真実ではないことを口にする。それは、ときに罪として裁きの対象となる。けれど、真実だけが正しいと割り切れるほど、人間は単純にできていない。人を看て人を治す……それが看護師なのであれば、尊重されるべきは真実性ではない。

「ほら澄玲、購買早く行かないと、また上級生に全部お弁当買われちゃうよ」

「……ほんとだ、早く行かなきゃね」

売店に向かって駆け出して、廊下の曲がり角でふとロッカーを振り返る。

もう誰にも侵されないその箱は、花園の真ん中で秘密を湛えて静かに佇んでいた。

Like a RollingStone/ボブ・ディラン

Like a RollingStone/ボブ・ディラン

Like a Rolling Stone

ボブ・ディラン

目覚めはエスだ。それも飛び切りの、トビきれる代物さ。だってそうだろう。一瞬の快感で、毎日、登校を強制するんだからな。そんな愚痴っぽいことを考えながら、今朝もハイになる。

「あー、頭いてえな、ったく」

一人ごちる。小鳥のクラシックなさえずりに、脳髓がヘビーマタルで答えている。昨晚の酒が残っているようだ。

「ばあさんがいねえ。ということは、メシはできてるみてえだな」

寝室を出て、召使いの待つ居間へ向かうことにした。

リビングはバンドマンに群がる女の脳みてえな造りで、大きめの机とTV以外何もない。食卓の上には数品の料理と、オキニのスポーツ新聞が置かれていた。

食事を探りながら新聞を読む。

「小山、今季二十三号……」

無論、俺は文系学部の人間であるからして、球遊びのスコアなんぞに興味はない。かぶりつきなのは同じ記録でも、

「おお、今日はオードリィモンローちゃんですか。うーん、ロックなピーチだねえ」
グラビアのスリーサイズの方である。

「ちょっと、あんた朝っぱらから何読んでんのよ」

声の方向に振り向く。そこにはぼさぼさに髪を振り乱した、渋柿のような顔の老婆が立っていた。

「何って、近年の青少年心理のテキストだよ。かあさん」

「そういえば、心理学の研究をしたんでしたっけ。どうです、朝食。上手くできてます?」

「ああ、すごく刺激的な味だよ。超ショックってね」

「今年は冷房いらなにかしらね」

上方漫才風に軽口を叩き合う。これを見て『仲の良い……』などと形容する人間もいるかもしれないが、背中にさぞ立派な想像の翼が生えているんだらうね。

「そういえば、大学で話せる人は見つかりましたか?」

「いや、まだだね」

そう、大学話し相手を作るとというのがここ一か月ほどの目標である。

「だが必ず作ってみせるぞ」

「ああそうですか。それよりも、早くいかないと大学遅れるんじゃない? 今日一限入っているんで

しよう？」

興味なさげにうなずくと、邪魔者は出て行けとばかりに急かします。年季の入ったプレイングだ。

「ああ、そうだった。んじゃ行ってくる」

ブレークファストを切り上げて、箒で掃かれたように家を後にした。

講義室には八時四十分に着いた。我が大学の一限開始時刻は八時四十五分なので、後五分の猶予があることになる。

「お、あそこ」

最前列の席に女生徒が二人座っていた。一人はいかにも女子大生といった風のこざっぱりした女で、もう一方はブロンドだった。

「お近づきになりたいもんだね」

まずはお茶する間柄、もちろん一発でダイナーに持ち込めれば文句なしだし、そこから……フレンズになれたらロックだ。

向かい合って、

「やあ、この前のConsvilleのライブ見たかい？」

声をかけてみる。

「……ああ、えと、見ました」

「……はい」

返ってきたのはシベリアの永久凍土のように暖かく、ドイツ人みたいにフランクな返答さ。

「おいおい、どうして鉄鋼みたいにカチコチなんだ兄妹？」

軽いジョークを飛ばすが、女どもは一言も話さず、むしろ薄ら笑いを浮かべて押し黙ってしまった。

「会話はキャッチボール、拾った球は返さなきゃいかんよ」

ガンジーはきつと女遊びが下手だったろう。アマというのはあんまりつけあがらせると調子に乗るもんで、時には暴力的な詰め方も有用なのさ。

「……はい」

「……」

よしよし。分かればいいんだ。

「よし、おしゃべりを続けよう。君たちは若く美しいが、今この瞬間にも矢が突き抜けるがごとく時間流れ……」

「時間……！ あ、あの、もう授業開始の時間ですよ」

ハッと気づいたように、ブロンドが時計を指さしながら言う。見ればもう時刻は八時五十分。

「よし、じゃあ切り上げて、授業だな」

名残惜しいが仕方ない。

学生食堂は講義棟と独立した、ちぐはぐな建物だ。

外装は立派な、ヨーロッパ風なのだが、

「内装がな」

何年前かに内側はカジュアルな椅子と机が並ぶアメリカ式のカフェテリアへ改装され、深海の奥底の如く不気味な建物と化していた。

当然、利用者は少ない。

その日も数組のグループと、ボッチ飯が二、三人といったところだった。

「まったく人気がないね、あ、おぼちゃん俺B定食」

レーンに沿って窓口へいき、お盆を受け取る。席に座ろうとして、

「お、あいつ」

目に留まったのは一人の男子生徒だった。やせ衰え、目は落ち窪み、まさに負け犬といった感じだった。

「その君、相席いかなかな」

対面に腰掛ける。ああ、分かっている。全くロックな相手じゃない。だが、だからこそ安パイではある。少なくとも午前中みたいな平手打ちは喰らわなくて済むはずさ。

「……もちろん、どうぞ」

陰気な面を崩さずに、彼は返事した。

「学部は？」

「心理です」

「今度の試験の調子は？」

「あー、芳しくありませんね」

テニスのラリー風に会話。

「ところでなんだが、今度の試験、教えてやってもいいぞ」

あくまでもアメリカ人のように紳士的に。さすれば、向こうの心もイギリス淑女の足の如く開かれるっ
てもんよ。

「いえ、結構です」

にべもなく。

「いやいや、そう遠慮せず」

越後のちりめん問屋に成敗される悪代官のように勧める。

「いえ、お断りします。自分、不器用ですから」

高倉健かお前は。

「仏の顔も三度まで、だよ」

「あ、すいませんちよっともうお腹一杯なんで」

野郎スルッと躲して席を立ちやがった。

「まだその綺麗な牛糞色のカレーが残っているだろう」

「今食欲が失せました」

言い終えるのと一体どちらが早かったのか。あの不健康そうな青年はその場から消え失せていた。

大学広場は大学の中央に位置していて、紅葉シーズンの地面のごとき色のタイルが敷き詰められてい

ることから『赤の広場』と呼ばれている。広々としていて使用料のかからないことから、放課後になると学生が集まって、サークル活動に使ったりする。

そういった学生グループの一つにロック・クラブというものがある。海よりも高く山よりも深い知識を持ち、ジミヘンもレッチリも知らねえタンカス共である。

だが、もはやつるむ相手を選んでいる時ではないのである。

連中の輪に近づいて、

「やあやあやあ、諸君。ご機嫌いかがかな」

さわやかに挨拶をする。

びたり、と演奏の手が止まった。

「な、なんですか」

一団の中から茶髪の男が歩み出て、俺の前に立った。

「部長さんかね。いや、なに。ただ、頼みがあつてね」

「はあ、それで」

茶髪は何か怪訝な顔をしている。はーん。さては風紀の見回りが来たとも思っているようだ。

「大したことじゃない。俺を君のクラブに入れてくれたまえよ」

どよめきが起こった。

「すみません。ちょっとそれはできません」

茶髪は深々と、中身の軽そうな頭を下げた。

「いやー。そこを何とか頼むよ」

ほら、お前らがいつもやってるイッキの勢いで。

「ほんとごめんなさい」

気まずそうにするぐらいなら、入れやがれ。

「またまた、ご冗談を」

入れろ。入れろ。さっさと入れろよ、しばくぞ。

「すみません。本当に……」

ドタマキたぜ。

「ごたごたうるせえ！ このクラブには学生はだれでも入れるんだろ」

「はい」

肩を震わせながら、茶髪が答える。

「俺も入れろってんだよ」

どつきまわすぞ娑婆僧が。

「すみません。無理です……」

言うど、なぜか茶髪はうつむいて何も話さなくなりました。

俺もなぜかバツが悪くなって逃げた。

なぜだろうね。

「それがなぜか、ですって」

家に帰るなり、俺はかあさんに今日のことを愚痴った。いや、せざるを得なかった。

「いったい何が悪いんだろうねえ」

つぶやく俺を見ながら、かあさんはあきれ顔で、

「いい加減認めたら。いいですか。まず、いきなり自分の大学の五十過ぎた教授先生がしゃべりかけてきて、そのまま茶飲み仲間になってくれるような人はいないんですよ。あなた」

と言ったのさ。

ああ、まったく。まったくみじめな身の上で、まるで岩ライクが転アがローっていくようさ。

ここから、あけぼの

ここから、／あけぼの

ここから、

あけぼの

0

暑い。

うっそうと茂る熱帯雨林の中を、俺はただひたすらに進んでいた。

持ち物は自動小銃一丁と少しの弾丸。少しの携帯食と少しの水。たったそれだけ。なのに、体は鉛のよう
うに思い。

視界がぼやける。汗が染みた迷彩服は、じっとり湿った空気と熱気に晒されて肌に吸い付く。脱水症
状からくる吐き気が、じわじわと体力を削っている。今にも死にそうな状況だった。いつ走馬灯が見え
てもおかしくない状況だった。だから最初は幻覚だと思った。

突如開けた視界。透き通った湖。そしてそのほとりに横たわっていた、くすんだ金髪の少女のことを。

今から三十年ほど前。大国間で核戦争が勃発した。きっかけは片方の大国（以下A国）がもう片方の
大国（以下B国）の喉元に核ミサイル基地を建設しようとしたことだったと歴史の授業で習った。わが
国はA国側としてこの戦争に参戦。戦争自体はほんの一年足らずで終わったものの、それがもたらした
被害は想像を絶するものだった。人類の約三分の二ほどが死滅し、残された人間たちの前に広がってい
たのは完膚なきまでに焼き尽くされた死の大地。それでも人類はあきらめなかった。お互いが手を取り
合い、協力して、世界の再構築に尽力した。結果として人口が戦争前の半分に達したのが十年前のこと。
平和な世界が再び訪れた―かに思われたのだが。そう簡単には行かなかった。そう簡単に行ってい
たら、俺は今、こんなところにいる。こんなところで銃を握ってはいない。こんなところで、金髪の少女
を抱擁していたりはしない。

「おい、聞こえるか」

少女の土にまみれた頬を軽く叩きながら呼びかけてみる。脈はあるし呼吸もしている。しかし目は覚
まさない。どうしたものか、朦朧とした頭で考えた末に、池の水をかけてみることを思いついた。訓練
の際、気絶した者を覚醒させるときによくそうしていたのを思い出したからだ。

水筒で水を汲み、少女の顔にかける。数瞬の間の後、その瞼が開いた。少女は俺を見て言った。

「こんにちは。仲良くしてね。私、すごく困ってるの。だからたすけて」

1

「君は現地人か？」

「そう見える？」

「いや、どちらかと言えば西寄りの人に見える」

「じゃあきつとそうよ」

「はあ」

まったく埒が明かなかった。ただ一つ分かることといえば、彼女が現地の子供ではないということだった。その容姿は明らかにこの島にそぐわない。彼女はおそらく、敵側の人間だ。そう疑ってかかったほうが正しい。その正体も―考えたくはない可能性だが―察しが付く。何はともあれ俺は彼女を助けたのだ。それだけは確かだ。

「俺は島を脱出しようと考えてる。君はどうする？」

「あなたについていくよ。それ以外に選択肢は無いもの」

「そうか。じゃあまずは食料を確保しよう。君はここで待っていてくれ」

そう言って少女のもとから離れようとした瞬間だった。彼女は迷彩服の袖を引っ張り、言った。

「当てるはあるの？ ないなら私、いい場所知ってるよ。あなたにとっては敵陣、になるのかな？ で

も大丈夫。多分もう誰もいないわ。だってもうこの島での戦いは終わったから。私はね、逃げてきたの。自分の役割から。非人道兵器としての職責からね」

可能性は現実が変わった。

2

非人道兵器。

噂には聞いていた。極限状態に置かれる戦場において、兵士の戦意喪失と間引きを目的として行われている、孤児の兵器利用。彼ら彼女らは殺意を殺すための愛嬌と、確実に仕事をこなすための技術を磨

く。そして戦場を駆け回るのだ。あまりの残酷さから実施国内でもバッシングが起き、中止されたと聞いているのだが。しかし今実際目の前で俺を先導している少女は、その非人道的兵器なのだという。

「さっき職責から逃げたって言ってたけど、どういう意味なんだ？」

「そのままの意味だよ。非人道兵器の職責。それはつまりあなたたちを殺すことでしょ？ 私はそれをしなかった。せずに逃げた。それだけのことだよ。じゃあ逆に聞くけど、あなたは何をしてるの？

さっきも言ったけど、この島での戦闘行為はもう終わってるんだよ？ とくに撤退していたっていいはず。今ここに残っているのなんて自殺志願者か、本国に帰っても拠り所がない敗残兵、でしょ？」

「……俺は」

答えを最後まで言うことは叶わなかった。なぜならそれは、一発の銃声が俺の背後から聞こえたからだ。体はもはや反射で動いた。体を前に倒して少女を地面に伏せさせてから、右に飛んで振り返り、敵を視認。その軍服は俺と同じものだった。彼はこけた頬の上に乗せたぎらつく両目でこちらを凝視している。銃を持つ手は震え、腰も引けている。それが単なる疲弊からくるものなのか、それともおまけ程度に残った良心からくるものなのか俺にはわからない。ただ敵意を向けてきている以上は、殺すしかない。彼が次の弾丸を放とうと引き金に手をかけた瞬間に一気に距離を詰め、その手を蹴り上げる。短いうめき声。その残滓が消える間もなくその顎に一撃を入れる。そのふらついた足を払い、地面に倒す。馬乗りになる。拳銃を抜く。脂汗がにじんだ彼のこめかみにそれを当てる。そして引き金を一引く。それだけ。それだけだ。ほんの人差し指に力を入れる。それだけ。何度もやってきたはずだ。何度も何度も。訓練では。

俺は銃を投げ捨て、彼の首を絞めた。意識が落ちたところで力を緩める。

安堵感と虚脱感。ふとわきに目を向けると、少女がこちらを見ていた。何かを言いたげに、口を半開きにして。

「俺も逃げてきたんだ。自分の、責務から」

ほんの少しだけ、日が陰った気がした。少女の青い目が俺を透かすようだった。

3

つまるどころ、俺のすべては戦いにあった。

俺が生まれた小国はとにかく貧しかった。先の大戦で多くの人員を失い、核兵器で国土を焼かれ、国として成り立っているのが不思議に思えるくらいに困窮ぶりだった。そんな中で手っ取り早く金を得る方法は戦争だった。国民を優秀な兵隊として育成し、各地に売り込む。そうすることで再興を図っていた。

俺は孤児だった。九歳まで孤児院で暮らして、そこからは軍に入隊。訓練を受けた。自分でいうのもどうかと思うが俺は戦いの天才だった。体術訓練では負けななかった。射撃訓練ではトップの命中率だった。武器の手入れも、実地訓練も、何もかも。ほかのだれにも負けない精度で、速度でこなしていた。尊敬された。畏怖された。空っぽだった俺に「何か」を与えてくれたのは戦いだった。

でも俺は戦いの天才であって、戦争の天才ではなかった。

一か月前。俺はようやく戦場へと足を向けた。場所は南東の島国。民族間の争いに大国が手を貸したことで取り返しがつかなくなるというよくある構図の戦争だった。件の島に向かう船の中でずっと考えていた。いったい俺はこの戦争で何人の敵を殺すことができるんだろう。どれだけ活躍できるんだろう。楽しみだった。ワクワクしていた。十年間の訓練が、ようやくここで実を結ぶのだ。

船旅を終え、砂浜に降り立つ。整列し、点呼を受けながら透き通るような青い海を見ていたその時だった。視界の端で鮮血がしぶいたのは。ぎょっとして隣を見る。そこには何かがあった。斧が突き刺さり、ぱっくりと頭が割れた、脳が人として認識することを拒む何かが。

指揮官の戦闘準備を告げる声が、一瞬とんだ思考を揺り戻す。あちこちで聞こえる金属音。荒い息遣い。そして、悲鳴。

ふと前方を見ると、上半身裸でライフルを構えた背の低い先住民たちが容赦なく発砲を始めていた。完全な奇襲攻撃。この浜はまだ手付かずだという先方の情報が間違っていたのだろうか。それともあるいはーいや、そんなことはどうでもいい。むしろこれは絶好のチャンスだ。この予想外の状況下で成果を上げ、生き残る。そうすれば俺の評価はうなぎ登りだ。

照準を適当な原住民に合わせる。引き金に指をかける。まずは、一人。

そうして数秒がたった。目の前の原住民は一向に倒れる気配がなかった。五体満足で、仲間を次々殺戮していた。なぜならそれは、俺が引き金を引いていないからだ。手の震えが止まらない。体が芯から冷えていく。俺は銃を投げ捨てて駆け出した。ほとんど半狂乱だった。何が何だかわからなかった。とにかく逃げた。死にたくなかった。殺したくなかった。

「何してる！ 逃げるな！」誰かが言った。

「助けてくれ！」誰かが言った。

「腕が」誰かが言った。

「脚が」誰かが言った。

「目が」「耳が」「口が」「息が」誰かが言った。全部聞こえていた。全部わかっていた。それでも足は止まらなかった。

「あ、あ」

口の端から喘ぐような声が漏れ出る。それはやがて、絶叫に変わった。

後々うわさで聞いた話によると、あの奇襲は母国を目の敵にしていた味方の国が情報を横流ししたことで起きたものらしい。つまり俺たちがあそこで奇襲されることは最初から決まっていたわけだ。状況としては小隊四十人のうち、半数以上が死亡。捕虜になったものは五人。消息不明なのが六人。戦闘不能が三人。敗走したものが、一人。上陸したほかの部隊もほとんど同じような状況だったそうだ。

戦闘状態は一か月で解除。自死しようにも決意できず、原生植物や死体からとった携帯食で生き延びた俺は、無線でその知らせを聞いた。もう母国には顔向けできない。帰れない。かといってほかに居場所があるかといえばそれも無い。途方に暮れた俺はとりあえず密林を抜け、海岸に行くことにした。彼女を見つけたのは、その途中だったのだ。

4

俺のほとんど独白のような告解を、彼女は黙々と歩きながら聞いていた。そしてすべてを聞き終わった後で、「やっぱり似てるね、私たち」と言った。

「君も人を殺せなかったのか？」

「そうだよ。怖かったから。みんなは当たり前やってたけど、私にはできなかった。私はさ、孤児だけど、孤児になる前は普通に幸せな家庭で、普通に学校に通って、普通に勉強して、遊んで、団欒して、すごく楽しい毎日だったんだ。でもいきなり終わっちゃった。国際条約で全面禁止されたはずの核兵器だけど、他国にばれないレベルにまで威力を落とされたものは今でも使われてるんだよ。それでドカン、って。私は偶然生き残ったけど、他はみんな死んじゃった。それで私は孤児になったんだ」

前を歩く彼女の顔は、見えない。

「孤児院ではいじめられてたからさ。早く逃げ出たくて、軍の給仕係に志願したの。でもそれが間違이었다。それは自給のいいアルバイトを謳った、兵器製造ラインだった。そこにいたのは生まれた瞬間に捨てられて、間違いを犯すことでしか生きられなかった子供たち。彼らは当たり前人を殺した。なんの躊躇もなく。でも私はできなかった。だって知っていたから。命のかけがえのなさとかそういうのを。だから無理だった。そうこうしてるうちに私はここに飛ばされた。こんな辺境の、致死率が高い戦場に。見限られたんだよ。結局のところ」

彼女の話は今の世界にはありふれた、よくある最悪な話だった。それを聞きながら俺は思った。なぜ俺は人を殺したくないのだろう。彼女のように温かな生活を送っていた記憶はない。むしろ俺は彼女の周りにいたというふうしようもない子供たちに近い存在だったというのに。人を殺すための技術を磨いて、それをアイデンティティにしていたというのに。なぜ。俺はそれをかなぐり捨ててまで人を殺せないのだろう。

「どうして俺は人を殺せないんだろう」

浮かんだ疑念はいつの間にか口からこぼれていた。

「私としてはさ、別にそれってなにも変なことじゃないし、むしろいいことだと思うんだけど」

「……いいこと？」

「だって人を殺すのって良くないことでしょ？　だって誰かを殺したらその人はそれで終わりなんだよ。その人の周りの人も悲しむし、もちろんその人自身だって悲しい。そして殺した本人だって悲しい。それが普通で、正常なんだよ。正常であることの何がダメなの？」

「正常かどうかなんてどうでもいい。俺は人を殺すためにこれまで生きてきたんだ。それがなくなったら俺は、何もないんだよ。だって俺には、それしかないんだよ。それができないなら死んだほうがまだ」

「それならどうして、島から出たいの？」

「……分からない。とりあえず何か、目的が欲しかったんだと思う」

「どうして私を助けたの？」

「何もない自分が嫌だったから。怖かったから。だから、だからせめて何か残したいと思ったんだ。俺が生きてた意味を。何かを。だから君を助けた。君が期待しているような善性は、俺にはない」

少女は「そう」とだけ言った。それ以外は何も言わなかった。

もうだいたい森の奥地に来ていた。本当にここに敵の陣地があるのだろうか。

霧が濃くなり、道もほとんど獣道のような、草むらと判別がつかないようなものになってきた。さながらこれは二人きりの行軍だった。それでも少女は息一つ切らすことなく歩き続ける。

——一時間ほどの無言の行軍の末、ようやく少女の歩みが止まった。

そこにあったのは夥しい年月を重ねてきたであろう大木だった。見上げてみるが、その樹高と立ち込める霧のせいで、頂点を見ることは叶わない。

「ここは」

「敵の陣地、じゃないよ」

平坦な声色だった。

「嘘をついたのか」

「……そう。嘘をついたの。私。でも」

彼女が紡ぎかけた言葉の続きは、しかしそこで途切れた。彼女の背後から伸びてきた無数の白い手が彼女の肩を、腕を、足を、頭を掴んだからだ。

あまりに非現実的な光景に唾然とする俺の前で、無数の白い腕は彼女を大樹の方へと引きずり込んでいく。

どんどん遠ざかっていく少女。迷っているだけの猶予はもはやなかった。

俺は駆け出ししていた。走った。全速力だった。ぬかるんだ地面に滑って転んだ。栄養不足でふらつく足はなかなかいいことを聞かない。立ち上がろうともがく数秒の間にも、少女は遠ざかっていく。ダメだ。と脳内で誰かが叫んでいた。彼女を連れていかれてはダメだと、誰かが言っていた。また何もなくなるのが怖かった。結局俺はそういう人間だった。ただ空っぽなのが怖い、自分ばっかりの善性なんかとは無縁の人間だった。でも、それでも。

叫んだ。跳んだ。

少女が目を見開いて、驚いたような顔でこちらを見ていた。

手を伸ばす。もう少して、あとほんの少しで彼女に届く。

瞬間。少女を掴んでいた手が俺を掴み、地面に叩きつけた。肺から空気が押し出され、声にならない喘ぎが漏れる。万力のような力で俺を掴む白い手。もう限界だった。力が抜ける。視界が明転と暗転を繰り返す。

「やっぱり人を試すなんて、するものじゃないね。神さまでもない限り」

少女はそう言った後で何か言った。でもそれを聞くことはできなかった。俺の意識は完全に途絶した。

5

次に目を覚ました場所は、ベッドの上だった。

夢かどうか確かめたくなくて頬をつねろうとしたが、腕が言うことを聞かなかった。腕だけではない。体全体に言いようのない倦怠感があった。しばらくぼーっとしていると、白衣を着た従軍医らしき男がやってきた。俺の意識が戻ったことを知った彼は慌てた様子で部屋を出ていき、原住民らしい浅黒い肌をした男を連れてきた。ふちが細い丸眼鏡をかけた柔和な雰囲気のは、俺を見ると

「しゃべれますか？」と言った。それは細かいイントネーションは怪しいところがあったかが、それでも十分通じる――俺の母国の言葉だった。俺は「何とか」と答えた。彼は笑顔で「それは良かった」と言

い、従軍医に退出するよう促した。

二人きりになった病室で、先に口を開いたのは眼鏡の原住民の男だった。

「なんで原住民があなたの母国の言葉を話せるのか、疑問に思ったでしょう。私はここで通訳をしているんです。昔A国に留学したことがあります、そこで言語の勉強をしたんですよ。完ぺきとはいきませんが、よくできたものでしょう。細かいところには目をつむってください」

彼はそう言ってウインクをした。どことなく芝居がかった。

「十分伝わってますよ。私自身も実際、そこまで得意じゃないんです。自分の国の言葉なんですけどね。それで私はどうしてここにいるんですか？　　というか、ここはいったいどこなんですか？」

「ここは原住民の村の中についた緊急の救護施設みたいなものですよ。あなたは戦友に連れられてここに来たんですよ。彼もひどい栄養失調でいま昏睡状態ですが、うわ言みたいにつぶやいていましたよ。『あいつのおかげで大事なものを失わずに済んだ』って。よほど仲が良かったんですね」

「……そうですか。彼は助かるんですか」

「あなたと同じく安静にしていれば大丈夫でしょう。次の船で、一緒に母国に帰れると思いますよ」

母国に帰る。俺に果たしてその資格があるのだろうか。ずっと考え続けてきたことだ。まだ結論は出ていなかった。黙った俺を見て何か察したのか、彼は俺の上がない肩に手を置いて、言った。

「まああと一か月あるのですから、帰るかどうかはゆっくり考えればいい。それよりも今は生きていたことを喜ぶべきですよ。死んだら今頃幽霊になって生者を襲ってたかもしれないんですから」

「幽霊に？」

「ええ。そういう伝承があるんですよ。この島には」

この島で未練を残して死んだ者は幽霊となって甦る。彼らにはチャンスが与えられる。生き返るチャンスが。その条件は生きているものをこの島のどこかにあるという神木に連れていき、ささげること。そうすれば捧げた者の代わりに自分は生き返ることができる。

—そうした伝承がこの島にはあるのだという。実際のところこの噂は島民みんなが知っているのですが、仮に誰かが幽霊になったとしても、生きている者をだまして神木に捧げることは難しいというオチがつい

ている話である。ただそれが島外の者だったなら引っかかることもあるいはあり得るのかもしれない。

療養生活が始まって半月がたった。俺はかなり回復し、村付近を散歩できるまでになった。原住民の人々とも言葉が通じないなりにコミュニケーションをとってみた。彼らはみな陽気で、ついこの間まで殺し合いをしていたとは思えないほどに、敵であったはずの俺を歓迎してくれた。今は一緒に鎮魂祭の準備をしたりしている。

時間は過ぎていく。すべてを置き去りにして去っていく。いつかすべて忘れて無かったことになってしまふ前に、俺はどうしても確かめたいことがあった。

うっそうと茂る熱帯雨林の中を歩く。そこは一度歩いたことがある道だった。でも前のような不快感も倦怠感も今はない。

やがて道が開け、透き通った湖が現れた。そしてそのほとりにには痩せた、小さな人の骨があった。

俺はその頭蓋骨をゆっくりと拾い上げた。それは悲しいくらいに軽かった。

彼女は俺が助けようと水をかけた時点ですでに死んでいたのだろう。あの時感じた脈や息遣いは、最後の最後に彼女が生きようとした証だったのかもしれない。頑張っ、必死で生きようとして、そうして目を覚ました彼女は、幽霊だった。

彼女はこの世にどんな末練があったのだろう。再び幸せな生活を送りたいとか、家族が欲しいとか、そんなことを考えていたのかもしれない。いまやその答えを知ることにはできない。

なぜ彼女は俺を神木に捧げなかったのだろう。いや、実際迷っていたに違いない。でも寸前で彼女は俺を助けた。生きていてもどうしようもない俺を助けた。彼女は俺に何を期待していたのだろう。この答えもわからない。でもきつとこれから探していかななくてはならないのだろう。

いまだに自分の生きている意味とかそういうものを見出すことはできない。今までの人生は無駄だったかもしれないと思う。

でも、空っぽではない気がする。

俺は原住民を殺さなかった。その原住民にいま助けられている。俺は襲ってきた男を殺さなかった。その男は俺を助け、生かしてくれた。俺は少女を助けようとした。それは叶わなかった。でも彼女は最後の最後に俺を殺すことをやめた。俺は誰かを生かして誰かに生かされている。誰かの命を背負って、背負わせて生きている。今までは気づけなかったことだ。でも今ならわかる。全然空っぽなんかじゃない。それはきつと素敵なことのはずだ。人を殺すことよりも、ずっと。

骨を埋め、最後に土をかける。

いつの間にか日が傾いていた。遠くで通訳が呼ぶ声が聞こえる。なにか良いことがあったらしい。

またいつかここに来よう。その時にはきつと、半分くらいは答え合わせができるはずだ。

はばかり／夕立実

はばかり／夕立実

はばかり

夕立実

新しい席は廊下側の一番後ろだった。教卓の真ん前の席から、ついにおさらばできる。友達のあの子はどこの席になったんだろう。

「あ、鳥島さんか。これからよろしく」

隣は浦川くんだった。身長は男子の中では小さい方だけど、社交的で誰とでも仲良くしようとしてくれる人で、一軍の陽キャラ男子たちよりは話しかけやすい子だ。

「鳥島さんってめっちゃ頭良いよね？　俺バカだからさ、授業で当てられたりしたら教えてね？」

まあ、嫌なタイプの男子じゃなかったから良かった。席替えで新しい席になってガヤついている教室に、担任の「静かに」という一声で一気に静かになる。それでもまだガヤは聞こえるが、それは外の廊下で一足早くホームルームが終わった生徒らのガヤのようだ。早く帰りたいのに。

「じゃ、明日からはこの席で学習していくことになります。一番後ろの席になった人たち、後ろだからってくれぐれも授業中に騒いだら、一番前の席の人らと交代させるからな」

担任は席替えをするたびにこのような脅しをかけてくるが、実際に席の交代が起こったことは一度もない。どちらかというが一番後ろの人は、騒々というよりは、バレないように静かにコンコン何かをやるのがセオリーだと思っているが、そんなツツコミが野暮なのは分かっている。別のクラスの先生が、溜まっていざと帰れーと言っているのが廊下から聞こえた。

「じゃ、今日のホームルーム終わりまーす」

きりーつ、れい、さよーならー。いつもの挨拶が終わると、再び教室の中は騒がしくなった。さっきよりも廊下からのガヤが大きくなったような気がする。いつもなら友達の子と一緒に帰るのだが、あの子は今日欠席だったので、特に誰かと話すでもなく、一人でさっさと帰宅の準備をし始める。古い教室の壁をガシガシ鳴らしながら、誰かが何かを言っている。

「おい浦川！　こっち来てみ！　なんかやばいらしい！」

帰ろうとしていた浦川くんを呼ぶ男子の声が聞こえた。浦川くんはカバンを雑に机の上に置いて颯爽と廊下に出ていった。通学カバンを背負って廊下に出てみると、自分たちの教室の後ろにある女子トイレの前にもすごい人だかりができていた。人だかりの多くは男子たちで、学級主任の先生がトイレの入り口の前を塞ぐように仁王立ちで立っていた。男子たちはその隙間から女子トイレの中の様子を覗こうとしているようだった。隙間からは、先生か誰かがトイレの中で何かをやっているのが僅かに見えた。一部の男子が、中で誰かが斬りつけられたとか、流血沙汰になっているとか、よく分からないことを言っているのが聞こえる。その人混みの一番内側の方に浦川がいるのが見えた。別の男子と何かをコンコン

話しながらニヤニヤしている。

「ほら、お前ら男子は関係ないぞ。受験生なんだからさっさと家に帰って勉強しろー」

先生はずっとそれを繰り返しているが、生徒は一向に減らない。一部の男子たちは先生に何かあったか直接訊いているが、男子には関係ないの一点張りでも答えようとする。私も気になったし、女子なので訊く権利はあったと思うが、男子たちに混じって訊きに行くのは場違いなので、自重してそのまま真っ直ぐ帰った。

帰り道に、トイレで起きたことについて考えを巡らせてみた。一体、トイレでどんなことが起きたらあんな騒ぎになるんだろうか。過去にもトイレで一悶着が起こったことはあるが、それはどれも男子トイレでの出来事だった。便座が割れていた、個室トイレのドアが外れていた、手洗い場の水が止まらなくなった等々の馬鹿げたことが度々起きて、その度に何の関係ない女子も含めた学年集会が行われてきている。集会では大抵いつも、「学校のもののは国の税金で賄われて……」というような言葉から始まって、「これは女子も他人事じゃないですよ」という言葉で締め括られるのが通例となっている。トイレに関して、今まで女子は何にも悪くなかった。しかし今度はいよいよ女子の番である。何があったのかは、たぶん近々行われるであろう学年集会で、軽く説明はされるはずだ。女子の一人としては、どこか屈辱的な感じがする。

そう考えていたら、自宅まであと数百メートルほどの距離ほどになっていた。最後の曲がり角がでて、私の家の玄関に目を向ける。誰かが、玄関の前にいるのが見えた。

玄関の前に友達のあの子がいた。西陽で顔が照らされていて表情はよく分からなかったけど、なんとなくあの子と目が合ったような気がした。するとあの子はこちらに駆け寄ってきて、

「ごめん。トイレのこと、内緒にして」

とだけ言って、そこからいなくなってしまった。追うことはできなかった。

「ねえ、あのさ」

思い切ってあの子に話しかけてみた。入学式から3ヶ月ほど経ったが、あの子はずっと休み時間に一人で本を読んでいる。私も本は読む方なので、数少ない本読み友達になれそうな気がしていた。急に話しかけちゃったからか、向こうもすごい動揺しているように見えた。「え」を言う時の口の形をして自分が何を言いに来たのかを待っている。定期テスト明け最初の昼休みだからか、いつも増して周りの声が騒がしい。事前に脳内でシミュレーションしたはずなのに、次に何と言うべきか途端に分からなくなってしまった。

「いつもさ、どういう本、読んでいるの？」

「あ、でも、たぶん知らないと思う」

そう言いながらも、あの子は少し早口でその本の名前を教えてくれた。それはちょうど私が積読していた本だった。「えー」と思わず声を上げると、向こうもまたすごい動揺しているように見えた。今度は「え？」の口をしてこっちを見ている。私と同じ系統の本を読む人がまさか学校にいるとは思っていなかった。窓から差ししてくる日光が熱い。一旦カーテンを閉めてから、あの子の隣の席に座って話を広げてみることにした。

「じゃあ、殺人とか、そういうミステリーホラーものとか、好きなんだ？」

そう言うと、あの子は少し頷いてくれた。

「私もそういうの好きだよ」

「じゃあ、鳥島さんもこういうの興味あるの？」

「興味……？」

「たまにはさ、悪いことしたいと思わない？」

自分の部屋に入って、勉強机の前の椅子にどっさり腰掛けながら、あの子と初めて話した日のことを思い出す。その後の会話で何を話したのかは忘れてしまった。日の光があまりにも眩しかったので、カーテンを閉めて部屋の電気を点けた。

通学カバンの内側のポケットにこっそり忍ばせていたスマホを取り出してみると、いつの間にか自分にメッセージが来ていた。例のあの子から。時間的に、席替えをする数十分前に送られたものみたいだ。

「お願い。トイレのこと、内緒にして」

このメッセージにどのような含蓄があるのかは分からないけど、既読をつけてしまったからには、私は何か返さないといけない。

結局、1時間ぐらい放置した後に「りょかい」とだけ送った。

教室には私が一番乗りだったようだ。暗いとも明るいともいえない朝の光が、窓から差し込んでくる。黒板にはチョークで大きく、「8時20分から緊急の全校集会を行います。各自準備が終わり次第、体育館へ」と書いてあった。やはり集会があるらしいが、今回は学年集会じゃなくて全校集会らしい。これはつまり、今までの男子トイレでの事件をはるかに凌駕する大事件が、私たちの教室の裏のトイレで行われたということだ。一体どんなことがあったらこんな大事になるのか、ますます興味が湧いてきた。カバンを机に掛けて、椅子にどさっと腰掛ける。はあ、と一息。ああ、今、この教室は私だけのものなのか。たとえ他人の机やロッカーの中を覗こうとも、机の上に堂々と寝転がろうとも、黒板にきつい他人の悪口を書こうとも、止める人はいないし、バレルこともない。

なんだか、ちょっと、いつもの私とは違うことをしたくなってきた。時計を見ると、ホームルームまでまだ30分ほどある。カバンの中から筆箱を取り出して、その中からなんとなくボールペンを一本取り出す。角の席から教室をぐるっと見渡す。あの子はどここの席になったんだろう。

さて。

「鳥島さん？」

途端に声がして辺りを見回す。ああ、浦川か、なんだ、よかった。ピクッと身震いした私を見て、浦川くんもピクッとたじろいだようだ。

「来るの早くね？ やっぱ天才は朝も早いんだな」

いつも教室で聞くよりもやや小さな声で話しかけてくる。いや、教室が静かだから小さく聞こえているだけかもしれない。この場にいるのは私と浦川くんだけ。

「こんな朝早く来て何するの？ やっぱ勉強？」

うーん、まあ、勉強か。ふと昨日のこの時間は何をしていたか思い出そうとしたが、瞬時には思い出せなかった。だから適当に勉強ということにした。

「やっぱあ。尊敬だわ。もし鳥島さんが海外の超頭いい大学とか行って、すごい学者とか教授とかになっ

たら、当時の同級生代表として俺がちゃんと証言してくね」

適当に返事しただけでここまで褒めてくれるとは。そのまま浦川くんが続けて言ってくる。

「でもたまにはさ、勉強以外のことしたいと思わない？　ほら、ちょっとさ、昨日のトイレの様子、見に行ってみようよ」

確かにちょっとだけなら良いかもしれない。時計をチラッと見る、まだ25分ある。ちょっとだけなら。「マジで？　鳥島さんもやっぱり気になるんだね。じゃ、行こ」

すると浦川くんはその辺の床にカバンを放り投げて、すぐ廊下に出ていった。私もその後を駆け足でついていく。トイレの前に行くど、入り口に黄色のカラーテープが3本、トイレを塞ぐように地面と並行をなして貼られていた。私の頭のあたりの高さには貼られているテープの中央には、「使用禁止。他のトイレを使ってください」の張り紙がされていた。なんとかテープの隙間から中を覗けないか、テープを引っ張って体を屈めて中の様子を見ようとしたが、かろうじて洗面台の鏡が見えるだけだった。

「ねえ、これ頑張れば下から潜っていけそうじゃね？」

一番下のテープに目を移す。床から一番下のテープまでの高さは1メートルくらい。確かにこれぐらゐなら潜っていけるかもしれない。

「ねえ、ちょっとさ、中どうなってるか見てきてくれない？　大丈夫、バレたら俺がなんか言い訳してくから。お願い！」

どきっとした。私が？　でも、ここには私と浦川しかないから、バレることはないのか。まあ、一回ぐらい、こういうことしたって別にいいはずだ。

「でも、絶対誰にも言わないでね」

「え、マジで行ってくれるの？　了解。任せてって」

音を立てずに浦川くんは微笑んだ。その笑顔は、いつも見る笑顔とは少し違った感じの笑顔だった。

「大丈夫、見張っておくから」

そう言ってくれたので、私は恐る恐るしゃがみ込んでみた。テープを少し上げれば余裕で入れる高さだった。しゃがみながらゆっくり屈伸していき、なんとかテープの向こう側に行けた。よろけながら立ち上がると、浦川くんがテープの向こうでさっきと同じ笑みをたたえながらグッドのハンドサインをしているのが見えた。それに対する受け答えの正解が私には分からなかったので、とりあえず口角を少し上げて、にっこりと微笑みながら小さく手を振ってみせた。

トイレの中まで入り込めたが、様子はいつものトイレと何の変わりもない。トイレの一番奥の半透明のガラス窓からの光が、規則的な反射をしながら中をほのかに照らしている。この光がトイレの中を照らす唯一の光源となっている。とりあえず、個室の中を一つ一つ見ていこうか。ただ、全部で3つある個室の中も、ぱっと見では何の異変もない。

「おい、浦川！」

廊下から声が響いて聞こえる。まさか、浦川くんが担任に見つかったようだ。トイレの入り口の方を目をやるが、姿見に口を開けて呆然と立ち尽くしているだけの私が映っただけだった。

「なんでっすか！　俺何もしてないっすよ」

「じゃあどうして……ですか」

「……って、誤解ですって」

「浦川……来年から高校生……本当……ない……ですか」

その後も担任は浦川くんにか叱りつけているのが聞こえたが、内容はここからだによく聞こえない。どうしよう。完全に出入れなくなった。トイレの外に誰もいなくなるまでは絶対に出入れない。多分集会まではあと数十分しかない。集会に私がないのが明らかに変わったら、面倒なことになるのは確かだ。遅れた場合の言い訳を考えようか。いや、浦川がいるから、彼の発言次第では適当な言い訳はできない。脳細胞が何とか打開策を考えようとしているが、何も案は思いつかない。

そうあれこれ思案していると、外から浦川や担任の声だけじゃなく、他の野次馬と思われる生徒の声も聞こえてきた。野次馬の声はここからだと言字通り「ガヤガヤ」としか聞こえず、具体的に何を言っているのかは分からない。もしかして、私のことについて言っているのではないか。

あれ、鳥島さん、いつもならもういるのに、今日はいないねー。

あれ、さっきあのトイレに誰か入っていかなかった？

うそーもしかして鳥島さん？

そう考えれば考えるほど、そういうふうには聞こえてきた。物音を立てないように一番奥の個室トイレにドアを閉めずに入り込み、壁にもたれながらゆっくりしゃがみ込む。左手と顔の左半分は壁にもたれ、右手で口を押さえ息を整えようとする。トイレのきつい臭いが鼻に入ってくる。

「ほーら早く体育館行けー」

ガヤに紛れて、隣のクラスの先生の大きな声が聞こえた。ガヤは昨日の放課後ぐらいの大きさにまでなっていた。もう終わりかもしれない。

ふと、左手に何か違和感を感じた。壁はパネルになっていて、滑らかな手触りになっているはずなのに、ざらざらしている。パネルに目をやってみると、なにか、黒いものが、切り傷のように、パネルに並行につけられているのが見えた。反射で左手を離す。何これ。血？ 絵画を鑑賞するみたいに、塗られている部分の凹凸やかすれ具合を観察してみる。これ、あの子がやったのか。何これ。よく周りを見てみると、便器やコンクリの壁の至る所に、チョコみたいな色の指紋や飛び血みたなのが付いていた。

数秒ほど観察をしていたら、チャイムが鳴った。いつもホームルームの5分前に鳴る、8時15分のチャイムだ。体育館へ移動しようとしていると思われる生徒たちの声と足音が聞こえる。

個室トイレの中で、なんとか待ち続ける。

するとまもなく、ガヤが少しずつ小さくなっていった。静かになったと思ったら、廊下をタタタッと走る音が聞こえた。音はどんどん大きくなっていき、一定のところを過ぎたところで音は低く、小さい音になっていった。まだ待ち続ける。脳がこの状況を受け入れ始めたのか、心臓の動きはおさまってきた。

そうして待ち続けていると、8時20分のチャイムが廊下の方から鳴ったのが聞こえた。きっと今、体育館に全校生徒が集結している。先生たちもきっとみんなそこにいるんだろう。

多分、今なら廊下に誰もいないはず。今なら出られる。いた場合は分からない。個室から出て、出口に向かう。とりあえず出ることさえできれば。角を曲がれば出口。そして、テープの貼られた出口に差し掛かった時、一瞬心臓が止まった。

テープの向こうに、あの子がいた。止まった心臓の分の血圧で、思わず足を一歩引いてしまった。

「なんているの。トイレ、見たの」

あの子はテープの隙間から手を伸ばそうとしてきたが、こちらには届いていない。すると今度は、テープを両手で握りしめ、鋭い爪をした親指をテープに押し当てて破ろうとしてきた。いつの間にか私は、ポケットにずっと入れていたボールペンを、刃物を持ち構えるかのように握りしめていた。このボールペンで一体何ができるのかは分からないけど、これがその時の私ができる最大限の脅しのようなものだった。しかし、テープの一本が簡単にベリッと壁から剥がれ落ちたのを見て、やっぱり個室に逃げ込んで耐え凌ぐことにした。それを見抜いたのか、あの子は、待てと連呼し始めた。しかし私の方が一枚上手で、なんとか先に個室に逃げ込むことができた。貧弱な見た目のロックをかけて、そのドアに両手を全力で押し当てる。するとドアの奥でまた別の音が聞こえた。隣の個室の方から、ガコツみたいな便座をずらししている音がしている。パネルの壁を叩く音も聞こえる。まさか、上からこっちに来ようとしている？

その時、外からバタバタと誰かが駆けてくる音が聞こえた。誰かがトイレの物音に気づいてくれたのか。「ちょっと、なんで」

個室にいたので、誰が言ったのかはよく分からなかった。何が何だか分からないが、ドアの向こうで叫び声みたいなのが聞こえる。すると叫び声と泣き声の間みたいな声が聞こえてきて、その声は少しずつ小さくなっていった。多分、あの子はどこかに連行されていったみたいだ。

「鳥島さん、いるの？」

名前を呼ばれたので恐る恐るドアを開けてみる。

「あ、鳥島さん。大丈夫だった？」

ドアの向こうには去年の私の担任がいた。私にあまり驚いた様子はない。

「みんなが集会に行ってる間にね、トイレの前でなんか怪しいことしてた浦川を捕まえて、一部の先生たちと一緒にいろいろ事情を聴いてただけど、鳥島さん、浦川に言われてトイレに入ったんだって？」

まさか、鳥島さんがそんなことするとは思わなかったよ。浦川みたいな奴のことなんて、簡単に信用しちゃダメだからね。まあ、とりあえず外、出ようか」

トイレを出ると、昨日と同じくらいか、それ以上の人がトイレの前に形成されていた。人だまりの一番内側には先生たちがたくさんいて、自分を守るみたいに私を取り囲んでくれていた。しかしそこから出ると、外側の野次馬の生徒たちにすぐ絡まれてしまった。クラスの陽キャラ女子たちが、ニヤニヤしながらこちらにやってきている。

「ねえねえ、さっきまで、浦川と何してたのー？」

答える間もなく、別の女子が口を挟む。

「ていうかさ、女子トイレの中どうなってた？」

「そうそう、集会で言ってたよね。中、やばかったでしょ？」

答え方が分からない。脊髄反射的に脳が答えた。

「特に、どうも、なってなかった」

「えー？　なんでー。嘘つかないでよー」

しるしのの / 粘南

いることの/釉南

いることの

釉南

人魚姫は王子との恋が実らないと、泡になる呪いをかけられたらしい。泡になるなんて詩的な表現に聞こえるけれど、要は消えてなくなるといふことだ。大海の中の小さな気泡に「なる」のではなく、存在が「消える」のである。

某日、大陸のある村で人が行方知れずになる事件が起きた。地方メディアは当初、何者かによる無差別誘拐事件として報道した。ところがその数日後、都内で一夜にして五十三名の姿が消えた。現在、組織的な力が働いているのではとの疑いがかかり、世界的な注目を集めている。

国際機関立ち会いのもと実地調査が行われたが、一か月過ぎても詳細は掴めず、その間にもこの現象は国を超え広まっていく。

半年が経つころには世界のおよそ二割が行方をくらました。

調査は酷く滞った。目撃情報が少なく、発覚も遅かったのだ。人が消えても消えたことに気づくまで数日かかり、調べようがなかった。

とても人力とは思えない現象。何せ突然人が消えるのだ。跡形もなく、ある日忽然と。

さらに半年が経ち、事件発生から一年が経つと、世界の人口は三割になっていた。タナカは帰宅時間にも関わらず人気の少ない電車で揺られ、約束の場所に向かった。

都心から電車を二つ乗り継ぎ、三時間かけると景色は閑散としてくる。都心のビルは見る影もなく、視界は緑と青で覆われる。いつものように山奥の岩場まで行くと、スズキは既にそこにいた。

「なんだ、来たのか」

軽口を叩くその額は汗の粒だらけだ。随分と待たせてしまったようである。

「悪いな、昨日の夕方に手紙が届いたんだ」

人が消える原因は依然として謎のまま。場所も世界の各地だ。テレビは番組数減ったものの放送はされているし、インフラも機能はしている。とはいえどこも人手不足らしく、届いた手紙の日付は先月のものだった。

タナカがスズキに会ったのは小学三年生の夏。両親と喧嘩して家出したタナカは、偶然この村に行き着いた。山に沿って形成されたこの集落は、人がとにかく少ない。少し歩くともう、西日が完全に山の下へいってしまった。迷い込んだ見知らぬ土地に不安になったタナカは、どこかもわからないその場所であらずくまった。どうしていいか分からず、いよいよ泣き出しそうになったその時、スズキが通りかかっ

たのだ。

「お前、見ない顔だなあ。どこから来たんだか知らねえけど、夜の山は危ないんだぞ」

伏せた顔を上げると、蠅の飛んだ街頭に照らされ、自分と同じ歳くらいの男の子が覗き込んでいた。麦わら帽子を被り、白いタンクトップに紺色の短パン姿の少年の格好に、タナカはギョッとした。

道に迷って帰れないと伝えると、もう今日の電車はないから、帰るなら明朝だと言う。帰る手段がないと知り、無計画にここまで来た自分が情けなくて、腹が減ったのが辛くて、びいびい泣き出してしまった。

スズキは急に目の前の身綺麗な少年がぐずぐずし出したことに当惑した。適当に電車に乗って、気づいたら寝てしまって、慌てて降りたら知らない土地だった、なんて。

えぐえぐとしゃくりあげる少年が、面倒で、でも流石に放つても置けないと肩を揺する。

「とりあえず俺の家に来いよ。寝る場所くらいあるからさ」

「それで、どうしたんだよ。お前から手紙を寄越すなんて珍しい」

スズキには両親がない。両親だけじゃなく、兄弟も、親類もない。物心着く頃には天涯孤独だったらしい。それでも小さな村だからどうにかなったようで、この辺りの大人はみんなスズキの育て親のようなものだ。

「人手が足りなくて畑の方が回らないから、助っ人に来てもらおうと思ってな。こんなに遅くなるとは思ってなかったからダメになったのも多いけど」

「村の人たちは」

「セキさん家と、それから去年結婚したサガノさん分かるだろ。その人たちだけだ、残っているのは。先週もマキベさんがいなくなった」

セキさん一家は仲が良く、タナカも度々お世話になった。この村に嫁いでくる人はなかなかいないから、サガノさんの結婚は村総出でお祭り騒ぎだった。

想像以上に大勢の人間が消えている。若者は殆ど居ない村で、妻帯していない者も多かった。それにしてもこの人口は、百はあったはずだ。

「半年前に、突然三十人くらい消えた。その後一家でここから出てったのがちらほら。」

「早いな、この国で消え始めたのも、半年前からだろ」

「だからビビったんだろうな、結局どこに行っても変わらないみてえだけけど」

「それにしても、この量を二人では無理だろ」

一面緑が広がる畑を見て、タナカはため息をついた。

「それで、本当は何の用だったんだ？」

それまで休めず作業をしていたスズキの手が止まった。二人の間を生暖かい風が吹き抜ける。スズキからは、滅多にタナカと連絡を取らない。あの夏の日、腹を鳴らし続けるタナカに飯までくれたスズキ。タナカはその後スズキの元へ通い詰めた。中学に上がってからは頻度こそ減ったものの、手紙を送りつけ近況を聞きたがった。

「別に、特に意味はねえ」

どこか歯切れ悪そうにこたえるスズキの様子に違和感を覚える。スズキは普段、こんなふうになにかを濁したりはしない。タナカのことでも都会の甘えた坊ちゃん、馬鹿にする様子を隠そうともしなかった。タナカは同年代の少年が一人で立派に生活する様を見て憧憬の念を抱いたから、スズキにべったりで、侮蔑の目すらどうでも良かったのだが。

「また来いよ」

冬になると、世界の人口はますます減っていった。タナカは変わらぬ日常を送っていた。

「どうやら、人との関わりが薄い方がいなくなりやすいようで」

「はい、こちらの統計を見ていただくと、単身世帯の失踪率は家族世帯より格段に高いと分かります」

「家族がいらっしゃる方でも、会話の数が少ないだとか、単身赴任をされているとかで、行方知れずになる割合が高くなっているようですね」

「いまだに何者の作業なのか、そもそも人の手によるものなのかすらわかっていません。もし人の手によるものだとしたら世界各地に点在する何らかの組織集団の作業ということですが、その姿は欠片も見られない」

「オカルトじみた話が浮き上がってくるのも無理ありません」

ふと、タナカはスズキのことを思い出した。夏以来スズキの元へは行っていない。あの日だって塾の夏期講習をバックレて行ったのだ。受験生が塾をサボるなんてと、母にはこっ酷く叱られた。他にも田舎の祖母と連絡が取れなくなったために、両親が慌ただしくしていたのもある。

「クラスの人も減ってきちゃったね」

お昼を食べていると、ナカムラが話しかけてきた。彼女はタナカと小学校が同じで、何かとタナカに話しかけてくる。

「そうだな。なんていうか」

地味な奴から、と言おうとして言い淀んだ。

「あ、オノちゃんだ」

廊下からひょっこり顔を出したのはナカムラのお気に入り、オノちゃんだ。何かと構うので、オノちゃんは居心地が悪そうだ。断れもしないのだろうか。

「おい、あんまり困らせないようにな」

小声で忠告すると、

「困らせてなんてないわよ。それに、これは慈善活動なの」

ナカムラはムツとした表情の後、意味ありげに人差し指を立て囁いた。

「慈善活動って」

「だってほら、この間のニュースで、人と関わり薄いと消えやすいみたいなこと言っていたじゃない」

それで、慈善活動か。またおかしなことを考えているようだ。

「オノちゃん、親とも上手くないってないみたいだし、いつも喋っていたアベちゃんは先週消えちゃったもん、危ないでしょ」

親切心からなのだろう。空回りしていることも多いが根はいいナカムラのことだ。

「まあ、親は私も似たような感じだしね」

貼り付けた笑顔を向けるナカムラに、タナカは何も答えられなかった。

週明け学校へ行くと、教室に來たのは十人くらいで、ナカムラはそこにはいなかった。

ナカムラと約束をしていたのであろうオノちゃんは、教室を覗いた後その姿が見えないことに愕然としていた。

思わず声をかけたところ、保健室へ同行することになった。

「ナカムラさんは」

「先生が、連絡取れなくなったってさ」

ぎゅっとお弁当を抱き込む姿は、恐怖を感じているのとはまた違う様子だ。

「アベちゃん、先週消えちゃった友達なんですけど、アベちゃんは親と仲良くないって悩んで、それで話すようになったんです。小さい弟と妹がいるみたいで、そっちにかかり切りらしくて。私も両親は兄ばかり見ていて、それがずっと嫌で、嫌っていうか何か、私の価値って薄いなあみたいなのがあって」

ポツポツと語り出すその内容は不明瞭で、何が言いたいのかよく分からない。タナカは口の挟み方も分からず黙って聞いていた。

「でも私、アベちゃんに自分の話はあまりできなかった。ナカムラさんにも。いつも話しかけてくれるのはアベちゃん、最近だとナカムラさんで、二人が消えちゃったのってもしかして、私のせいなのかなって」

オノちゃんのいうことには何の根拠もない。自分と関わりがあった二人が消えてしまい動揺しているのだろう。それでもタナカは何も返すことができなかった。

翌日、オノちゃんは現れなかった。隣のクラスを訪れたが、連絡が取れなくなったようだと言われた。冬の寒さが、人気のない校舎を吹き抜ける。来週は受験本番だ。

人は消え続けている。この頃はもう、この現象を人の手による犯行だと考える者はいなくなっていた。謎のウイルスによるものではないかとの疑いから立てられた対策部隊も、何一つ情報を掴めていない。情報は一歩歩きを始め、宇宙人侵略説や選民思想が唱えられたが現実味を帯びたものは殆どない。

「事件発生当初は身寄りのない人間を狙った誘拐事件だと思われていました。消えたのはそう言った方ばかりで、だからこそこの件は発覚が遅れた。しかし今や、世界の人口は一割を切りました。誘拐したところで隠せる人数ではありません」

「以前のお話ですと、人との関わりが薄い方は、消える確率も高いということでしたが」

「ええ、ですが以前から、家族がいるような方々、友人が多い方でも消えはしていたんです。そこが分からなかった。先日の話し合いで出たのは、孤独感の強い人ほど消えやすいのではないかという説です」

夏になった。太陽のぎらつきが目にも痛い。タナカはスズキの元を訪れることにした。

山奥の河の側にある木製の小さな家。いつもなら家の周りにいるのだが、暑いから中にいるのだろうか。コツコツと戸を鳴らすが返事は聞こえない。

「おい、来てやったぞー」

戸口を押すと不用心なことに開いていた。

部屋の中は人の気配がなく、埃をかぶっていた。

嫌な予感がして、セキさんの家に駆けた。幸いにも家にいるようで人の気配がした。セキさんもつい先週までスズキの姿を見ていたらしい。

「たまにこっちに降りてきては、駅の辺りをうろついていたね。珍しく思いつめた顔だったな」
煩わしい蝉の音が頭に響いた。

エイプリルフール／なすですな

エイプリルフル/なすですな

エイプリルフル

これは、某大学2年の夏、私と同期のトオルは、日差し強い日中、冷房の効いた大学付近のカフェに昼食がてら入った。席について、少し大学の話をし、それからトオルの留学話が始まった。

彼は私と同じ某大学の英米文学科に所属し、1年生の10月にイギリスに向かった。機内は静かでありいつも以上に深い眠りにつき、イギリスにいつのまにか着いていた。目をこすりながら、ぼんやりイギリスの都市部に行くとき、そこには昔ながらの石畳やレンガ造りの街並みが広がっていた。まるで歴史の中の一人物となった気分だ。留学先の大学をみると、白レンガの宮殿を思わせる。現地の学生とは言語の壁を多少感じながらも順調にいき、大学のイギリス人も親しくなった。その中に、ジェームズという、身長185cmで、短髪の眼鏡をかけた物静かな男がいた。知らない人にはあまり話さないが、親しくなった人には心を開くという感じの性格だ。未知なものが好きで、気色の悪いオタク気質を持っていた。しかし、いいやつではあった。そんな彼とは講義で席が近くになった時に、話しかけたことで友達になった。

イギリスにいるのも残りわずかとなったある日。ちょうどその日は4月1日のエイプリルフルだった。イギリスは、特殊な文化で午前中だけ罪のない嘘やいたずらができ、午後からはそのネタバラシが行われるという形だ。彼は渡航前にイギリスについてグーグルで調べたときに、このことを知った。平日ということもあり、午前中は、講義の合間、数人のイギリス人の仲間に嘘をつき、その仲間から「それは嘘だろ」と言われ、「いやいや、本当だよ」とトオルが言うのを繰り返して、楽しくやりとりをした。最後に、ジェームズに嘘をつこうと思いつき、ジェームズのところに行った。トオルは先ほどの嘘を少し変えて嘘をつき、それに対し、嘘だね、と言葉には出さないが、ジェームズはそういう雰囲気を出し、「そうだね」と言った。そして、ジェームズも「最近、某有名俳優に会ったんだよ、めちゃくちゃ、髭面で男前でね、いや〜かっこよかった」と絶対会えないような人物と会っており、トオルは明らかに嘘だろと思った。続けて、イギリス人の彼は「あと、つい昨日の深夜、軽く散歩した帰りに、道端で世に見たことない奇妙な生物を見つけたんだよ、なんか豚のような顔の二足歩行で歩く一般的な2歳児ぐらいの大きさの。単純に面白そう、その生物を拾って、家で飼い始めたんだよ」と長々と話した。これまた明らかに嘘っぽい。トオルは「あー、そうなんだ、面白いね」と軽く流し、場が流れ、普通に世間話をした。

午後になった。いよいよネタバラシ。嘘だったことを午前中に話した人に伝えるに行く。学校の休み時間に仲間に話に行き、ネタバラシをして、またそこで軽く談笑をした。私はジェームズにも嘘ということ伝えるのもそうだし、何気にジェームズが聞いた後者の嘘は後から考えると、いかにも詳細だったから、幾分気になった。しかし、彼とは学校では会うこともなく、彼の家は知っていたので、放課後、向かった。着いて、軽くドアを3回たたいた。そうすると、ジェームズは瞬時に出てきて、「おー、どうし

た、トオル」と彼はたずね、トオルは「いや、今日午前中、ついた嘘のネタバラシをしたくて、あれは嘘だよ」と言うと、「まあ、そうだよな」と笑いながらうなずいた。すぐ、「もう一つ、今度はジェームズが言っていた奇妙な生物を飼っているのは嘘だよな？」とトオルは聞いた。すると、「某有名人と会ったってのは、嘘で、生物の方は本当だよ」と少し笑みを浮かべながら言った。私は軽く驚き、同時にひんやりとした感じがした。ジェームズが「その生物を見せようか」と言い残し、自分の部屋に急いで行った。トオルは胸をドクドクさせながら待っていた。ジェームズがその奇妙な生物を連れてきて、それを見ると、原因不明の不思議な怖さを感じたが、まだ幼く、たぬきの置物のような可愛げがあった。まだ歯があまり生えておらず、ジェームズに時々、痛くない甘噛みをしたりと見ていて、愛着を感じさせるほどだ。「奇妙な生物だけど、なんか可愛いね」とトオルが言うと、「そうだろう」とジェームズが言った。トオルもその生物と軽く戯れて、ジェームズと今日は他の友達にこんな嘘をついて、などを言い合い、それをお互いに笑っていると、あつという間に日が暮れていた。トオルは「もうそろそろ、帰ろうかな、じゃあまた明日」と言った。ジェームズも「おう、また明日」と奇妙な生物と共に私を見送った。私は家に帰り、その奇妙な生物について改めて考えようとしたが、「いや、そんなことはない」と思い、寢床についた。翌日、翌々日と特に何もなかった友達とくだらないことで笑いあったり、ジェームズと奇妙な生物は最近どうだなどと話す日常だ。

それから留学の最終日を迎えた。空港につくと、同じ大学の仲間たちが見送りに来てくれた。「お前がいなくなって寂しい」や「また、イギリスに戻って来いよ」とうれしい言葉ももらい、涙が出そうだった。しかし、その集団の中にはジェームズの姿は見当たらなかった。「なにか、用事があったのだろうか」と無理やり自分を納得させ、みんなに別れを告げ、空港を立った。日本に戻ると、時差が9時間あったため、日本の生活に慣れるのに少し苦労した。そして、日本のごほんはイギリスに比べとてもおいしかった。話は現在に戻り、「イギリスはいいところだったんだよ、だけどジェームズはどうしたんだろうな」と宇宙を見上げ、話を止めた。

私はこの話に出てきたその奇妙な生物に興味を持った。その生物は具体的にどんな特徴だったのかと、私が聞くと、彼は「そうそう忘れてた、写真を撮ってたから、見せるね」と言い、咄嗟にスマホを取り出した。それをみると、まるでおとぎ話や民話に出てくる人間を食らう巨人オーガーを可愛くしたようなものだった。

「そうなるよ、ジェームズが来なかったのはまさか……」

私はその瞬間、息をぐくりと飲み、うすら恐怖感を覚えた。虫唾が走った。「今頃、ジェームズはどうしているのかな」とトオルが言った時、私は少し胸がぞくぞくとした。

そんなことを思い出し、3年生になった今、再び彼にあの話について聞いてみた。聞くと、「いや、あれは嘘だよ、ごめんな、そんな話はない」と言った。そんな今日は、4月1日のエイプリルフル。その午前中だった。

分解 / 高瀬静

分解／高瀬静

分解

高瀬静

部屋に、窓はない。薄暗く、低い天井から釣り下がった水銀灯だけが事物にゆるい輪郭線をあたえている。その中心、夜より黒い影に囲まれた位置に、長い机がある。そこに、うすだいたい色の物体が乗っている。細長く、丸みを帯びたその物体は机をほとんど占領してしまうほどに大きい。水銀灯の冷たい光を浴びて、さながら遠い異星の鉱石のようである。

彼はひとり、それを見つめている。影と同じ色の瞳で、ちっと、アルミの丸椅子に腰かけながら見つめている。そこには何の感慨もあるいは感情もない。彼もまた、物体としてそこにある、のかもしれない。いくばくかの時間、のよなものが流れて、彼はふと、古い柱時計の振り子のような緩慢なリズムで立ち上がった。あまりにも天井が低いので、彼の頭が水銀灯にぶつかった。水銀灯がゆらゆら揺れている。机の横に、白銀の道具が規則正しく並べられている。彼は、その中でも、ひととき薄いものを手に取った。

そして、彼は仕事を始める。

その鉱石を、分解する。

薄い白銀に撫でられた鉱石は、鋭利に開かれて、内側の赤い純潔をさらけ出した。純潔はにじみ出て、滑り落ち、机の上に地図を描く。彼はそれを気にすることもなく、ただ黙々と、うすだいたい色の表面を破っていく。丁度、手のひらほどの赤が見えたあたりで、彼はそれを物体から切り取った。ひろげてみると、古い書物のようにも見える。折りたたんで、道具と共に並べられたトレーに乗せる。

手順は何度か繰り返された。ややあって、物体のほぼ半分が赤くなったあたりで、彼は一度、道具を置いた。

その間にも、彼の頭は何度も水銀灯に当たり、部屋を照らす小さな光は、右に、左に、あるいは前に、後ろに、四方八方に揺れていた。光に照らされている事物の輪郭も、また同じように揺れていた。右、左、前、後ろ、ゆらりゆらりと、光と影が激しく脈打っていた。

彼は真っ赤な手のひらをシャツの裾で拭い、ふう、と、溜息を吐いた。倒れこむ様に椅子に座り、揺れる明かりを見上げ、目を細めた。

「大変だなあ」

*

「大変だ」

店内の喧騒にしばらく揉まれた後、息継ぎをしたくなって、私はひとり、少し離れたカウンター席に逃げこんだ。あらゆる音調と、色調が乱れる空間にうんざりしていた。クリスタルグラスに注がれた憂鬱な液体が反射する、やたらと華美な照明の光を見つめて、私はたしか、誰に言うでもなく、そう、つぶやいたのだった。それを耳ざとく聞きつけたのがあの人だった。

「何が大変なの」

エメラルドの表面を紙やすりで闇雲に引掻いたような声だった。

聞かれているなんて思わなかったから、私は、とっさに取り繕う声も出せず、ああ、だとか、うう、だとか、曖昧に呻いてそれに答えた、ように思う。あの人は、そんな私を唾うこともなく、かといって責めることもなく、ただ微笑んでいた。

「いえ、別に、ただ」

「ただ」

「すごいな、と思っただけです。あの人たちも、あなたも、私にはできない」

本心だった。不眠症の巷で飲まされるようになって、夜の泳ぎ方を覚えるにつれて、私には所謂『馬鹿になる』才能がないことが分かってきた。そして、それが決して、『賢明であること』を意味しないことも。私は、あの人々と同じ世界では、うまく息が出来ない。

そういう人間がどうなるか、私は知っていた。暗がりで、ひとり静かに狂うのである。

「それでもないのよ」

あの人は煙草に火をつけながら、言った。

「それでも、ないんですか」

「ええ。だれでもやっていることでしょう」

「……」

その、だれにでも出来ることが、私には出来ないのだ。すこし、むっとした。それからすぐに悲しくなった。

「うまく生きられる人なんて、そんなにいないの。ただみんな、うまく生きてるフリをするのが、うまいだけ」

「生きているフリも、生き方を知らないと出来ないでしょう。私には、そもそも生きるということがないのが、わからない」

「随分と世界の近くで生きているのね」

それは、あるいは独り言のようでもあった。

「……どうですか」

「正直者、ってこと」

「いいえ、きつと、違います。私はただ、嘘のつき方がわからないだけなんです」

「でもそれは、とても素晴らしいことのはずよ」

「こんなにも苦しいのに？」

「……君に嘘のつき方がわからないように、私には、その苦しみが分からない」

うらやましい——と、あの人は言った。やはり、独り言のようであった。

「あなたは、嘘つきなんですか」

「ええ」

私は顔を上げた。初めて、あの人のまあるい目を見た。

「この店の誰よりも」

「……なら、私に嘘のつき方を教えてください」

あの人は声を上げて笑った。細めたその目に、歪んだ私が映っていた。

私は確かに狂い始めていた。

*

鉱石の、ひとときわ光沢がある部位に、彼の姿が映っている。彼はそこに、か細い切れ目を入れ、表面を劈開させた。光沢はさらに増して、彼の虚像がまあるく歪んだ。彼はその姿を、縦一文字に両断した。

内側が露出した。粘性をもった硝子があふれ出した。彼は、親指と人差し指でつまむようにして、それを出し切った。小さな破片がいくつ流れ出て、後には、しぼんだバルーンが残った。

「ここにもない」

彼は呟いた。

彼は、机の反対側に回り、同じ手順をもう一度繰り返した。やはりない。

鉱石は、前よりも少し複雑になっていた。水銀灯がちらついて、その輝きは、いよいよもって荘厳である。しかし、それは教本にも書いてある美しさであった。彼の求めるものではない。彼が求めているのは、もっと美しく、もっと不思議なものであるはずなのだ。

理解できないなにかを理解したくて、見たことのないものを見てみたくて、彼はいま、この暗い部屋に籠っている。

分解は続く。

備え付けられた通気口は、その責務を全うしていなかった。温度の無い空気が滞留している。無理もない。あまり広くない部屋は、こういう類の作業をするために作られてはいなかった。湿気を吸って、影がクレパスのような質感になっている。金属と脂の匂いが充満している。

それでも、分解は続く。

純潔が描く赤い地図は机の領土を侵しきって、ついには床をもその版図に加えようとしていた。重力に従って、尖兵が突撃していく。ぼたり、と微かな音が鳴る。ぼたり、ぼたりと、連続して鳴る。ぼたり、ぼたり、ぼたりとその間隔は徐々に狭まっていく。やがてつながり、尖兵は一つの小隊となった。呐喊が、静かな部屋に鳴り響く。

*

降雨。

私は寢床の中で雨樋の音を聞いていた。頭の奥の方が鈍く痛んだ。酒がまだ残っていたのだ。いつま

で経っても、出来の悪い私の頭は、酒精に情けなく屈服するのであった。

部屋は暗かった。現在時刻を確認するために、枕もとのスマートフォンを見た。強い光が目を刺した。視細胞が息を吹き返すころ、デジタル時計のアラビア数字は、私に、まだ寝ていてもいいと教えてくれた。「何時？」

隣の布団で寝ていたあの人が言った。その声が、妙にあどけなかった。

「六時です。まだ寝ても大丈夫ですね」

「そう……」

あの人は背を向けて、丸まった。

しばらく沈黙が続いた。重たい頭と嫌な感じがする胃袋は、一度目覚めてしまった私の意識を、離してはくれなかった。だから、私はずっと、雨樋の音を聞きながら、青く、黒い寢覚の虚空を見つめていたのだった。

「昨日は結構飲んだね」

「そうですね」

「大丈夫？」

「さすがに慣れましたよ」

とは言ったものの、私の身体は、動き出すことを頑なに拒んでいた。痛くて、重たくて、怠くて、まるで昨日の夜をそのまま着込んでいるみたいだった。

おそらく、あの人はそれを見通していたのだろう。いつもならすぐに起き上がってカーテンを開けるのに、その日は、しばらく私に付き合っ、寢床の中に入れてくれたのだ。

そして、また、幾ばくかの沈黙があつて、唐突にあの人は言った。

「嘘のつき方は、わかってきた？」

「いいえ。だって、あなたが教えてくれないから」

「そりゃあそうよ。嘘のつき方を教えたら、私の嘘までばれちゃうじゃない」

「……ばれてもいいじゃないですか」

「駄目。いくら君でも、私の嘘は教えない」

いくつの夜を明かしても、いくつの朝を跨いでも、あの人は、その内側に隠した『嘘』を私に教えてはくれなかった。それさえ知ることができれば、私は、うまく息が出来るような気がしていたのに。もっと楽に生きられそうな気がしていたのに。そのことは、あの人がわかっていたはずなのに。

「ひどいひとです。私に、このまま苦しみ続けろというのですか」

「その通り。そのまま苦しみ続けなさいな」

「あんまりだ」

「なら離れればいいじゃない」

「……やっぱりひどい」

あの人は笑った。

「私の嘘は、だれにも渡さない。このまま抱えて、地獄まで持っていく」

「そんなこと、閻魔様が許してくれませんよ」

「そうかしら。……そうかもしれないわね」

「きつとそうです。だから、あなたは、嘘をこの世界に置いていくしかない」

「だとしても、君にだけは渡さない。私の身体の内側で、一緒に燃やしてもらおうわ」

「なら、その前に、私が取り出してみせます」

あの人は笑った。その声が妙に湿っていたのは、雨の所為ばかりではないと、思った。

「馬鹿なこと言っていないで。ほら、そろそろ起きましよう。ご飯作るわ」

「……本気ですよ」

私は、小さな声で言った。あの人はなにと言わずに、とび上がるように寝床から出て、キッチンへと向かった。それからすぐに葉缶を火にかける音が聞こえた。

しばらく寝床でその音を聞いていた。寂しくなって、隣にあるリネンの布団に手を入れた。あの人の温もりは、もう、どこにもなかった。

新しい日の冷たさだけが、そこにはあった。

*

彼は鉱石上部の穴に手を突っ込んだ。そして、内側に仕舞い込まれていたいくつかの構造物を取り出した。小ささまざまなそれらの構造物は、みな一様に光沢を帯びていて、冷たかった。

彼は机の上の鉱石を床におろした。代わりに、机の上には取り出した構造物たちが並んだ。水銀灯の下で、彼は、それらを一つ一つ分解し、観察した。

あるものは拳ほどの大きさであった。形が最も複雑であったから、彼は大いに期待していた。しかし、切り開いても、純潔の塊がぬるりと滑り出したほかには、なにも出なかった。

「ない」

あるものは文庫本ほどの大きさであった。色が最も暗く、つぶさに観察するためには、持ち上げて水銀灯に近づける必要があった。彼はあまり期待していなかった。はたして、中は伽藍洞であった。

「ない」

あるものは細長く、幾何学的な形をしていた。何かをしまっておくにはうってつけの形であったが、それでも彼は期待してなかった。こんなわかりやすいところに隠されているわけではないと思っていたのである。それでは簡単すぎて、甲斐がない。やはり、内側にはほとんど何もなかった。

「どこにもない」

あるものは非常に単純な形をしていた。あるものは小さな幾つかの構造物に分かれていた。あるものは砂のように脆かった。

「みつからない」

しかし、どこにも、彼の求めるものはなかった。

最後に分解した構造物は、様々なインクルージョンを内包していた。それらは、午前六時や十時、正午や、午後五時や九時、深夜二時などの気配をまとっていた。

彼は、その中に、どの時間にも属さない、妙な物体を見つけた。

それは手のひらに収まるほどの透き通った球体で、他のどの構造物よりも、部位よりも、鉱石よりも

美しかった。あまりにも美しく、それでいて嘘くさかった。

「これだ」

それこそ、彼が探し求めていたものだった。

*

あの日は珍しく、あの人が店に来なかった。電話も通じなかった。みんな心配していた。手分けして、あの人がいそうなところを色々と探してみたけれど、見つからなかった。どこかで酔いつぶれているのだろう、明日になればひょっこりと顔を出さず、と、人々は口々に言った。それで、お開きになった。

でも、私にはそうは思えなかった。

嫌な予感がしていた。私はまだ探すつもりでいた。荷物を置きに、自宅に帰ったら、あの人があった。

揺れるあの人は私を見下ろしていた。思えば、あの人と目が合うのは、それで二度目であった。

*

球体の中を透かして見ると、中に何かが入っているのが見える。彼は碎いて、それを取り出してみた。くしゃくしゃに丸められた紙だった。広げると、流麗な筆致で、なにかが書いてある。

彼はそれを何度も読み直した。ひっくり返したり、裏返したり、手の中で温めてみたり、折り曲げたり。謎を解くように何度も、何度も。

しかしそのうち、読むのを止めて、元のおりくしゃくしゃに丸めて、部屋の暗い隅に放り捨てた。そして、笑った。

「はははは。はは、ははははは。なあんだ！」

紙にはただ、

『すき』

とだけ書かれていた。

*

そのまま部屋を出て、二度と戻らなかった。

宇宙論的寄神／今泉とびら

宇宙論的寄神／今泉とびら

宇宙論的寄神

今泉とびら

一年生になったら。友達百人、とまではもちろん行かないが、交友関係がグッと広がるものである。百人を指すには、大学生にとってサークルの存在はやはり大きいだろう。

黎新大学ボランティアサークルにも何人かの新入生が入ることになったので、梅雨が始まらないうちに、ボランティアサークルは通常活動であるゴミ拾いを始めた。

黒見空は周りを見渡して、会話を混ざれるとしたらどのグループだろう、と考え、会話の弾んでいなさそうな一組の男女ペアに目を付けた。既にデキている先輩カップルだったら気まずいが、空の記憶ではどちらも新入生だったはずだ。

「こんにちは。新入生の方でしたよね？」

「はい、黒見さんでしたよね？ こんにちは。緑川大地です」

「こんにちは！ あ、私は青井海って言います！」

「お二人は学部どちらなんですか？」

「理学部です！」

「俺は工学部」

「そうなんです、私は人文で」

空はまず、大学生の定番、学部トークで様子を見る。学部も講義も被っていないさそうなことが少し悔やまれた。

「ようやく活動らしい活動が始まりましたね！ 合宿も楽しみです！ 自分は弘原【こうはら】島なんて行ったことないです。お二人はどうしてこのサークルに入られたんですか？」

「地球環境のためです。工学部生として、そこには責任を持たないといけない」

「私もそんな感じです」

「よかったー！ もちろん私もそうです！ ガクチカになるから、なんて理由じゃ寂しいですから」

「わかります」

「あ、そういえば、空さんの趣味、聞いてもいいですか？ 私も大地さんも読書が好きなんですよ」

「本……私、人文学生なので理解は怪しいですけど、SFが好きで……本とはズレますけど、マトリックスとか、おもしろいですよね」

「マトリックス！ ちょっとさっきその話をしていたんですよ。どっちの капсуルを飲みたいかって」

「私はレッドカプセルです」

「ですよー！」

「いい判断です」

三人は意気投合した。

海は港町の出身だった。町の誰もと同じように、海に親しんで育った。海は錆びた自転車で海岸まで下りていくのが好きだった。海は雄大で、きらきらして、そのくせ冷たくて、それが海にとって心地良かった。

海にとっての契機は大地震だった。

その地震は、想定を超える規模の津波を引き起こした。あの海が、港町の人間を何人も殺した。町は見る影もなかった。

それだけでは済まなかった。津波は原子力発電所の事故を引き起こし、周辺地域は汚染されてしまった。海の故郷も帰宅困難区域に指定され、未だに住むことはできない。

海は思った。海は悪くない。悪いのは人間だ。そう直感した。第一、原発を地方に押し付けているのは都会の人間だ。でも、津波に飲まれた、あの気のいいお隣の阿部お婆さんたちが悪いのではないとも感じていた。阿部お婆さんは東京からお嫁に来たはずだった。だから、悪いのは悪い人間たちだと考えた。それはトートロジーだったが。きっと、この地震も、事故も、計画されている。そういう発想がもたらす境地は至極明快だった。

全ての悲劇は悪い人間の悪意がもたらしたものだ、と。

今では海は、人類は既に自然を掌握していると考えている。そして、それを是としていない。要は、人工地震論を支持しているのだ。自然の純粹さのために。

海は人間はもつと質素で、それでも満ち足りた生活に戻るべきだと考えている。かつて存在したであろう原始的な社会に思いを馳せながら。

大地はテレビっ子だった。彼は退屈さからCMにまで目を凝らしていた。そのため、大地は食品会社のCMソングを片っ端から歌えたが、時折テレビで放送される気候変動に警鐘を鳴らすCMの不気味さもまた大地の脳裏にこびりついていた。

大地にとっての契機は二つある。

一つは図書館でとある本を見つけたことだ。

大地は授業で調べ学習をするような年齢になり、参考資料を探しに訪れた図書館の片隅に、食品添加物の危険性を伝える本を見つけた。それを読んだ大地は恐れ慄き、父にその話をしてみたのだ。

「気にすることない」

何の根拠もない父のその言葉で気がついた。大地が恐れるべきは自らの死ではなく、皆が不幸になることだった。

もう一つは、とある動画のサムネイルを見たことにある。

大地の家族はインターネットを愛好していた。一時期、夕食時にはパソコンをテレビに接続し、動画を流すのが日課になり、皆楽しんでいた。テレビっ子の大地にとって少し不満だったが。

ある日の夜、父はその大きな液晶にグロテスクな動画を流し始めた。それは何の変哲もない家族団欒と呼ぶには異質な光景だった。しかし、母も弟も何の文句も言わなかった。彼らもまた、グロ耐性が強

く、悪趣味だった当然、大地は目を逸らした。

ようやく動画が終わったので、大地は画面に顔を向けた。画面には関連動画がいくつも表示されていた。それがいけなかった。その一つに映っていたのは、歪な顔面を持つ奇形児だった。

大地は悲鳴を上げた。しかし、彼を気遣う者は誰一人としていなかった。この空間で少数派なのは彼だったから。

「人間なんだから」

母の言葉は、それ自体は正論だった。だから大地は平等に愛さなければならないと思った。全ての人間を。

大地は彼が試みさえすれば「みんな」と友達になれると思っていた。いや、今もそう思っている。

今では大地は、人類は自然を決して掌握しきれないと考えている。そして、それはあるいは都合が良いたとも。

要は、温暖化懐疑論を支持しているのだ。自然のホメオスタシスのために。

大地は人間はもっと文明的で、より満ち足りた生活を指すべきだと考えている。ゆくゆくは存在するであろう先進的な社会に思いを馳せながら。

八月、黎新大学は夏休みに入り、ボランティアサークルは弘原島を訪れていた。国の天然記念物も分布するこの島で、自然に直接触れながら環境保護や地域活性化について学ぶのが目的だが、旅行気分の者も多い。

生真面目な空一行はそうでもないようで、その実、海ははしゃいでいた。船に乗ったことがないから、らしい。

「海だ〜！ でも私、すぐ車酔いするタイプなんだよね。ねえ、みんなで潮風に当たってようよ」

「ん〜、私もちよっと頭が痛いんでそうします。大地さんはどうしますか？」

「俺も甲板に出る」

三人はよく話す仲になっていた。ボランティアサークルの活動頻度はさほど多くはないが、三人だけのLINEグループもあった。しかし、話す内容はというと。

「俺はスベンスマルク効果が地球温暖化という幻を生んでいると考えている。そして、この幻は深刻な環境問題や社会問題を隠蔽し、大衆の不安をコントロールして商業化するのに用いられている」

「いや、スベンスマルク仮説が認められていないのはそれこそ気象兵器に利用されているからじゃないかと思うよ」

「いつもこうだ。空は流星に若干慣れつつも新鮮に呆れていた。スベなんちゃらがどうかについて空はよく知らないが、胡乱な話をしているということはなんとなくわかる。」

「気象兵器か。対費用効果が」

「人間の悪意は底知れないんだぞ、大地少年！」

「少年じゃないが」

二人がよく話しているのはネットの都市伝説的なものに関するところらしい。毎度のこと全く意見が合っていないように見えて、意外と知識は噛み合っていて楽しそうだ……それだけに、空はここにいい

のか、時々わからなくなる。

「まあ、そういう大胆なことは『星辰の光』後継団体あたりが」

「『星辰の光』？」

「ん？ どしたの？」

「おい、俺の話を」

「私の両親が熱心な信者だったんだ」

「へえ！ 苦労したでしょ？」

「というか、過去形ということば」

「そう、解散命令が出てからというもの、もう以前のように積極的に活動してはいない。付き合い程度にやっているみたい。私にも教えを強制してこなくなったし」

「よかったな」

「それならいい、のかな？」

「うん、大変なこともあったけど、両親は『星辰の光』で出会ったから、そういう意味では感謝してるくらいかな」

しまった、余計な自分語りをしてしまった、なんて空は焦って、「星辰の光」の影響で得た能力の話をするのはやめておいた。ああ、空気が重くなりかねない……というか、この二人は重い話しかしないくらいいか、と思いついて、やはりまた横でこにこする役割に戻る。

「うんうん、今を生きている奇跡に感謝、だよーね！」

「生まれてこなければ感謝しようもないのだから、奇跡でもなんでもないだろう」

「そういう風情のないこと言わないの！」

空もわかっていて。この夫婦喧嘩のようなやり取りに嫌気が差すのは、疎外感だけが理由ではないことを。きっとその感情こそが、空が大地に恋している証拠だ。

一日目に弘原島での観光……もとい、黎大祭などで行う啓蒙活動の準備を終えたボランティアサークル一同は、二日目の午前中には漂流したゴミを片付けるため、宿泊先のホテル近くの海岸を訪れていた。

海は名前の通り海が好きなることを前面に出しており、大地と空を連れて海岸の一番遠いエリアを掃除することに勝手に決めてしまった……と、大地は思っているが、本当のところ、海が大地に惚れているという話を聞いた空が、大地と長い時間一緒にいられるようにアドバイスした結果なのだ。

大地は先に行く海の方をぼーっと眺めているが、何を考えているのか、空にはわからなかった。

「なあ、あれ」

海の方ばかり見ていた大地は何か気がついたらしく、海のずいぶん先の砂浜を指す。度の強い眼鏡を掛けているからわかったのだろう。

「美しい球だ」

海も空も釣られてそちらを見て、首を傾げた。そこには吸い込まれそうなほど真っ黒な球体が落ちていた。近くで見ても真球に見えるほど精巧な球体は、誰が見ても自然の造形物とは思えないようなシロモノだった。

「旧日本軍の地雷とかかもよ！ 離れよ離れよ！」
「こんなに光吸収率が高いものか？ それに表面は少しも剥がれていない。新しいものであるか、余程頑丈なんだろう」

「不審物って警察に届けばいいんだっけ？」

「公表されていない何らかの技術が搭載されているかもしれない」

「てか警察はダメか！ 権力の犬だし」

「そうだな、権力の犬だからな」

さっきから会話が成り立っていないようで変なところで気は合う二人の傍観者になることに努めながら、ある可能性が空の頭によぎった。

「寄神かも知れないですね」

「……寄神？」

「それ何？」

「海の向こうからやってきた漂着物を神と見なしたものですよ。えびすなんかも寄神とされていたりします。あ、別に本気でそう思っているとかではなく」

「ほお？」

「それだ！」

妙に二人の食いつきが良く、空は少したじろいだ。そうだ、この二人、こういう与太話が好きなんだっただ、と思いつつ空は嬉しくなった。

「なるほど、これまでの見解をまとめると、これは政府が秘密裏に生み出した神性生物である可能性が高いな」

「いや、この子はきっと我々人類に警告を届けに来た使者的な存在だよ！」

「ふむ……」

「もー！」

「そうだ、空はどう思う？ どっち派？」

どっち派もどうもないのだが、と空は思った。ああ、二人ともそんなこと忘れて掃除に集中してくれないかな。掃除に……

「……とりあえず、持ち場に戻って海岸をきれいにしましょ」

忘れていた、とでも言わんばかりの表情で二人はハッと顔を上げた。

空は旅館を抜け出して夜の海沿いを歩いていた。旅館前の砂浜にも少数のサークルメンバーがいたが、空は彼らと違ってエモを感じることを目的としていなかった。

昼間、大地と海が球体なんてすっかりなかったように振る舞い始めたとき、空は自分の能力に記憶を消す効力があることを知り、少し後悔した。物理学における情報という概念を正確に理解できそうもない空にとって、記憶という情報は最も親しむべきものだった。

「美しい球だ」

空は「それ」を見たとき、一人冷や汗をかいた。空の能力をもってしてもあの球体の内部に何も情報を

感じられない。そのくせ、表面にはべったりと、おびただしい量の情報が貼りついていて頭が痛くなる。本当のところ、その球体について、空もこう解釈していた。

「神」、あるいはその使いだ、と。

そして、球体は半ばグノーシス主義者である空にとって唾棄すべき存在となった。

空は本が好きだった。

「人間は忘れられたときに死ぬ」

本で度々見る言葉。それが正しいとは思わないまでも、空にとって、何かを遺したいという欲望を自覚させられるには十分なフレーズだった。

空の契機はある知識を得たことにあった。

本来、情報というのは量子力学的には保存されるという原則があつて、それを空も知っていた。しかし、自分の能力について知りたくなって手に取った本にはこう書いてあつた。

「ブラックホールが蒸発するとき、情報は消えるとされている」

唾然とした。自分の意義が失われたような気がした。情報が遺るということは空にとって絶対不変の原則で、支えだった。

気分の良い話ではないから空自身は特に誰かに言うつもりもないが、光の教えの名のもとに、空はほとんど虐待じみた教育を受けてきた。教科書は嘘ばかりと教わりながら、良い成績を残さなければ体罰を加えられるという、ダブルバインドを繰り返される日々。「情報を視る」というわけのわからない能力まで授かる始末で、その負荷による頭痛にも悩まされていた。そんなとき、自分にも生きていく意味を感じさせてくれた、情報は保存される、という人間の意志を超えた決まりは希望だった。

空は「星辰の光」が解散したときの両親の狼狽っぷりを思い出した。

「じゃあ、今までやってきたことはなんだったの？」

ああはなりたくないと思った。

空は努力した。空なりに本を読み漁った。書店で量子力学の本を買い集めた。棚の上に「精神世界」と書いてあることに何ら疑念を抱かなかつた。そして理解した。

この世界は「神」によって作られている。だから情報が消滅するようなこの不完全さは全部「神」のせいだ。「神」がブラックホールを介してこの世界の情報を吸い上げている。やり方はわからないが、「神」に抵抗しなければならぬ。

それからというもの、空はたくさんこの世界が「神」に作られている証拠を発見した。空はずっと不思議に思っていた。光速だって粒子と波動の二重性だって、シミュレーション仮説で説明できるのに、みんなどうしてそんな単純なことに気がつかないんだろう、と。

しかし、「神」へ反逆する方法は思いつけなままだった。

空はようやく「神」に近いものと対面したと思つたし、それを運命だと思つた。「神」の作ったこの世界から逃れる術がどこかにあつて、きっと自分ももっと大いなる善性によってそこへ導かれているはずだから。

球体は「神」が作った、情報を「神」の世界に吸い上げる機構だ、と空は奇妙にも確信していた。だか

ら、全ての復讐のためにも、人類を守るためにも、空はそれを破壊しなければならない。しかし、破壊する方法は思いつけないままだった。

現実には、空たちの思いつきは当たっていない。

何故、いわゆる「高次元」、つまり人間よりマクロな構造に意識があると考え、それをありがたがるのだろうか。意識とはとあるサイズにたまたま立ち現れる構造でしかない。だから、人間のすぐ上、観測可能な程度の大きさの構造が意識を見せなかったとして、その更にも上の構造に意識がないとは限らない。そしてそれはミクロな構造にだって同じことが言える。人間は人間よりミクロな存在なら支配できるわけではない。人間と同程度のサイズの存在こそ支配しやすいのだ。

球体はヒトの言う「意識」に基づいてそのように振る舞うのではなかった。それはあくまで細胞の活動のように、目的もなく、当然のこととして情報を食らっていた。

実際のところ、球体だってゆくゆくは人智を超えないであろうものでしかなかった。球体は情報を吸い上げていたのではなく、食らい、その領域の境界に蓄えていたし、空の能力をもってしても、ブラックホール近傍、事象の境界線と呼ばれる半径の外側からは、物理学的な制約と同様に内部を観測不能だった。それが理解できれば、あるいは最も人智を超えていたのは空の能力そのものと言えただろう。

別に、無知が空を球体の破壊という発想に導いたのではない。そうだったら良かったのかも知れない。しかし、空だってホログラフィック理論を知っていたはずなのだ。少なくとも、ブラックホールを情報ストレージにするなんてアイディアはSFにはありふれていた。

「人間は都合の良いことを信じる」、などと言われる。実際、ある程度はその通りかも知れない。少々露悪的過ぎるが、全く正しいとさえ言う人間もいる。否定するのは難しい。しかし、問題なのは、その「都合の良さ」が様々で、非常に入り組んでいるということだ。

もし、「都合の良さ」のために自らにとっての悲劇を信じるとしたら？ それはきっと、主体的に恐怖を欲望するかのようには見ええない。

空は早くに「神」に気づいてしまった。「神」の存在を否定するのは至難の業だ。悪魔の証明だ。空だって「神」なんていなければいいと心から思っている。しかし、価値観を転換させるのはそう簡単なことではない。巨人の肩に乗ってしまうだけならまだしも、自らも巨人に同化してしまったら、もはや降りることはできない。

「じゃあ、今までやってきたことはなんだったの？」

それは他ならぬ空が一番恐れていた言葉だった。空はそれに対抗できるアンサーを積み上げているように、その言葉にずっと縛られていた。空にとっては、「神」に反逆することよりも、大事に抱えた自分の美徳が壊れないようにすることの方がずっと大切だった。

海岸に下りた空は、手頃な流木を拾って水際へ進んだ。満潮に程近い海は球体を攫おうとしていた。

「待てっ」

寄せては返す波は球体を僅かに揺らした。それがいけなかった。空は距離感を掴み損ね、事象の地平線を越えた。

その瞬間、空はこの世界からいなくなった。

ボランティアサークルのおかげですっかりきれいになった海岸は、球体と生き物たちを揺蕩わせるのみだった。宇宙はどこまでも澄んでいて、それでも光で満ちることはなかった。

私は空の残滓を追って、光学膜の機能を切った。

五臓にポップなキスをして！／色即是空

五臓にポップなキスをして！/色即是空

佐藤愛吏さとうらふりは先日地元で大型ショッピングモールができたことが生涯最大の幸せなどどこにでもいる田舎の少女だった。愛吏は陳腐なラブコメなんかじゃ満足できず、コメントが心に衝突するようなド派手なラブを求めていた。それは両親の遺伝なのだろう。名付けは子供が受ける最初の愛とされているが、らぶりなんて名前は最早愛の裏をかく虐待に近い。佐藤というありふれた性に愛吏という奇抜な名は出席簿の中でも異色さが際立っていた。中学生になるころには名前なんて気にしなくなり、むしろ肩書のように誇らしくなっていた。愛らしい名前によって受けた小学生を自傷行為に追い込むほど残酷ないじめはお涙頂戴どころか強盗の域だったが、純悪無垢なガキ共もすっかり鳴りを潜め彼女の今の最大の悩みは何の部活に入るかだった。

スポーツに一切触れずに育ってきた私は運動部になんて入る気はサラサラなかったが、今はバトミントンの入部届を書いていた。友人の付き添いでいっただけだったがそこでの運命的な出会いが奇跡の大番狂わせをした。体育館の日陰で有線イヤホンを耳に着けていた河原かわはらの刺繍が入ったズボンを着た先輩、長い襟足がぬるい風になびいていた。一年生から見ただけで二年の違いが、されど二年の違いでとても大人びて見えた。先輩に近づきたい一心で少ない小遣いでラケットを買い動画サイトで初心者講座を見漁った。脳みそには「カワハラ」のしわがくっきりとついていた。

河原幸喜【かわはら こうき】は自分に弱者のアイデンティティを後付けすることで何者かになれた気でいた真の弱者だった。ワイヤレスイヤホンの開閉音が鳴る教室の中であえて有線のイヤホンを付け、ツーブロックが王道とされる中あえて襟足を伸ばしてみる、分かった気でいられる魔法の三文字は周りに馴染めず苦しみ喘ぐ彼を優しく抱きしめた。

寝たふりをした彼の耳の中でトム・ヨークは苦しみを代弁していた。三年間で打ち込むことも特になく、強いて言うなら安い鬱を内包したペラペラのライトノベルを読み漁っただけだった。昔は得意だったパドミントンも、いまやその才覚は見る影もなくあの頃のギャラリーは回れ右して消えていった。鮮度が落ちた彼は世間からおでこに貼られた割引シールをはがそうと必死になっていたが、いつしかその気力も沸かなくなっていた。額を大切そうに撫でる彼は、幸喜なんて名前負けの人生を歩んでいた。

はじめての活動日に先輩の姿はなかった。その日は一年と上級生の顔合わせだったため、彼以外の人間は皆揃っていた。帰り際に部長に尋ねた。

「部長、今日は河原先輩はいらっしゃらないんですか？」

「え？ ああ、あいつね。あいつは来ないよ、こういう集まりは。それと、俺のことは牧野先輩でいいよ。そっちのほうが長いか、はは。」

明朗快活なその男は先輩とは対極の位置にいた。自動操作のような世間話を数分していたが、その間先輩の姿が反芻していた。悲しい気分の際は寄り道をして帰りたいが、生憎ここはドが付くほどの田舎なので学生の性分のような行いすらも怪訝な目で見られてしまう。異分子を排除しようとするけたたましさにうんざりし、無心で錆びた自転車をこいでいた。

その日の部活は行く気になれなかった。俺は極度の人見知りで数人の前で話すだけでもあがってしまうため、部員全員の前で自己を紹介するなんて以ての外だった。しかしここで逃げるのも論外だと分かる頭も持ち合わせていた。それでも一度ついた逃げ癖は頑固にこびりついていたため、押しつぶされそうな自己嫌悪を憐憫に変えるべく布団の中で自分を慰めていた。画面の中の女性は自身の腕に剃刀を突き立てていた。同情させるべく色素を薄くさせるフィルターをかけてサンリオキャラクターの絆創膏を貼る姿は、ステレオタイプな精神的不調を抱える人そのものだった。弱さをさらすことは最大の愛情表現だと思ふ頭からつまさは満たされた気持ちでいっぱいだった。ケロイドをほじくり返してグズグズな皮下脂肪を丸呑みしたいし、治りかけのかさぶたを剥がしてその上でタップダンスを踊りたいが生憎そんなことを表立って言えるはずもなく欲望は体がはち切れそうなほど膨張していた。

次の日は小言を言われると思っていたためびくびくしながら部活に顔を出したが、何の反応もされなかった。それにとてつもなく悲しくなって安心し、アップの後はいつものように隅で音楽を聴いていた。

「あの、先輩は練習しないんですか？」

突然横から話しかけられたため、ひどく動揺した。ゆるく巻かれたポニーテールが外からの風になびいていた。蒸している体育館の中で長袖のジャージを着ている、暑くないのだろうか。

「あ、うん。今日はいいかな。昨日体調が悪かったからさ。」

嘘をつくのにも抵抗がなくなっていた。

「だから昨日休んでたんですね。あまり無理はなさらないでくださいね。私、1年の佐藤って言います。これからよろしく願います。」

随分と礼儀正しい後輩だなと思い、今日初めて体調を気遣われたことに時間差で気づいた。佐藤なんてありふれた苗字はすぐに忘れてしまいそうなので名前を覚えてもらおうと呼び止めようとしたが、彼女はすでに自分よりも上手にほかの部員と談笑していて勝手に疎外感を感じた。

その日は憧れの先輩と話せたため万能感と浮遊感に包まれながら帰路についていた。世が世で私が神ならアダムとイヴにたらふくアップルパイを御馳走し、カレンダーに赤ペンで天赦日と書いていた。家に着くと大量の生ごみが悪臭を放って出迎えてくれた。母と離婚した後の父を形容するなら自暴自棄や幼児退行という言葉がふさわしかった。周りの人が家族で仲良く食卓を囲む中、二人で値引きされた弁当を食べていた。テレビを見て談笑している中、寝そべる父を尻目に黙々と家事を行っていた。週末に遊びの予定を立てている中、軽い財布を何度も開け閉めしていた。惨めな自分に耐えきれない夜は自室で自分を慰めていた。細い腕の表面にキチキチと剃刀の刃が進み、ぶくりと血が溢れてきていた。自傷は承認欲求を満たすための手段として一般的になりすぎた。体を傷つける様子を動画に残し、丁寧にフィルターをこしらえて低音加工された音源をつけてインターネットに送り出す。馬鹿馬鹿しいとはわかっていてもそれ以外に自分を満たす方法なんて見つける気にもならなかった。

一年のころは同級生の中ではもちろん三年と比べても遜色がないほどの実力があった。その時築いた張りぼてのプライドは今も尾を引き自分の足をつかんで離さなかった。自分がただ少しバドミントンがうまいだけの一般人ということに気づくのに三年かかった。今更真剣に取り組んでも、俺は三井寿でもないのですぐに本来の実力を取り戻せるはずもない。そんなことを騒がしい教室の中グループラインに送られた次の大会のレギュラーメンバーの名簿を見ながら考えていた。そこに名前がないことにすっかり慣れた自分に恥ずかしいという感情すら抱かなくなっていた。アプリを閉じたらイヤホンを付け夜なべして作ったプレイリストを聞いていた。スマホを机に置き、音に合わせて歌詞がスクロールしている画面をこれ見よがしと言わんばかりに得意げにしていた。誰かに話しかけてもらおうといつでも待ちの姿勢を崩さないが、撒いた90年代のUKロックのエサが華の中学生にとって魅力的でもないことに気づかなかった。流行りの曲を聞かずに毛嫌いし、気になったアーティストはランキングのけつから聞くような逆張り野郎は今日も何の成果もないまま昼休みを終えた。

その日の部活はみんな一層精を出していた。大会に出る人も、出ない人も。いつもの様に隅で音楽を聴いていたがその日だけは少しいたたまれない気持ちになった。

「なあ、練習しないんだったらさ、もう帰ってくんね？ みんなの士気もそがれて邪魔になってるの気づかぬーの？」

不意にイヤホンを外され部長に声をかけられたため声も出ずに身じろぎした。

「返事もできないの？ 凶星じゃん。へたくそなのに練習しないとかわわってるよお前」
 今まで何も言われなかったことに甘えていたツケを払うときが来てしまった。しかし、ここで練習に参加したらまんまと言いなりになったことになってしまう。そんな子供じみたことをしたくないと脳内会議は佳境を迎えていたが思わぬ助け舟が出た。

「部長、そんなに強く言わないでください。河原先輩にも何か訳があるんですよ、そうですよね？」

佐藤か加藤のどっちだったか思い出せないが仲裁に入ってくれたことが非常に嬉しかった。しかしここで名前も知らない後輩に助けられるのは自尊心がズタズタに蹴り殺されてしまうと脳みそはメーデーを3回繰り返していた。

「理由なんてダルいから以外にあるわけないだろ、お前、1年のくせになれなれしく絡んでくんよ。今日はもう帰るわ。」

足りない頭で100手先まで読んで最悪の一手を自信満々に指した。ドアの後ろで部長の豪快な笑い声が聞こえたが気にも留めなかった、そう自分に言い聞かせた。グラウンドで練習する野球部を尻目に自転車にまたがり一心不乱にペダルを漕いだ。同い年をガキだと見下していたがその実一番子供だったのは自分だった、庭のドクダミの匂いが一層鼻を刺激したため逃げ込むように家の中に入った。夕飯の用意をしている母に部活が早く終わると伝えそそくさと自室に入った。バスケのスーパープレイ集を見て自己投影した妄想をするように自傷する動画を見ることで気分を晴らしていた。インターネットは半端ものにとってのオアシスで真っ赤な海に投げ込まれる情報を一方的に貪るだけで存在は肯定された。揺蕩うなかで居心地の良さを感じていた。

まともな判断力があればあんな先輩は子供っぽいと一蹴してさっさと次の白馬の王子様候補を探していたかもしれない。ただ齢12の少女にとって初恋というのは心地いい病の類で易々と治療を終えることは惜しかった。まともな会話さえしたことなかったが一方的に想うことはもしかしたら一番空虚で幸せなことだったと愛吏は思う。実はそれは大正解だった。知ることは傷つくことで傷つけることでもあった。互いに分かり合いたいと願う人は同情を求め哀れみを毛嫌いし見透かされることなく共感だけをなんとか抽出しようと躍起になっている。ハートに名前を彫ることを許可されて初めて愛や信頼というものは成就する。おセンチになりやすいおナイーブなお子様にはまだ早い感情だったかもしれないとお天道様が反省するのを愛吏は願っていた。

次の日は部活に行くことをためらったが結局行くことにした。練習時間よりずいぶん前に体育館につきネットを張っていた。表面だけでも反省を繕うためにできる限りの誠意を見せようとした。

「お、ネット張ってあんじゃん。ありがてー。」

ギイと鳴ったドアから比較的仲の良かった部員がやけに大きい独り言を話しながら入ってきた。

「幸喜じゃん、え、これ幸喜がやってくれたの？ 珍しいね。マジで。」

「さすがに昨日のことを反省してさ。これなら手っ取り早く謝意が伝わるだろ？」

「お前って結構打算的だな。そういえば昨日愛史ちゃんに助けてもらってたじゃん？」

「らぶりー？　すごい名前だったんだな、キラキラネームってやつか。」

「それな。まあそれはいいんだよ。この写真お前見たことある？」

差し出された画面には長袖のジャージを脱ぎ制服に着替えなおす最中の愛史の姿があった。その腕にはびっしりと切り込みを入れた跡があった。今までにないほど昂ぶって胸は高鳴っていた。血が全身にめぐるのを感じその画面に見入っていた。

「これリスカ跡だよな。メンヘラ？　っていうんだっけ。マジで無理だわ。こういう子」
自分に話しかけたことに数秒遅れて気づいた。ここは同調しておこう。安い仲間意識でもいいから持っておかせるに越したことはない。

「俺も初めて見たわりスカしてる子なんて。ああいうのって結局かわいそうな自分に酔ってるだけなんだよな。マジで気持ち悪いわ。」

嘘をついた。ただそれが今世紀最大のやらかしだとすぐに気づいてしまった。視界の端でポニーテールがドアの横に消えていくのが見えた。考えるより先に体は動いていた。

行く当てもなく走り出して気づいたら校庭の茂みの奥にいた。最悪だ、あんな写真が広まっていたことも知らなかったし一番見られたくない人に見られてしまった。動揺しすぎて泣く事すらできず過呼吸になっていた。

「なあ、佐藤さん。さっきはごめんね本当に。信じてもらえないかもだけど本当はそんなこと思っていないんだよ。」

背後から追って来られていたことに気づけなかった。軽い悲鳴を上げその場にへたり込んだ。

「あ、違う！　謝りたいだけなんだ。許しなんて求めてないんだ。それすら傲慢と思われてしまうなら金輪際俺はかかわらないと約束するよ。」

数秒の沈黙が生まれた後、先輩は悲しそうな顔をしてその場を去ろうとした。

「待って！　……ください、私、昔いじめられて、その時にネットでリストカットを知って、それ以来癖になっちゃってるんです。先輩が気味悪がるのもわかるんですけど、私もどうしたらいいかわかんなくて」

横隔膜が痙攣してうまく喋れなかった。行き先がわからない言い訳を並べ返答を求めているのかそうでないのかもわからなかった。しかし、返ってきたのは思いもよらぬ逆転満塁サヨナラホームランだった。

「君は悪くないから気味悪く思わないよ。佐藤さんの誠意に応えて言うと、俺は、その、好きなんだ。自傷癖のある人が。言い方は最悪かもしれないけど外傷の痕跡がのこっている人が好き、弱いところをさらけ出すなんてむしろおおらかで素敵だと思うんだ。それでいうと今の自己開示も自傷行為といえるかも。自分を辱めることで他者からの承認に期待して……」

こんなに饒舌にしゃべることができる人だと思わなかった。ろくろをまわすような仕事

がツボに入ってしまったいつい吹き出した。

「先輩、そんなに口数多かったんですね。」

先輩は顔を少し赤らめた後気まずそうに笑った。

「こんなこと、一生表で言わないと思ってたよ。ただ、思ったよりも自己開示は気分がいいね。」

現状の解決には二人とも何も至っていないがそんな野暮なことをいう人間はここにいなかった。五臓六腑をさらけ出してお互いに愛撫した。ドクダミの匂いでいっぱいの日陰で二人はしばらく談笑していた。

誰かのための
田村美結

誰かのための／田村美結

誰かのための

雨が降っている。キラキラと光る雨粒が、傘とコンクリートに弾んで碎け散る。鈍い灰色の空は、その果てはおろか、裂け目の一つすらも見せることはない。

雨が降っている。冷たい雨粒が、ズボンの裾をまだらに濡らす。しっとりと濡れた、緑色の蛙が一匹、飛び跳ねながら目の前を横切っていく。

雨が降っている。太陽は雲の向こうに隠れたまま。朝から一度も、出てきてはくれない。

空が泣いている。悲しいことなど、何もないだろうに。それとも誰も知らないだけで、本当は。本当は、世界のどこかで起きていることに心を痛めて、いつも泣いているのだろうか。もしそうなのだとしたら、なんと人情に溢れていることだろう。人間なんかよりもずっと、人情というものを持ち合わせている。

空はただそこにある。ただ人々の暮らしを覆っている。今も昔も、変わらずに。時には照らし、時には陰らせ。時には乾かし、時には潤し。時には傷つけ、時には癒す。その摂理はただ、事実としてそこにある。水が上から下へ流れていくように。太陽と月が、隣り合って輝くことの無いように。燃えて灰になったものは、元の姿を取り戻すことができないように。空が自然の規則に従って存在しているという事実は、覆しようのないことだ。

著しく矛盾した二つの思考。互いが互いの前提を真っ向から否定する。きっと、決して両立し得ない可能性。哲学と科学の二項対立。それなのに。

嗚呼、全く。どっちにしたって、人間なんかとは大違いだ。

私なんかとも、大違いだ。

「……ん！ ……純！」

ぼうっと物思いに耽っていたら、名前を呼ぶ声が思考に割り込んでくる。聞き慣れているけど、最近はいくらも電波越しでしか聞いていなかった声。雨音の向こう側から聞こえてくるのに、少しばかりしわがれているのに、それでも鼓膜にクリアに届く声。

「……母さん」

「もう、いきなりどうしたのよ。今から帰るって言ってきたかと思ったら、迎えに来てだなんて……」
白髪交じりの髪を適当にひっ詰めて、短いゴムの長靴を履いて。化粧っ気のない顔でこちらを心配そうに見つめている姿は、最後に会った時とほとんど変わらない。強いて言うのなら、服の柄が違うくらいだろうか。

「……道、分からなくなって」

早速嘘をついてしまった。確かに道はよく分からなかったけれど、住所は知っている。だから、地図アプリを使えば、そのくらいは何とかなったのだ。迎えを呼ぶ理由にはならない。全くゼロじゃないと

言えば、それはそれで嘘になるけれども。

本当は、玄関に一人で入るのが怖かったのだ。一人で玄関の前に立てば、扉を開く前にきつと自分は逃げ出してしまうだろう。純には、そんな確信めいたものがあつた。

「え？ 前も来たことあるじゃない」

訝しげな声を上げつつも、母はもと来た道を引き返すように歩き始めた。どうやら嘘には気づいていないようだ。ほんの少しの罪悪感がちりと心の端を焼く。純はその隣に並ぶようにして、それでもほんの少し遅れるようについていく。

「駅からの道なんて、あんまり使ったことないから。おばあちゃん家の周り、目印なものないし……」

言い訳が口をついた。いや、これは本当のことだ。嘘ではない。純は自分に言い聞かせるように心の中で呟いた。母は微かにため息をつく。仕方ないな、と言わんばかりだ。

今母がいるのは、純が育った家ではない。母が育った家だ。去年の夏に祖父が死んで、祖母が一人になった。父はしばらく前から単身赴任をしていて、帰ってくる目途は立っていない。子供ももう一人立ちを終えている。そんな要因がいくつもあって、母は今、祖母と一匹の黒猫とともに暮らしていた。

「……おばあちゃん、夕ご飯作って待ってるから。お父さんは来れないけど、あとで電話してだって」

「あとでっていつ？」

「さあ……十時くらいかしら」

さあさあ、さあさあ。雨が降りしきる中を、親子二人で歩いていく。いつの間にか、あたりはすっかり薄暗い。点々と立つ街灯には、既に明かりが灯っている。乱反射する車のライトが、雨粒の向こうから迫ってはすれ違い、追い抜いて、そして遠ざかっていく。

純たちを追い抜いて走り去っていく軽トラックを見送っては、斜め前を歩く母の後ろ姿を見る。こうやって歩いていくと、まるで子供の時に戻ったような気持ちになる。

予報もなしにひどい雨が降った時、母が傘を持って迎えに来てくれたことがうれしかったのを、今でも覚えている。変な天気を好むのは子供の性なのだろうか。普段めったにお目にかかれないような土砂降りど、私の手提げを持って隣を歩いている母。十五年は前の話なのに、なぜかその記憶はくっきりと残っている。自分たちが家について一時間と少しが過ぎてから、今度は兄が父に連れられて帰ってきたのも、よく覚えている。

あの日も今も、母が差していたのは蛇の目傘ではなくて、そのあたりの店に売っているような何の変哲もない傘だったけれど。

天気の良い日に、親がわざわざ自分のことを迎えに来てくれるというのは、今も昔も随分と嬉しいものらしい。

玄関の引き戸をぴっちり閉ざした途端に、雨音が一気に遠くなった。畳んだ傘を傘立てに差せば、切りきれなかった水が先からじわじわと三和土に滲んでいく。

「純ちゃん、おかえり。それにしても、帰ってくるのは来週じゃなかった？ こんな雨の日に、わざわざこんなところに来なかったって……」

エプロンを付けた祖母が、台所からこちらを覗いている。醤油と砂糖の甘辛い匂い。何かを煮炊きし

ているのは明白だ。

「ちょっといろいろあって。明日帰るけど、来週また来るから。……おばあちゃん、夕ご飯なに？」

嘘は言っていない。いろいろあったのは本当だ。それでもきつと、母や祖母に「いろいろとは何か」と聞かれてしまえば、きつと自分は嘘をつく。だから、さりげなく話をそらした。

「今晚は肉じゃがだよ。今味を馴染ませるところだから、先にお風呂入っといで」

「ほんと？ 分かった！」

それにしたって、我ながらずいぶんと単純だ。祖母の肉じゃがは純の好物だ。確かに味は少しばかり濃いのが、ご飯と食べるとちょうどよい。夕飯がそれであると聞いて、すっかり上機嫌になって荷物を置きに行く。

「おー、純。おかえり」

和室に荷物を置いて、着替えを取り出して。血糖値を上げるために、飲みかけだったココアのボトル缶を空にして。さて、温かい湯船で一息つこう。そう思った矢先に、そう声をかけられた。

この家に住んでいるのは母と祖母。今聞こえたのは男の声だ。祖父はもう鬼籍の人だし、父は単身赴任先だ。母方のいとこは姉妹だし、住んでいるところも遠い。そもそも声で誰だか分かっているのだから、こんな推測立てても所詮茶番にしか過ぎないのだけれど。

「兄貴？ なんでいんの？」

「え？ ばあちゃんの家庭菜園と家の様子見つつ帰省」

「今？」

「盆はまとまった休み取れないからずらした。お前もだろ」

「まあそうだけど……」

膝の上で丸くなっている黒猫を撫でながら、純の兄は縁側に座っていた。雨が打ち付けるすりガラスに視線が移ったかと思えば、すぐにこちらに戻される。

「つかお前も知ってるだろ、俺がこのタイミングで帰省の休み取ってたこと」

その言葉に、純は記憶を辿る。しばらくして、ある家族チャットのやり取りが思い当たった。どうやら、この兄は昨日からここにいらっしゃるらしい。

「あ、あれか」

「多分それ。むしろお前こそなんているんだよ。来週だろ」

「……色々あって」

「ふーん。色々って？」

兄は何気なく聞き返してくる。普通「色々」って言われたらそれ以上は聞かないものじゃないだろうか。それを常識だと思ってるのもしかして私だけなのだろうか。

そんなことを思いつつも、脳の働きとは対照的に、口は勝手に答えを紡ぐ。

「……………友達と喧嘩した」

「なんでまた」

兄はさらに問う。純は押し黙る。そのまま数十秒が経過した。ざあざあという雨音のおかげで沈黙が続くことにはならなかったが、それでも気まずいものは気まずい。

先に口を開いたのは兄だった。

「……とりあえず、風呂入ってくれば？ 言いたいことあんなら、後で話くらいは聞くから」

兄の言葉に続くように、猫がおんと鳴く。しゃがみ込み、毛並みに沿って手を滑らせれば、琥珀色の目が気持ちよさそうに細められる。「苦しゅうない」と言わんばかりだ。

しばらく撫でてから、純はつと立ち上がる。猫が首をもたげたが、兄が再び撫で始めれば元の体勢に戻った。

「……考えとく」

「生意気ー」

けらけらと笑いながら、兄は猫に同意を求めている。なー、生意気だよなー、と猫なで声で口にしている兄を見ればおかしさがこみあげてきて、つい声を出して笑ってしまう。

思えばここ数日で、こんな風に笑ったのは初めてかもしれない。

祖母お手製の肉じゃがは、やはりとても美味しかった。少しばかり煮崩れの始まったじゃがいもに、ごろごろと切られた人参。玉ねぎが多めに入っていて、よく味が染みている。白滝はつるつると食べられるし、肉も柔らかい。昔は、彩りのために乗せられたさやいんげんだけは断固拒否していたが、今はもう克服済みである。

付け合わせの冷奴には、おかず味噌が乗せられている。これはどちらかという兄の好物だ。味噌を肴に父と晩酌しているのをよく見る。純は食事と一緒に酒を飲むほうが好みであるため、試したことはないが。

「来週は予定通りなの？」

「うん、木曜の夜にこっち来るよ。お墓参りもその時行く。兄貴は？」

「俺は雨が収まったら。どうせまだいるんだし」

「ふーん」

日本酒をちびちびと飲み、箸を動かしながらそんな話をしていれば、時刻は八時を回った。炊いた米は粗方なくなったし、皿に取り分けた肉じゃがも綺麗に胃の中に消えた。さて、そろそろ片付けようか。猪口を置いて立ち上がったところで、スマートフォンが着信音を鳴らす。発信者は父だ。

「母さん、父さんから電話」

「あら、なら出て頂戴。片づけはやつとくから」

「うん」

応答ボタンを押して、スマートフォンを耳に当てる。もしもし、と口にすれば、すぐに返答が返ってきた。

『久しぶりだな、純。何してたんだ？』

『ちよんどこ飯食べ終わったところ。そっちは？』

『ちよんどこ退勤して家に着いたとこだな』

声に混じって、ビニール袋のがさがさという音が聞こえる。今日の父の夕飯は、コンビニ弁当だろうか。

「夜何食べるの？」

『コンビニのビビンバ』

絶妙な変化球が来た。野菜を取ろうという気概は感じられる。

『……………純。何かあったのか？』

少しの沈黙の後、珍しく真剣な声でそう問われた。これで家族全員だ。

「ちょっと色々あって、おばあちゃんのご飯が恋しくなっただけだよ」

『会社で変な上司にでも当たったか？』

「あ、違うから安心して。パワハラもセクハラもないから」

これは事実。最近コピー機の調子がやたらと悪く、頻繁に紙詰まりを起こしていることに目をつぶれば、良い環境だ。

『……………なら、いいけどな。とにかく、何か言いたいことがあったら誰かに言うんだぞ。クロにでもいいし』

「クロは相槌くれないじゃん」

祖母の飼っている黒猫—もといクロは、お腹一杯になったのだろう、座椅子の上で丸くなっていた。ちなみにその椅子は、さっきまで兄が使っていたものである。

『まあそれもそうだな』

「兄貴と話す？」

『あー、いや、昨日したからいいよ。じゃあまた来週な、純』

「ん、また」

あっさりとした別れのあいさつのち、通話が切断される。普段であればもう少しだらだらと話していたのだろうが、いかんせん来週には会う予定になっている。積もる話は、その時にすればいい。

「純、こっち」

今度は兄の声がした。見れば、カットされた果物—恐らく梨か林檎だろう—が入ったガラスの器を持って、兄が手招きをしていた。いつの間にか夕飯の片づけは終わっていたらしい。申し訳ないことをしたな、と思いつつ、兄のほうに寄る。居間では祖母と母が、また別の器に盛られた果物を口にかけている。

「これ何？」

「梨と林檎。品種は知らん」

どうやらorではなくandだったらしい。ふーん、と生返事をしながらそのうちの一切れをつまんで口に入れる。梨だ。冷たくて甘い。

「こーら、純。お行儀悪い」

「兄貴は私のお母さんのの？」

「あなたさまみたいないな子供を持った覚えはありませんですわよ」

「うわ裏声…………」

そんな軽口の応酬をしていれば、兄が部屋の外に足を向ける。行き先は、きつとさっきの部屋だろう。ほんの一瞬、逡巡した。それでも逃げる理由も当てなくても、純は素直に兄の後をついていく。

ふすまを開けて、蛍光灯から垂れ下がっている紐を引く。ぱ、と部屋が明るくなった分、廊下と外の暗さが際立った。

「なんだクロ、来たのか」

この黒猫は、兄によく懐いている。それに対する家族の見解は、「祖父に似ているから」で一致していた。兄本人はどうにも不満そうだが、祖母に言わせれば「若いころの祖父とそっくり」らしい。

「……で？ そんなに大喧嘩したのか？」

胡坐の上にクロを乗せ、林檎をかじりながら兄はそう聞いてくる。絶妙なデリカシーのなさ。でも、今はそれがちょうどよい。

「……兄貴は、嘘つくのは悪いことだと思う？」

「嘘？」

なんだってまた、と兄の眉間にしわが寄った。今度は、純が林檎を一切れかじる。甘酸っぱい果汁と、ぱりぱりという食感。美味しい林檎だ、と思った。

「嘘なあ……いいとは思わねえけど、全部が全部悪い！ っても思わないな。時と場合によりけりだろ、そんなもん」

なおん、と猫が鳴く。雨脚はずいぶんと弱まっていた。兄が梨を口に入れたタイミングを見計らって、純はまた口を開く。

「……嘘つくなんてサイテー！ って言われた」

梨を咀嚼する兄の動きが一瞬止まった。すぐにまた動き始め、喉仏が動いて梨が食堂を滑り落ちていく。

「誰に？」

「高校からの友達」

「そっか……」

純もまた、梨を口に入れる。シャリシャリとしていて、美味しい。兄は左手で猫を撫でながら、右手で顎を支えている。何かを考えているのだろうか、何を考えているのかは純には分からない。しばらくそうしていたかと思えば、兄はおもむろに口を開く。

「あー……お前は、なんで嘘ついたんだ？ 何か言いたくないことでもあったのか？」

「あ……った？」

頷きつつも首を傾げるという器用な芸当をして見せる純に、兄もまた首を傾げる。

「どっちだそれは」

「いやー……なんというか……」

ちょっと待って、と兄に待ったをかける。返されるOKサイン。その手はOKの形を崩すと、顎の下ではなく、ガラスの皿のほうに向かう。梨を一切れ取り上げては、口元へ。

今度は純が自らの顎の下に右手をあてがう。考えをまとめることしばし。話せる状態になった、と兄のほうに視線を向け直せば、兄は兄で膝の上に向けられていた視線をこちらに戻してくる。

「……友達がね、『純こ行ったことないでしょ。一緒行こう』って。でも私、その前に別の友達……大学の友達だから、その子たちはお互いのこと知らないんだ。その友達と、もう行って。でもあの子がすごく楽しそうだったから、言い出せなくて。うん、って言ったの。で、今週の火曜日あたりになぜかバレー。サイテーってメッセ送られてきて、今」

一息でそう言って、ごまかすように林檎をつまむ。咀嚼音が静かな和室に響いた。雨がまた強くなる。

「……返信は？」

「したよ。言い出せなかった、ごめんって。絶賛既読スルー中だけどね」

ええ、とあからさまに困ったような顔をしながら、兄は今度はこめかみを抑える。忙しい手だな、と思っただけ見れば、ため息が聞こえた。

「あー……だから俺にあんなこと訊いたわけか」

あんなこと、とは、純の最初の質問だろう。顔を見て、視線を逸らす。

「あの子が残念がらないようについた嘘なのに、そんなこと言われて。思ったよりもショックでさ。なんか帰ってきちゃった」

「女子って難しいな」

「兄貴それ間違っても女子の前で言わないでよ」

「言いませーん。安心してください」

そんな会話をしながらも、兄の左手は猫を撫で続けている。器用な人間だ、と純は思った。もし自分がそんなことをしたら、このわがままな黒猫様は「無礼者」と言わんばかりにどこかへ行ってしまうだろうから。

「もう誰かに仲介頼んだほうがいいんじゃないし？」

「やっぱそうなるよねー……誰いるかな……」

梨をかじりながら、メッセージアプリを開く。友達一覧を開いて、しかし画面をスクロールすることはずいぶん、ホームボタンを押した。

「あれ、いいの？」

「もう夜だし、明日やる」

心の中でひっそりと、心の準備もしたから、と付け加えた。お互い意地になってしまっているだけ、というのが純の考えだが、もし絶交することになったらどうしよう、という懸念もずっとあった。

「……別に俺は、嘘つくこと自体は悪いことじゃないと思うけどな」

「そうなの？」

前触れなくこぼされた兄の言葉に、思わず訊き返してしまった。兄はクロを撫でながら、視線を窓の外に向けている。

「嘘ついたら鼻が伸びるだとか、閻魔様に舌抜かれるとか、オオカミ少年が云々とかあるけどさ、大事なのは嘘の中身だと思っただよな。ほら、嘘も方便って言うだろ」

「それはそうだけど……」

兄はさらに続ける。その声は静かだ。

「大体嘘が全部悪いーってしたら、何でもかんでもほんとのこと言うのが良いことだ、ってなるじゃん。でも世の中には、知らなくてもいいこともある」

黙ったままで話を聞く。雨脚は弱まりつつあって、互いの声がクリアに聞こえる。

「結局さ、何でもかんでも加減なんだよ。人を傷つける嘘もあるし、人を押しつぶす真実もある。間違っていると正しいとか、そんなのも、所詮誰かがラベリングしただけ」

まずいな、と思う。少し話が難しい。けれど、何となく分かる。これ以上難しくなったらきっと自分に

は分からないだろうけれど、まだ分かる。

「…………でも、誰かのためについた嘘なら、とりあえずは良い嘘なんじゃないの」

そう口にしたきり、兄は黙り込んだ。ぱちくり、と思わず瞬きをする。やたらと小難しい話をしていたのは、この結論に持っていきたかったかららしい。

「……ありがと、兄貴」

「どーも。なんもしてないけどな」

らしくもない台詞と、我ながら珍しく素直な妹の言葉にいたたまれなくなったのであろう。また梨の咀嚼を始める。純も林檎を口に放り込んだ。やっぱり、甘酸っぱい。

私があの子を怒らせてしまったのは事実だけど、本当のことを言えば、あの子は返答に困って、きつと残念に思ってしまっただろう。それが何となく嫌で、つい嘘をついてしまった。

今から本当のことを言って、あの時の私の気持ちをちゃんと話せば、仲直りできるだろうか。開き直りだとか、正当化だとか思われてはしまわないだろうか。

でも自分には、あの時、それ以外にどうやって返答すればいいのかわからなかった。きつとどんな返事をしていても、現状を避けることはできなかっただろう。

けれど、兄の言葉で勇気が出た。自分の言葉で、あの時の自分の気持ちを伝える勇気。私が悪いから、と逃げてしまわない勇気。

絶対的に正しい人間などいないのだから、せめてその時の最善を、他でもない自分の意志で決めるという勇気。

それでも生まれてしまった綻びは、まだ完全には切れてしまわないうちに結び直して。

人はきつと、そうやって生きていくのだろう。

来週、ここに帰ってくるときには、あの子とちゃんと仲直りして。父さんと母さんとおばあちゃんに、いきなり帰ってきた理由を、ちゃんと話せるようにして。今日ついでにしまった嘘を、自分の中で帳消しにしたい。

今度は梨を口にした。ガラスの皿は、もうすぐ空になる。

篠突く雨は、いつの間にか止んでいた。

夢中／田中冬夏

夢中／田中冬夏

夢中

田中 冬夏

『続いてのニュースです。本日、〇〇県〇〇市の高校でまた飛び降り自殺が……』

いつもと変わらないようなニュースばかり垂れ流すテレビを消して、自室に向かう。

明日も学校かあ……めんどくさいなあ

そんなことを考えながら扉を開けるとそこは外だった。

「は？」

訳が分からなかった。

俺はさっきまで家の中にいたはずなのに気が付けば、公園のような場所に立っていた。

「ここ……どこだ……？」

辺りを見回すが、さっき開けたはずの自室の扉もなければ、ここがどこなのかという心当たりが全くない。

俺……確か自分の部屋に戻ったはず……

そうやって俺が悩んでいると突然後ろから声をかけられた。

「お前さん、明日死ぬよ」

絵に書いたような老婆が俺にそう言い放つ。

「あ、あんた、誰だよ……？」

最初に口からこぼれた言葉はそれだった。

至極当然の疑問だと思う。

「お前さん、明日死ぬよ」

「いや、だから、あんたは誰なんだよ！　そもそも、俺は自分の家にいたはずなのに……ここは一体どこなんだ？　なあ婆さん、あんたはここがどこか知ってるのか？」

「お前さん、明日死ぬよ」

「分かったっての！　だからここはどこなんだよ！」

「お前さん、明日死ぬよ」

「分かったよ……もうやめてくれ……」

抵抗する気も起きず、その場にしゃがみこむ。

「お前さん、明日死ぬよ」

俺がなんの反応を示さずとも、

「お前さん、明日死ぬよ」

老婆は立て続けに耳元でそうつぶやき続ける。

「お前さん、明日死ぬよ」

もう……やめてくれ……

「お前さん……」

俺は……明日……

「……はっ！ はぁ……ここ……俺の部屋……ってことは、あれは夢……？」

飛び起きたベッドの上。朝日が少し開いたカーテンの隙間から差し込んでいる。来ていたパジャマは汗でぐっしょりと濡れていて気持ち悪い。何よりさっきまで見ていたあの夢……今でも鮮明に覚えている。確か……

お前さん、明日死ぬよ

「う、うわぁぁあ！？」

突然あの老婆の声が聞こえた気がしてベッドから飛び降りて部屋の中を見渡したが、老婆の姿は見当たらない……

「そ、そりゃあ、夢……だもんな……いるわけねえよ。」

時計を見れば、朝7時。

いつも遅刻ギリギリまで眠っている自分としてはかなり早い起床になる。

あまりに寝覚めが悪かったためもう一度眠ってやろうかと考えたが、いざ寝ようとするときさっきまで見っていた夢を思い出してしまい上手く寝付けず結局起きることになった。

自室を出て、リビングに向かえば母親がびっくりした顔でこちらを見ていた。

「あんた、おはよう。早いじゃないどうしたの？」

「ん、あぁ……なんでもない。目が覚めただけ」

「あっそ……ご飯食べるでしょ？」

「ん……」

そんな風に短い会話の後、机に運ばれてきた朝ごはんを平らげて学校に向かう支度をする。

学校ではいつもより早く起きたせいか眠気が酷く、ろくに授業に集中出来なかった。

まあ、授業に集中できないのなんていつもの事だし眠いならいっそ寝て過ごそうと考えたが、その度にあの夢のことを思い出して怖くて眠れなくなった……

「なんなんだよ……あんなただの夢だっのに……クソッ……」

眠気とピツタリと張り付くような恐怖で少し体調が悪い……

いつも通っているはずの帰り道もなんだか長く感じる。

トボトボと通りを歩いてあるビルの前を通り過ぎた時……

……ごしゃっ……

後ろから音がした。

「な、何……っ……オエッ……」

音のする方を見ると、そこにはおそらく人だったものが地面に広がっていた。

四肢はひしゃげて折れ曲がり、色んな所から骨みたいない白いものが皮を突き破って見えていた。顔は潰れて誰なのか判別はできないのに目だけは爛々とこっちを見ている……気がした。

「次はあんただよ。」

「っ…………!？」

あの老婆の聲がして振り返ったが、視界に入るのは野次馬だけ……

「オエツ…………」

もう一度、吐き気を催して逃げるようにその場を離れて家に逃げ帰った……

「ただいま…………」

「おかえり…………あんた大丈夫？」

逃げるように家に帰り、様子のおかしい俺を心配する母親の声を無視して部屋に入る。

「なんなんだよっ…………! 何が…………何が起きてるんだ…………?」

さっき起きたことが信じられず、布団に潜り、外からの情報を遮断する。

全く眠くないはずなのに気がつけば、俺の意識は遠くなっていた……

「ん…………ここは…………」

目を覚ますとそこはさっきまで歩いてきた帰り道……

いつも賑わっているはずのその道には、今は俺一人だけ。

「あんた、今日死ぬよ」

「う、うわあああ!？」

突然後ろから声をかけられたせいで変な声を上げてしまった。

「ま、またあんたかよ…………いい加減にしてくれ! 第一、一体どうやって死ぬってんだ!」

そこまで言った時、背後で何かが地面に叩きつけられる音がした……

「あんた、今日死ぬよ」

「は、ははっ…………俺もあんなふうに死ぬってか? 馬鹿言うなよ…………俺は、もう外になんて出ねえか

らな! それに俺の部屋は1階だ! 飛び降りなんて…………出来るわけねえよ!」

「あんた、今日死ぬよ」

うるせえ…………俺は…………

「うぐっ…………ってえな…………」

椅子から転げ落ちた衝撃で目を覚ます……

あ…………? 椅子から…………? 俺はベッドで寝てたは…………ず…………

その時、ふと机の上に白い封筒が置かれているのが目に入った。

「なんだこれ？」

手に取って見ればそれは遺書だった。それも俺の……

「なんでこんなもんが…………」

俺はこんなもの書いた覚えは無い、だがそこに書かれている字は俺の字だ……

「わかった…………これドッキリだろ! 誰だか知らねえが俺を騙そうとして…………」

そこまで言っていて気がつく。誰がこんな一般人が部屋でドッキリにかかっている姿なんて見たいんだ……

それにあの夢はドッキリなんかじゃない……

「つてことはこれは俺が書いて……あの夢も本物で……」

その時、部屋のドアがノックされた。

「あんた、何やってるの？」

その声は母親の声だった……

一人で部屋で騒いでいる俺を心配して声をかけに来たのだろうか……

なんでもない。

そう言おうとしたが声が出ない。

「起きてるんでしょ？ 返事くらいしなつて」

母親が部屋に入って来ようとしているのがわかった。そして手には俺が書いた遺書……

怖い。

それだけが頭の中に浮かんだ。

「うわああああ！」

そんな声をあげながら俺は部屋から飛び出した。

心配する母親の声を振り切って。

体にまとわりつくような恐怖を振り払いたくて。

街中を周りの目も気にせず走った。

どこか高いところへ行かなくちゃ。

走り疲れて気が付けばそこはビルの屋上。

別にあの時、ただ遺書を隠して母親に顔を見せれば良かっただけなのに……

ただ本能にしたがってあのビルの屋上に行かなくちゃと走ったが、そもそもこんなビルの屋上に来る必

要なんてないのに……

そんな疑問は無数に湧くが今、頭にあるのは部屋に置いてきたあの遺書のこと。

きっと母親はもう読んだだろう……

そして知ったはずだ。俺がこれから何をするのかを。

「ハハッ……こっから飛び降りりゃあ俺は嘘つきになんてならねえ……」

後ろから突然奇声をあげながらビルに入ってきた俺を追いかけてきた大人たちの物音がする。

震える足に喝を入れて鉄柵を乗り越える。

「俺は……嘘つきなんかじゃない……ほんとに今日、死ぬんだ……これは運命で決められたことで、避けられないことなんだ……」

鉄柵を掴んだまま下を覗けば、地面はずっと下に見えて恐怖で足がすくむ。それでも嘘を本当にするために勇気を振り絞って鉄柵から手を離す。ただでさえ不安定な俺の体に強い風が吹き付けてただ立っているだけで精一杯になる。もう後戻りなんて出来ない。出来るかもしれないが、きっと今戻って生きたくてそこに俺の居場所はない気がして。それでも恐怖ですくむ体を動かすために声を上げる。

「俺は、嘘つきなキノピオや狼少年とは違うんだ……俺は、俺は！」

そこまで言った時、

トンッ……

「あっ……」

誰かに、背中を押された気がした。

浮遊感。

「ほおら、お前さん今日死んだらろう？」

四肢はあらぬ方向に折れ曲がり、臓物やその肉を辺り一面に撒き散らし、物言わぬ肉塊となったそれの傍に立って老婆は言う。

「お前さん、本当にありがとねえ……」

物音を聞いて人々が集まる頃には、既に老婆は姿を消していた。

「ねえ、また飛び降り自殺だってさ……」

「また？ 最近多くない？」

夕暮れの教室で2人の少女が駄弁っていた。

「うん……やっぱりさ……あの噂って本当だったのかな……」

「噂？」

「聞いたことない？ 真坂様って言うんだけど……」

「まさか……様？ 何それ？」

「なんか、私も友達から聞いたんだけど真坂様っていうおばあちゃん？

に会った人はその後、

頭がおかしくなって飛び降り自殺しちゃうんだって……」

「何それ……こわぁ……てかさいつ何が目的なのさ……」

「そんなこと私だって知らないよ。でもきつとほんとにいるんだ……」

「はぁ……仮にそんなばあちゃんがいたとして飛び降りなきゃいいってことっしょ？

あたしまだ死

にたくないからへーきへーき。それよりさ、帰りにどっか寄ってかない？」

「今日も？ いいけど……」

「あ、なんか今日用事あった？」

「ううん、ただその……」

「ん？ どした？」

「やっぱりなんでもない！」

「そう？ まあそれならいいや。」

「うん……なんでもないの……」

いつも通り2人で並んで廊下を歩く。

いつもと違うところと言えば会話がなくなること……それくらい。

そうして2人が校門から一步外に出たその時、

「あのお……お嬢さん方？」

「ん？」

「おばあさん？　どうかしましたか？」

2人が振り返るとそこにはどこにでも居そうな老婆が立っていた。

「あんたら、明日死ぬよ」

「——とまあこれが私が関係者から聞いた真坂様についての話だね。結局その少女たちも2人で飛び降り自殺してしまったそうだが……いやあ、やっぱり調べた事は誰かに聞いてもらって初めて意味を持つね。この話も最期に君が聞いてくれて良かったよ。」

「ん？　なんでこんな話をしたかって？　それはまあ見ての通り私も真坂様に魅入られてしまったねえ……今もこのビルから飛び降りて死んでしまいたいと言う強迫観念に押しつぶされそうなんだ。」

「どうやらあの老婆は他人に知られると言うことが嫌いみたいだね。真坂様の噂を聞いて調べ始めた途端目の前に老婆が現れて魅入られてしまったよ。それから何とかやり過ごしてきたが、流星にもう逃げられないようだ……」

「おっと、止めないでくれ。私はここから飛び降りて楽になりたいんだ……最近は何もなかなか寝付けなくてね……想像してくれ、飯を食っていないのが、風呂に入っていないのが、寝ていようが……こうして君と話しているのが途切れることなくずっとあの老婆の声で飛び降りて死ねと囁かれ続けるんだ……」

「ただ、1つ。死ぬ前に気になっていることがあって聞いて欲しいんだ。それも真坂様についてなんだが……調べていてわかったことなんだが、初期の真坂様は夢の中にしか現れず、しかも声しか聞こえない存在だったようだ。だがそれがいつしか夢の中で老婆と言うガワを得て、今では現実世界にすら現れ始めた……これはあくまで私の仮説なのだが真坂様は飛び降り自殺者を出す度に何かしらの力を得ているのではないだろうか……もしこの仮説が正しいのなら私の死も真坂様の成長に繋がってしまうということなんだが……正直もうなんだっていい。今もここから飛び降りろと頭の中でうるさくてね。」

「いやあしかし、君が来てくれてよかったよ。1人で誰にも知られず死ぬのは正直癪だったからね。それにもここまで真坂様について調べて考察までしたのだから誰かに話したくなるのも当たり前だろう？　さて、私はそろそろ飛ばせていただが、あ……ああ、なるほど……とにかく、私の遺言を聞いてくれてありがとう。そして、済まない。」

そう言って彼は空へ身を投げた。

グシヤッ……

「なあ」

後ろから声がした。

なああんた、明日死ぬよ

眞実という嘘／杜江若糸

真実という嘘／杜江若糸

「先生！ 僕ね、大きくなったらお医者さんになって、病気の人たちを救いたいんだ！」

「無理です。現実を見なさい。あなたの学力では無理です。あなたの現在の能力からは肉体的労働をする仕事に適しています」

生徒は目に光無く、「はい、わかりました」と受け入れざるを得ない。

教師は、我々は嘘をつけない。だから夢を殺さざるを得ない。教室の黒板に掲げられているスローガンの額縁には埃が積もっていた。

「正直であることは、自由であること」「嘘のない真実の社会を開拓せよ」

皇歴2025年、日本で政権交代の動きが起きた。「真実こそが正義、嘘にまみれたこの国を白く美しい国に」という文言を謳い圧倒的な大衆の支持を得た政党、未来革新党が参議院選挙で圧倒的多数の議席を獲得し、政界への勢力を伸ばした。そして党首である錦羽田正義【にしぎばた まさよし】氏はその類まれなる弁舌の滑らかさと大衆を引き付けるカリスマ性でメディアにも多数出演し、大衆の人気を固くして、皇歴2028年10月、ついに錦羽田率いる未来革新党は衆議院でも圧倒的過半数の議席を獲得、与党第一党となった。当然内閣総理大臣は与党第一党の党首が選出される。建前として議員たちによる投票が行われるが、例年では野党は自分の党首を記名したり、別の議員を記名したりと満場一致になることは全くと言っていいほどない。しかし、錦羽田総理が誕生する瞬間は、投票465票による満票で拍手喝采の国会となった。

そして、錦羽田政権が推し進めた改革が「天照計画」である。真実を司る神、天照大御神の名を関して、そのまごうことなき真実を照らす光によってこの日本社会に蔓延る嘘を焼き尽くし一掃しようという計画である。大衆も錦羽田の政策に盲目的な期待を寄せていた。

皇歴2029年4月、政府から日本国民に向けて重要な話があるとして、テレビや全ソーシャルネットワークメディアを使い全国一斉生放送が行われた。そこで錦羽田が発表した内容は、日本から嘘を無くすため、全国民にマイクロチップを体内に埋め込むことを義務化するというものであった。以下、錦羽田正義内閣総理大臣による「天照計画における国民への要請及び協力に向けての演説」、通称4.10宣言の一部である。

「本日、日本国民である皆様らにむけて、まさに新たな未来という、宇宙に向けてロケットを打ち上げるような発表がございます。我々未来革新党が掲げてきた理想、それは「嘘の無い日本」でありました。嘘とは、真実をまやかして隠す霧です。嘘によって人は裏切り、嘘によって世界は戦争を起こし、嘘によって人は叶うはずもない空虚な希望を抱き絶望します。嘘は、我々日本社会に巣くう最も原始的で最

も有害な毒素であります。皆さんもこの人生の中で沢山の嘘に苦しんできたことかと思えます。だからこそ、私は信じているのです。真実によって構成されるこの白く清廉潔白なキャンヴァスに描かれる日本は、人間の持つ最大な可能性を引き出すのだと。真実という偽りのない光によってこの有毒な霧を晴らし、再び強き日本を取り戻す。最強国家の誕生であります。自由とは、恐怖ではなく、建前ではなく、真実の中にだけ存在し得るのであります。真実なき社会に自由など断じてあり得ない。

しかし、現実はまだ甘い。またこの国には「嘘をつく自由」が残っている。皆様からの熱いご支援と期待を受けこの日本の舵取りを任された私は、この悪しき自由を駆逐しなければならぬ、それが私の使命だと思っています。この嘘をつく自由は、他者を傷つけ社会を歪める許可証に他ならないのです。

よって私は本日、新たな法案「日本国民誠実義務化基本法」の施行をここに発表いたします。

本法によりこれから全ての日本国民は「対虚言癖症候群治療用制御装置」通称S.C.A.L.E（スケール、System for Cognitive Alignment and Lie Elimination）の導入を義務付けます。S.C.A.L.E、それは人間の認知を整え、社会に嘘を持ち込ませない、全く新しい社会を作り上げる理想の装置です。その装置が稼働することで最早嘘の概念そのものがこの国から消えてゆくことでしょう。これは脳内の言語中枢に微弱な信号を与えることで、嘘の思考や発語を未然に抑制する、きわめて安全かつ倫理的な技術であります。

自由が侵されるのではないか？ その声も当然あることでしょう。ですが考えてみてください。「嘘をつく自由」と「信頼される自由」、貴方はどちらを望みますか？ この国を世界で最も白く、清廉潔白で、人が人を、恐れずに生きられる社会を作る。これは誰かが犠牲になる社会ではありません。ただ、貴方だけが「真実を語る覚悟」をもてば良いのです。これは強制ではありません。我々は次の新たなステージへ旅立つのです。宇宙への船出です。さあ、日本国民の皆さん、嘘のない世界へようこそ。」

この演説を、当時まだ小学生だった少年、月田壮介【つきだ そうすけ】はテレビで祖母と眺めていた。

「ねえおばあちゃん、パパとママまだ帰ってこないの？」

「そうだねえ、パパとママは今日お仕事が長引くかもしれないって言っていたからねえ」

壮介の父母は共に研究員だった。脳科学の研究員として名を馳せており、特に父、月田誠二【つきだ せいじ】はパイオニアといっても過言ではない。人間の認知や脳機能の研究において輝かしい功績を残していた。

「…ただいま」

「あっ！ おかえりな、さい…？」

帰ってきた月田夫妻の顔はひどく沈んでいた。

「どうしたの？ 何だか顔が暗いよ？」

「ん、いや何でもないんだ。それより晩御飯買ってきたから、お風呂、先に入りなさい。」

「はあい」

壮介は軽い足取りで浴室に向かった。誠二は壮介が浴室に入ったことを確認した。

「……代美子さん。すみません、これからのことで話があります。壮介についてもですが」

「さっきの演説に関することでしょう。……分かりました。お話しなさい。」

「ありがとうございます。」

誠二は代美子と向かい合うようにリビングの椅子に腰かけた。椅子に深く座り込む。

「実は、僕たちはこの度、国に脳科学の研究者として協力することになりました。今日、研究所の所長から連絡があつて、錦羽田総理直々の使命だそうです。おそらく今日発表された装置の制作と監修を任せられることでしょう。しばらく家に帰れなくなります。何せ国家機密レベルの案件ですから。……それに錦羽田のことだ、奴は何をしてくるか分かりませんが、考えたくないですが、僕たちがどうなるか分からない。だから、申し訳ないのですが代美子さんに、壮介の世話をお願いしたいんです。」

壮介の母、月田美代【つきだ みよ】はただ俯くままである。

「……分かりました。本当は貴方たちを止めるべきだろうけれど、私には何も出来ないし、何よりあの子のことを思う気持ちは貴方たちの方がよっぽど上でしょうからね。でもこれだけは約束して。必ず壮介に1年に1回は顔を見せること、そして、必ず、社会の役に立つと。それが、壮介へできる貴方たちかなりの感謝なんじゃないかしら。」

「分かりました。必ずそうします。なあ、美代。」

「……分からない」

「？」

美代は俯いたまま話す。

「分からない。私には分からない……。何故嘘を無くそうとするのか。あそこまで嘘を無くすことにはだわるのか。嘘って、本当にいけないことなの？ 人を救うことだってあるはずなのに、私たちはこれから人権を侵害するような機械作りに携わらなきゃならないの？ いや

よ、こんなこと……こんなことただの犯罪じゃないっ」

顔に手を当て肩を震わせる美代を横目に、誠二は唇を噛みしめる。

「……美代」

そこに、何も知らない無垢な視線が向けられていた。

「……………」

明らかに晩御飯を用意する雰囲気ではない会話と普段見ることのない家族の姿を、壮介は浴室のドアの隙間から見つめていた。

それから時は過ぎ、「天照計画」は着実に進んでいった。日本国民に次々とS・C・A・L・Eは体内に挿入され、嘘を言うことが出来ない体へと変貌していった。壮介は記者会見を行う両親の姿や、ニュース番組でインタビューされる両親の姿をテレビで見ることが楽しみだった。しかし、ネットでは当然批判の対象となり、容赦ない誹謗中傷や身元特定もされはじめ、学校でも何人かにいじめられるようになった。それでも国のために頑張っている両親の姿をカッコいいと思う壮介は、屈することなくその意思を貫いていた。両親の仕事に誇りを

持っていた。そして、嘘がなくなることも良いことだと思っていた。

あの事件が起こるまでは。

皇歴2030年、内閣直属、認知科学倫理調整特別行政執行局（S.C.A.L.E管理部門）に一本の電話が入る。

「はいこちら行政執行局です。……ええ、聞いていますよ、月田夫妻の件でしょうか？ ……ええ、どうも最近仕事に身が入っていないと思っただらそういうことですか。……まあ限りなくクロに近いでしょうね。職員に彼らが謎のロボットを制作していたというタレコミもありますから。ゆくゆくは…なんてことも考えてるんじゃないでしょうかねえ、実に愚行ですよ。……え？ 錦羽田総理が…？ フハハハ！

いやはや総理は恐ろしいですよ、まさかそんな手筈を進めていたとは…やはり誰も総理には逆らえませぬ。まさに新時代の創造主だ。ぬかりがない。ええ、その後については私に任せてください。もみ消せばよいのでしょうか？ 全く総理は本当に嘘つきが嫌いなものだ。まあそんなネズミには消えてもらうのが一番ですな。しかし大胆なことを計画されるものだ、あの建物自体築年数は経っていたから新築するには丁度か…ええ、では」

局長はパソコンに移る月田夫妻の写真を見つめ、右頬を上げた。

「天才だろうと味方だろうと嘘は許さない、か。残念だったよ月田君。それではさようなら」

S.C.A.L.E制作兼研究所第2本部で月田夫妻はパソコンを開き、文書を作っていた。そこには「対S.C.A.L.Eに関する考察及びその機能停止方法」と題されていた。

「よし…これで完成した。あとはこれを世に送り出せば…」

そういうと誠二はUSBを取り外し、カバンの中へと入れた。

パソコンから離れ背伸びをすると、美代が入れたコーヒーを飲んだ。ほんのりと甘みがあった。

「もう、こんな世界はこりごりだ。言論は統制され、体内のマイクロチップで常時監視。そして錦羽田の独裁…終わらせなくてはならない、機械を作った張本人として」

とその時、美代がやってきた。

「ねえ、研究員さんたちが呼んでたわよ。何か執行局から届け物ですって」

「届け物？」

二人は研究員たちも集まっている制作本部へと赴いた。そこには謎の段ボール箱が届いていた。

「あ、誠二さん。これ、執行局からだそうです。なんでもスケールを創る機械をアップデートするための電波装置で、電源入れるだけでいいらしいですよ」

「アップデート…？ そんな話聞いていないし最近の生産効率はノルマを満たしていたはずだが…？」

怪訝な顔をしつつも、誠二は機械の電源ボタンを押した。するとピピッと音を立てて機械は起動し、画面には電波の送信状況を示すアイコンのみが表示されていた。

「……何も変わらないではないか。」

すると、スケールを作っていた機械が軒並み大きな音を立てて高速で動き出した。

「おお！ アップデートのおかげですかね？ 大分製造が早くなった気がしますね！」

「研究員たちは感嘆を漏らしていたが二人はどこか訝し気な顔だった。」

「うん……そうだな」

誠二には言葉に出来ない悪寒が襲っていた。

「これだけか、よし、じゃあ仕事に……」

戻ろうと言いかけたその瞬間、一人の研究員がすさまじい勢いで走りこんできた。

「大変です！製造ラインの機械が軒並みオーバーヒートしています！！ 中止命令も効か

ず、このままでは漏電が生じて爆発してしまいます！」

「何っ!？」

「早く制御室へ！一刻も早く！」

「美代っ！」

二人は白衣を靡かせながら制御室へ駆け込んだ。

ウウーと耳をつんざく甲高いサイレンと、ヴーヴーと腹に響く警報機が鳴り響きわたる。制御室のモ

ニターには大きく真っ赤な文字で「緊急事態発生」と「制御不能」の文字が映し出されていた。

「何をやっても止まりません！制御プログラムも、緊急安全装置も駄目です！」

「貸せ！」

研究員の横から制御用パソコンを弄る誠二。すぐに制御プログラムを開き実行命令を送るも効かない。

プログラムコードを確認しようとすると、パソコンのホーム画面に戻されてしまう。

「クソ、やられたか、あの送られてきた装置はウイルスだったんだ、この制御装置をダウンさせるための！」

制御室にある機械を軒並み弄るも機械はどうにもなりそうにない。ガタガタと立てる音は

大きくなるばかりで今にも壊れそうだ。

「ッ！、俺は諦めないぞ、どうにか、どうにか……！」

その後も必死に機械を止めようとするも、なす術は無かった。

「もう駄目だ！壮介、すまん！」

その咆哮の瞬間、研究所は赤い光と黒い煙を放って爆散した。木っ端微塵に建物は吹き飛び、周辺は瓦礫の山と化した。

壮介が速報を見たのは、いつも通り学校から帰り両親の出ているニュースを心待ちにしていた時だった。

「速報が入りました。内閣管轄のS・C・A・L・E制作兼研究所第2本部にて爆発事故が発生し、研究所職員合わせて100人以上の死亡が確認されました。警察は事故として原因を調査するということです。なお死亡が確認された職員にはスケール製造の第一人者である月田誠二さんと月田美代さんが確認され

ており、今後の政府の方針に影響が出る事が予想されます。

繰り返しお伝えいたします。内閣……」

代美子の手が止まった。目線は画面から離れなかった。

「な、なんだいそりゃ……？ 冗談は、よしておくれよ、し、死亡が確認されただって？ あんな、あんな瓦礫だらけでちゃんと確認できるって言うのかい！ ふざけるんじゃないよ！ 美代は……美代は……誠二さんは……」

壮介は何も思えなかった。何も感じなかった。不思議と悲しいという感情も湧いて来なかった。ただ、胸に大きな穴が開いた感じがした。テレビの前で泣き崩れる代美子ばあちゃんを見てただ事ではないことは理解していたが、体が追いついていない様子だった。涙は一滴もこぼれなかった。

それから数日後、家には二人の遺品と遺骨が送られてきた。白衣はポロポロに焼けこげて、形を成していたのはカバンぐら이었다。二人の遺影も送られてきた。最後の見たのはずつと前だった、笑顔の写真だった。

「壮介……どうか、気を落とさず生きておくれ、私にとって、お前が、最後の希望だから……」

最後の希望。そう言われた壮介は、ばあちゃんの為に生きようと決意したのだった。

それから月日が経ち皇歴2038年。壮介は高校2年生になった。日本からは本当に嘘が消えた。いや、正確には、嘘を口にできない体にしてすべての国民がされた、というべきである。

S.C.A.L.Eの挿入はすでに義務化され、全国民が例外なくそのチップを体内に抱いている。嘘をこうとすれば喉が詰まり、声が出なくなる。考えようとしただけで、頭の中に走る痛み。誰もが「本音」しか言えず、誰も「本音」を交わさなくなった。高校の廊下では、いつも静かな沈黙が支配している。朝のホームルームは、誰の声も響かないまま始まり、終わった。教室に差し込む冬の光は薄くて冷たく、誰の顔にも影を落としている。誰も無駄なことは言わない、否、言えないのだ。「おはよう」や「寒いね」のような取り留めのない言葉は存在しなくなった。社交辞令すら虚偽として喉に引っかかる。その度にS.C.A.L.Eが作動し、喉奥に鈍い電痛が走る。

「……ノート、見せてくれない？」

隣の席の女子が言った。だが目には一切の笑みは無い。

「君の字が綺麗だからとかじゃなくて、私が寝坊して何も書けなかったから。」

そう淡々というノートを奪うように持って行った。クラスメイトとの関係もこういう風にししか成立しない。相手を気遣う為の優しい嘘は存在せず、感情を包み隠すことも出来ない。壮介は机に頬杖を突きながら、それを見ていた。一段と寒く感じる。冬のせいではない。教室が冷えているのは心の問題だった。教室の左端に目をやると、政府発行のスローガンが印刷されていた。

「嘘のない人間こそ、最も誠実な国民である」

壮介はスローガンの横に張られた通知を見て眉間に皺を寄せた。「スケールメンテナンスのお知らせ」。明日、全校生徒のS.C.A.L.Eチップが一斉点検されるらしい。嘘をつかないための装置。歯医者

定期健診のようになっていいる現実には、壮介はもう驚きさえしなかった。その時、ふと耳元で声があった。

「なあ、月田。…：…なんでお前いつも黙ってるんだ？」

さっきの体育の授業でペアを組んだクラスメイトが声をかけてきた。声は普通だったが、視線は冷たかった。壮介は少しだけ口角を上げた。

「…余計なことを言えば、誰かを傷つけるから。」

それは真実だった。だが、その言葉の裏にある本音、本当は、誰かを守るために何か言いたいという願いは、どこにも行き場が無かった。

放課後、空は夕焼けというには薄すぎる灰色をしていた。冬の陽はもう沈みかけていて、壮介の足元に伸びた影は長く、頼りなかった。

「なあ、月田」

昇降口で、昼間話しかけてきた男子がまた声をかけてきた。

「お前さ、今日も一言も笑ってなかったな」

壮介は立ち止まる。

「笑っていたら何か変わった？」

「…：…いや、別に」

男子は言いながら、シューズを履く手を止めなかった。

「でも、俺はたまに思うんだ。誰かがつまらない嘘でもついてくれたら、楽になるんじゃないか。えのかなって」

壮介は目を細めた。けれど、その感情がなんなのかは分からなかった。

「名前、何て言うの？」

「五十嵐、五十嵐誠【いからし まこと】」

「…：…そう。じゃあまた、五十嵐君。」

「おう、またな。」

壮介は五十嵐と別れて家への帰路についた。

家に帰ると祖母が炬燵でうたた寝していた。か細い寝息が聞こえる。テレビは無音のニュースを流している。画面の下に「全国のS・C・A・L・Eメンテナンسسケジュール」がどこ

までもスクロールしていた。壮介は静かにカバンを下ろし、祖母の側に座った。そっと布団を掛けなおすと、祖母は静かに目を開けた。

「あら、帰っていたのね…：…ごめんなさい、夕飯まだ…：…」

「…：…ゆっくりしてて」

喉の奥に一瞬引っかかる感じを覚えながら壮介はそう言った。

自室に戻ると、見慣れない紙袋が置いてあった。中には汚れたカバンが入っていた。父のカバンだった。遺品として預かっていたが、今まで祖母が預かっていた為触れることが出来な

かった。部屋の片づけをする際に出しっぱなしにしたのだろうか。

壮介は父のカバンを開けてみた。想像よりもいい状態で中身は保存されていた。名札や父の使っていたハンカチ、そして、

「USBメモリ：？」

銀色の外装に、一つだけ手書きのラベルが貼られていた。「S・C・A・L・Eについて」。手が止まった。何かが変わる。直感がそう告げていた。そして同時に、もう戻れなくなるという確信も。壮介はUSBをそっと握りしめ、机のノートパソコンを開いた。画面が立ち上がると同時に祖母の寝息がかすかに聞こえてきた。世界は静かだった。しかしその静寂の奥に何かがうごめいているような気がした。

私は、錦羽田正義から、嘘を人間がつけなくなるような装置を、と頼まれた。錦羽田は、元は私と同じ研究所で働く職員だった。まだお互いかなり若いころの話だから記憶が定かではないが、彼は芯のある人間だった気がする。特段悪いやつという印象は無かったが、彼の眼つきや言動からは時折冷気を感じるがあった。そして彼は何より嘘つきが嫌いだった。理由は分からない。だが恐らく、かつて何か嘘に対するトラウマがあったのだと思われる。その後彼は政界に挑戦してその熱い芯のある人間像が人々の共感を呼び見事当選、そこからはとんとん拍子でついには総理の椅子まで手に入れてしまった。そんな総理大臣からの命令では、ただの研究員は拒否できない。だから私は、言い訳がましいかもしれないが作りたくてスケールを作ったわけではない。そのため私はここにスケールの停止方法と、今作っているロボットについて書き記す。まずスケールの停止方法だが、スケールを停止させるにはスケールを統制するサーバを停止させなくてはならない。そしてそのサーバを止めるためには「プセウドス」というカギが必要だ。カギを使ってサーバールームの電源を落とせば、日本のスケールはすべて停止する。そしてロボットについてだが、錦羽田は目的の為ならば手段を厭わない。どんなことをしてきてもおかしくない。聞くところによれば奴は認知世界を利用するらしい。その為武力でも対抗できるよう「対人用武力応戦兵器参式アスピス」を開発した。彼女は必ず君の助けになるはずだ。彼女はここではないもう一つの、家から近い、私的な研究所にいる。目覚めさせてやってくれ。

嘘は確かに人を惑わすかもしれない。でも、私は嘘のない世界は少し嫌な気がする。うまく言葉にできないこの想いは、君が何とか言ってくれと信じている。どうか、ささやかな嘘を取り戻してほしい。

父親からの想いを託された壮介は、嘘を取り戻す決意を固めた。その為にはまずロボットを起動させて、錦羽田のいる所へ殴り込みに行く必要がある。しかしいくら何でも1人で乗り込むのは無謀だとも思っていた。もうすぐスケールの一斉メンテナンスが行われる。この機会を逃したらもうチャンスは巡って来ないかもしれない。壮介は静かに眠る祖母を確認したのち、父のメッセージに記された研究所へと向かうのだった。

そこは研究所と呼ぶには少し狭くて小さな建物だった。うっそうとした木々の中にその建物はあった。

父親のカバンに入っていた少し錆びている鍵を使って中に入る。机の上には書類が無造作に置かれていて周りは本でいっぱいだった。埃の多さからしばらく出入りもなかったことだろう。そんな暗い部屋の中で、片隅に大きな箱が置いてあった。縦長で高さは175cmほどだろうか。

明らかに様子が部屋の物とは異なる。もしや、と思い壮介はその箱を開いてみた。中には艶やかな金色の髪をした少女が眠っていた。顔を見れば人間と見分けがつかないほどだが、体に目を向けると腕は金属の光沢があり体にはコアと思われる結晶のようなものが埋め込まれていた。しかし機械的な姿もとても洗練されていて、人間的な美しさが感じられた。壮介

はその美しさから思わずコアに手を触れた。すると、少女の体から電子音が鳴りだした。

「……声帯認証を行います。私の名称を声に出してください。」

声も幾許か年を経た少女の声だった。クラスメイトに似たような声の持ち主がいた気がするような声だ。

「……対人用武力応戦兵器、参式、アスピス」

「声帯認証を完了しました。起動モードに入ります。」

ピピピピピという音が鳴りだすと、少女の体が動きだした。箱から出て目を開けた彼女の瞳は綺麗な瑠璃色をしていた。

「あなたが私のマスターですね。初めまして。私は対人用武力応戦兵器参式アスピスと申します。私の役目はマスターをお守りすることです。声帯認証の結果貴方はマスターだと認識されました。お名前を教えてください。」

「月田壮介」

「壮介様ですね、了解しました。では壮介様。どうされますか？」

「どうって言われても、これから僕の身を守ってさえくれればそれで……」

「成程。分かりました。では壮介様の身を常時守れば宜しいですね」

「あ、ああ。これからよろしく頼む」

それから道を歩く時のご飯を食べるときもお風呂に入るときも寝るときも見守られるのはまた別の話である。

家への帰り道の途中、壮介は五十嵐と出くわしてしまった。五十嵐はアスピスを見て足から頭まで観察するように見入ってしまった。

「な、おいおいなんだそいつは……俺は夢でも見てるのか？」

「……夢だと言ったら？」

「ねえな。嘘はつけないからな。」

そう言いつつも未だに信じがたい顔をしている五十嵐に、壮介は一步步み寄る。

「なあ五十嵐、お前前に学校で僕に言ったよな。誰かがつまらない嘘でもついてくれたら楽になるんじゃないかねえのかなって。やっぱり、この現実には納得いってないよな？」

「……んだよ、それがどうしたのか。」

「なら、僕と一緒に、嘘を取り戻しに行かないか？」

「…は？」

「僕は両親を事故で亡くしたけど、それは政府が関連していた研究事業だったし、何よりこのあらゆる嘘が全くない社会に納得がいけない。だから錦羽田には浅からぬ縁がある。でも、一人じゃ立ち向かえない。だから仲間が欲しい。お前はこの社会に納得していない。僕と同じだ。だから、一緒に錦羽田に立ち向かわないか？ 抗って、嘘を取り戻すために。」

真剣な顔つきで五十嵐は壮介の目をじっと見つめながら聞いていた。何か見定めるような目。話が終わると、五十嵐は大きくため息を吐いてからこう言った。

「…まったく、面白そうなやつだとは前から思っていたけど、まさか現職の総理大臣に抗おうとするやつだったとはな、こりゃ大物になるに違いねえな。そんな奴に協力しないのは勿体ない。」

首をポキポキならして背伸びをする五十嵐。そして彼は手を差し出した。

「いいぜ。乗ってやる。嘘、取り戻してやろうぜ。」

「五十嵐……！」

「この話自体が嘘でしたとかやめてくれよ？ っいてもみんなスケール入ってるから嘘はつけねえのか。」

そういって二人は笑った。電柱の影から二人のやり取りを見ていたアスピスは構えていた武器をそっと下ろしたのだった。

全国スケールメンテナンスまであと3日。アスピス、壮介、五十嵐は近くのショッピングセンター「サティ」のフードコートに集まっていた。アスピスは金属部分を隠すため厚着をしている。

「全国スケールメンテナンスが三日後に行われる。そこでいよいよ日本は錦羽田の手に堕ちるわけだが、ここでこれを見てほしい。」

五十嵐はスマホの画面を見せてきた。

「錦羽田正義による演説のお知らせ…●月田日、場所…新国会議事堂三階（なおこの放送は全国へ各種SNSプラットフォームにてライブ配信されます）」

「錦羽田が確実にいるのはこの時、しかも三日後だ。スケールによって自分の理想社会を誕生させた勝利宣言みたいなものだ。ここしかねえ。ここで錦羽田を倒してカギを手に入れる。」

壮介は震える手を握りしめた。失敗は出来ない。一回きりの大勝負だ。

「でもどうやって中に入るおつもりですか？」

アスピスは淡々とした口調で表情を変えることなく五十嵐に問いかけた。

「それは…：壮介、お前どうにかならないのか？ 親御さんの知り合いとかさ。」

「もう両親が死んでだいぶ経つし、そもそも僕と関わりがある人なんていないよ。」

五十嵐は腕を組んで考えてしまった。壮介もどうしようかと思ふとスマホの電源をつける。

そこには、メールボックスに赤い1が浮かび上がっていた。

「差出人…元認知科学倫理調整特別行政執行局長 幾太修一」

かつて父と母が所属していた機関の名前に壮介は目を疑った。幾太修一という名前は耳にしたことすらなかったが、果たして敵か味方かも分からない。だが、

「この人なら…」

「ん？ どうした？」

「アテが見つかったかもしれない。」

「マジか！ じゃあ後は乗り込んでからだな。」

そう言うと壮介と五十嵐はアスピスを見つめた。

「私の体に何か問題がありますでしょうか。現在自己検査を行った所異常は見つかりませんでした。」

顔を全く動かさずに話すアスピスをみて五十嵐は苦笑いを浮かべる。

「ほんとにこいつが護衛兵器なのか…？ あんまり強くなさそうだよな。お前、なんか出来るのか？」

「私の機能を開放しますか？ その場合現地点から半径100mは焼土と化しますがよろしいでしょうか。」

そういつて彼女は背中から変形した砲台を構えた。あわてて五十嵐が止めに入る。

「わ、分かった！ お前が強いことはじゅーぶん分かった。よし、これで安心だな。…ホッ」

思わず笑いがこみ上げてきた壮介は久しぶりに息を漏らして笑ったのだった。

●月○日。夜。東京都霞ヶ関新国会議事堂前。車の排気音や人混みの雑踏音は感じられず、異様な静けさに包まれている。間もなく錦羽田正義の演説の時間である。

「準備。いいか？」

五十嵐は夜風に靡くシャツの内ポケットをたいた。そこにはUSBメモリが入っている。

「ああ、終わらせてやる。嘘を、錦羽田から取り戻す。」

「なんか夜に大事なものを盗りにいくって俺たち義賊っぽいよな。」

へへっ、と笑う五十嵐に壮介は少し呆れるが、頼もしさも感じていた。程なくしてスマホに一通のメールが届いた。

「攪乱させる手筈は済ませた。新国会議事堂のエレベーター解除キーも添付しておいた。亡き誠二くん、美代さんの願いを叶えてくれ。健闘を祈る。」

「…：幾太って人、本当に協力してくれたのか？」

「うん。彼は10年前、錦羽田に“S.C.A.L.E”を人間から切り離すべきだ、と進言してクビにされたらしい。」

「その人もまた、嘘を信じた人なんだろうな。お前の両親みたいに。」

夜風が壮介に強く吹く。澄んだ空気は壮介の鼻腔を僅かに凍てつかせた。

「間もなく時間です。向かいましょう。」

アスピスが構える。

「よし、行くぞ！」

三つの影が、聳え立つ権力の王城へと走っていった。

一方、新国会議事堂1階エントランスホール。場内は大勢の職員が慌てふためいていた。警報機が鳴り響く部屋のモニターには、「自爆装置作動 直ちに避難を」と赤い文字でそこらかしこに表示されていた。またそこには「We taking back the lie you stole from me」と仮面の絵文字と共に大きく書いてあった。

「緊急避難命令、緊急避難命令。職員は速やかに避難してください。これは訓練ではありません。せん。繰り返します…」

ぞろぞろと職員や政治家が慌てて外へと逃げ出す。

「に、錦羽田総理の演説は一体どうするんですか!？」

「バカ、そんなこと気にしとる場合か! 早く脱出せねばならん! 錦羽田総理もきつと脱出されていることだろうて。ささっ、早く!」

警備員も監視員も例外では無かった。そうして皆新国会議事堂から逃げていった。ただ一人の男を除いて。

三人の影がエントランスに現れる。エレベーターに近づくスマホが反応し扉が開いた。幾太が仕掛けた偽自爆装置作戦は成功だったようだ。そして乗り込んだ3人はエレベーターの634というボタンを押した。錦羽田の「総理室」があるのは634階だからである。グオンという響きとともに東京の夜景が小さくなっていく。そして、ベルの音と共に扉は開かれた。

日本国内閣総理大臣国会採択案調印兼行政執行室、通称「正義の部屋」。そこに立ち入った

誰もが、記憶を無くす部屋。

三人がその扉を開いたとき。激しい眩暈がした。そして目を開けると、錦羽田は奥の方、断罪のマリアに囲まれた祭壇に立っていた。錦羽田の目の前にそびえる、赤ん坊を胸に抱き慈しみの笑顔を向ける巨大な女神像を見つめながら。

そこは現実と呼ぶにはあまりに不的確な空間だった。祭壇までの道には十字架が立ち並び、蛇が磔にさされている。空からは、白い羽と銀貨がふわりと舞って落ちてくる。そして部屋の最奥には、ぼんやりとした光をまとう白き月が、自転していたのだった。

錦羽田は振り返らない。三人は、その不気味な空間を進みながら、錦羽田のいる祭壇に進んでいったが、彼は背を向けたまま何も言葉を発しなかった。

「…賊が入ったか。」

振り向いたその背広姿は間違いなく錦羽田正義の声であった。真紅に輝くその瞳を除いて。

「錦羽田正義……！ お前から今まで奪われてきた嘘を取り返しに来た、お前は独善的で歪んだ正義感と真実で多くの人を踏みにじってきた、その報い、受けてもらうぞ！」

壮介は落ち着いた、しかし怒気のこもった声でそう言った。しかし、彼から発せられた言葉は懺悔ではなかった。

「親譲りだな。優秀で、しかし残念ながら理論より信念で動く。全く、後始末が悪い。」

「僕の両親は。あなたの『真実』に殺された……！ その空虚で傲慢な真実に！」

壮介は強く拳を握りしめる。

「違うな。奴らは『嘘』に殺されたのだよ。自分の中に残っていた、僅かな、しかしあまりに愚かな未練という嘘にな。」

錦羽田は手を広げて語り始める。

「私は信じている。嘘とは文明に生じた汚らしい膿だ。人はその身勝手さから、傲慢さから、卑屈さから、真実を見ぬようと仮面の笑顔を張り、偽りの優しさで人を欺く。なんと見苦しいことではないかね。だとすれば嘘を消すのは当然のことであろう。嘘とは害悪極まりないものだ。」

「そんな独りよがりな偽りの正義の為に、お前は世の中の罪のない人々から嘘をつく力を奪ったのか……」

何の関係もない人を！ そればかりかお前の傲慢な欲望で何人もの人を

犠牲にした！ 正しいわけないだろ！」

五十嵐が詰める。

「改革に犠牲はつきものだ。すべての事象は等価交換なのだよ。人は何かを得るためには何かを払わなくてはならないのだ。それにお前たちは道端の蟻を何匹踏みつぶしたかいつも確認しているのか？ 気にしては先に進めん。使えん愚民どもが価値あるものへと生まれ変わるのだ。異論はなからう。」

言い終わりと同時に鐘の音が鳴り始めた。そして錦羽田の姿は巨大な鬼の姿となった。

「なぜ私が総理大臣に選ばれた？ それは、運命の神が私を選んだからだ！ 真実は存在

し！ 嘘は存在しないのだ！ 紛い物の嘘と共に華々しく散れ！」

錦羽田の渾身の一撃を、壮介と五十嵐はギリギリまで引き付け間一髪のところまで避けた。

空ぶった錦羽田は衝撃でくるくると目を回している。

「アスピス！ 今だ！」

「はい！」

アスピスの手から渾身の波動砲が放たれる。錦羽田に直撃し周りは爆発によって何も見えない。やがて視界が晴れると、ボロボロの錦羽田が膝をついていた。

「ぐっ、敗れるか、この私が。こんな、小童どもに……」

「…観念してもらうぞ。」

「フッ、負けだ。私の、負けだ。…哀れかな、真実が嘘に敗れるとは。いや嘘など存在せぬという真実が嘘だったか……」

錦羽田はカギを壮介に投げ渡した。その途端、地面に倒れた。

「…貴様たちによって、嘘は、取り戻された。だがそれは安息の嘘なのだろうか？ 絶、そして真実から免れる為の…」

苦渋や拒

「違うな。確かにそういう嘘もあるだろうよ。嘘ってのはな、人間が弱いからつくもんだ。だがな、それは人間が人間らしい証でもあるんだよ。お前がしてきたことは、人間を人間で無くしていることと同義だったんだ。お前は完璧な真実っていう理想に溺れて、一番の人間らしさを捨てたんだよ。」

「…人にとっての理想社会は、そもそも、人を人でなくしていたか…」

錦羽田はゆっくりと壮介を見た。

「…殺せ。お前たちの勝ちだ。」

「殺せ？ ふざんけんな、死んで逃げるなんて許すかよ。生きて罪を償え。」

「ぐっ…」

こうして錦羽田は五十嵐に拘束され、壮介はカギを使ってS・C・A・L・E制御室に入り、電源を落とし、全国のS・C・A・L・Eは停止して嘘のある世界が戻ってきたのだった…。

それから数か月後。かつてのように全てが元に戻ったわけではない。だがそれでも、人々には嘘のある日常が戻って来た。

街頭では漫才師が自虐ネタで笑いを取り、学校では子供が宿題を宇宙人と遊んでたせいで出来なかったと言ひ、公園のベンチではカップルが少し照れながら「大丈夫」と嘘をついて、互いの心を守っていた。コメンテーターのありふれた意見、バラエティのあからさまなヤラセ、そしてそれを笑う視聴者の姿。

それはかつては不完全な世界だった。だが、今の壮介たちにはその不完全さこそが、人間らしさの証だったと知っていた。壮介は学校の屋上で、夕焼けに照らされる街並みを見つめていた。手の中の珈琲缶はほんのり温かい。

「…これが、俺たちが守った町だ。」

笑いながら歩く人々の姿を、五十嵐は飄々と見ていた。その向かいにはアスピスがじっと壮介を見つめていた。

「俺今ちょっとだけ、お前といるのが楽しいわ。」

「それ、嘘じゃないよな？」

「さあ？ どうだろうね。嘘かマコトか…それは神のみぞ知るので…ってね。」

ニヤリとして壮介は答える。

「神は死んでるぞ。」

「フッ、このやろ。」

久しぶりに壮介から笑みがこぼれた。風が吹いた。少し冷たいがどこか心地よい風だった。住宅街をすり抜け、街路樹を照らしながら通り過ぎてゆく。

人間は嘘をつく。それは確かに仇となる。だが、それこそが人が人である証だと、壮介た

ちはいまなら言える、

壮介は空を見上げた。どこまでもどこまで赤く染まる空の彼方に、白い月は顔を覗かせていた。

奥付

奥付

奥付

案山子 2024夏号

<https://puboo.jp/books/page/write/135031>

著者：新潟大学文芸部

<https://puboo.jp/users/sindaibungebu>

電子書籍プラットフォーム：ハブー (<https://puboo.jp/>)

運営会社：デザインエッグ株式会社

案山子二〇二五 夏

著 者 新潟大学文芸部

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
